

# マルクス 研究会 年誌

Marx Society of Japan Yearbook vol.4

## 第 4 号

MEGA 第IV部門第18巻 (1864年2月から1868年10月、  
1869年11月、1870年3月、4月、6月、1872年12月の抜粋ノート) 解題  
羽島有紀 [訳]

恐慌論と利潤率の低下  
デヴィッド・ハーヴェイ / 小谷英生 [訳]

2020

# マルクス研究会年誌

## 二〇二〇

羽島有紀「訳」

M E G A 第IV部門第一八卷（一八六四年二月から一八六八年一〇月、一八六九年一月、一八七〇年三月、四月、六月、一八七二年一二月の抜粋ノート） 解題

デヴィッド・ハーヴェイ／小谷英生「訳」

恐慌論と利潤率の低下

凡例

マルクス研究会について

活動記録

規約

## 凡 例

- ・マルクスとエンゲルスの著作からの引用は、基本的にMEW (*Marks-Engels-Werke*, Berlin, 1956-1990) と新MEGA (*Marks-Engels-Gesamtausgabe*, Berlin, 1975ff) からなされている。MEWからの引用は文中にMEWと略記したうえで巻数と頁数を表記し、邦訳の指示がある場合は『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店, 一九五九―一九九一年)の対応する巻の頁数を表記した。MEGAからの引用は文中にMEGAと略記したうえで、部門と巻数、頁数を表記した。
- ・引用文(翻訳文)において、ゴシック体は原文で強調された箇所(翻訳文の場合はイタリック体)、二重傍線部は原文で隔字体で強調された箇所、傍点は引用者(翻訳者)による強調、「」で括られた箇所は引用者(翻訳者)による註釈を示す。
- ・以上に関して、個別の論文で指示がある場合はそちらが優先される。

## マルクス研究会について

本研究会はカール・マルクスの理論および思想について自由な議論を交わす場を提供し、マルクス研究の発展に寄与することを目的として設立されました。マルクス・エンゲルスの歴史的・批判的全集であるMEGA (*Marx-Engels-Gesamtausgabe*)を活用した研究によって新しいマルクス像を明らかにし、その思想の可能性を探求することを目指しています。また、さらなる研究の発展のために、海外の研究者との連携をおこなっていきます。

### [主な活動]

#### 1. 年次大会の開催

年に1回、大会をおこないます。複数人の研究者による研究報告や、規約に定められた事項の議決をおこないます。

#### 2. 定例研究会の開催

年に3回、定例研究会を開催します。院生を中心とした若手研究者の発表、本会所属の研究者の発表、研究会外からの関連分野の講師の招聘、関連分野の新刊書籍の合評会などをおこないます。

#### 3. 研究年誌の編集作成

年に1回、研究年誌を発行します。本会の会員は、研究年誌に論文を投稿し、掲載のための審査を受けることができます。

### [運営組織]

共同代表：岩佐茂（一橋大学名誉教授）・平子友長（一橋大学名誉教授）

事務局長：明石英人（駒澤大学准教授）

## 会員制度のご案内

マルクス研究会では、会員制度を設けております。入会あたって、本研究会会員の紹介のうえ、幹事会の承認が必要となります。また、以下のいずれかの条件を満たしている必要があります。

A. 大学院修士課程ないしは博士前期課程、博士後期課程に在籍している者

B. 大学院修士課程ないしは博士前期課程を修了した者、またはそれに準ずる研究業績のある者

C. 上記A・Bを満たさない者のうち、幹事会によって認められた者

入会を希望される方は、入会申込書（ホームページから入手いただけます：<http://marxresearchsociety.com/membership/>）に必要事項をご記入のうえ、本誌奥付に記載しております連絡先の住所まで送付いただくようお願いいたします。

### [会費]

学生・非常勤研究者・一般：2,000円

常勤研究者：4,000円

### [会員の権利]

1. 本会主催の年次大会、定例研究会等に参加できます。

2. 研究年誌を会員価格で受け取ることができます。また同誌に論文等を投稿できます。

3. 本会のメーリングリストに参加できます。

MEGA 第IV部門第一八卷（一八六四年二月から  
一八六八年一〇月、一八六九年二月、一八七〇年三月、四月、六月、  
一八七二年一二月の抜粋ノート）**解題**

羽島有紀 訳

駒澤大学講師

18341 [目次]

『資本論』第一巻の仕上げ

『資本論』と農業問題。「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」

マルクスの経済学批判にとつての自然科学の重要性

掠奪農業と人間と自然との間の物質代謝の攪乱

一八六八年の三冊の「農業ノート」における物質代謝概念の拡張

一八六八年の抜粋ノートにおける『資本論』第二部および第三部のさらなる準備

資本主義の周縁にて

本巻は、カール・マルクスによる五冊の抜粋ノートと四冊の手帳を収録しており、それらとともに著者四〇人四九冊の著作、三九の議会報告書、二冊の小冊子、百科事典からの五つの項目と二五の新聞記事からの抜粋および新聞の切り抜きと覚え書きを収めている。それに加えて、マルクスによる二つの独立した抜粋とフリードリヒ・エンゲルスによる三つの抜粋も含まれている。ヴィルヘルム・ヴォルフから遺された本のリストと「ヴィルヘルム・ヴォルフについての伝記的覚え書き」を除き、すべてのテキストが初めて公刊されるものである。

抜粋ノートと手帳は、マルクスによって、『資本論』第一巻を執筆している間および『資本論』第二部、第三部の準備と推敲を行っている間に作成された。それらは主に一八六四年二月から一八六八年一〇月の間に作成され、マルクスは一八六九年一月、一八七〇年三月、四月、六月および一八七二年一二月に、さらなる資料で補うためにそれらに立ち返った。四冊のノートにおける抜粋の大部分は農業というテーマ領域を扱っている。すなわち、地代論や農芸化学、地質学および植物学のような自然科学、**[80]**英国、米国、フランス、日本、ロシア、アイルランドおよびインド等の国々の農業諸関係、資本主義以前の社会における土地所有と農業事情についてである。それゆえ、これら四冊のノートは、「農業ノート」という編集上のタイトルがつけられている。

マルクスは、エンゲルスに対して一八六五年五月一日に「実際に過労になっている」、「というのも、一方では、僕の本の仕上げのために、他方では「国際労働者協会」のために、途方もなく時間を取られて」いたからだ」とぼした「**[1]**」。この時期、マルクスは一八六四年九月に創設された国際労働者協会（**I A A**）の中央評議会において中心的な役割を果たしていたが、そのことは本巻の諸抜粋によって裏付けられる。

一八六三年夏から一八六五年末までの間に、マルクスは『資本論』全三部の第一草稿を執筆し、引き続き、第一巻に手を入れた。この時期に、本巻で公刊された「農業ノート」のうちの「一八六五／一八六六年の大ノート」が成立した。一八六七年九月に『資本論』第一巻が出版された後、マルクスは一八六八年一月から『資本論』第二部および第三部のための研究を、三冊のさらなる「農業ノート」、すなわち「一八六八年のノート一」、「一八六八年のノート二」および「一八六八年のノート三」、ならびに「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」において継続し、一八六八年の春から新たな経済学草稿の執筆を開始した。本抜粋集は、当時計画されていた『資本論』の範囲に照応した幅広い研究分野を示しており、さらにそれ以上のものでもある。この抜粋集はマルクスが成し遂げたもののなかで理論的にも政治的にも最も実りの多い時代の産物である。抜粋はマルクスの研究・執筆過程における継続と深化を示しているが、また考え方の一新と新たな出発をも示しており、それらが『資本論』の完成を困難にしたのだろう。ノートの多彩な内容は「一八五〇—一八五三年のロンドン・ノート」を想起させる。そこでマルクスは同様に、狭義の経済学を越え、農芸化学、地質学、植民地主義、前資本主義的生産様式および文化史など多様な分野を研究していた。

本巻では五冊の抜粋ノートのほか、マルクスの四冊の手帳が公刊される。この手帳には本や新聞からの短い抜粋、覚え書き、友人やI A Aの構成員および事務所の住所、膨大な書誌情報、日付け、経費の記録、数学的な計算など様々な資料が含まれている。

「一八六四年二月から六月までの手帳」(S.5-31)には、とりわけヴィルヘルム・ヴォルフから遺された二五〇冊の本のリストが含まれている。ヴィルヘルム・ヴォルフは、マルクスとエンゲルスの長い友人であり政治的同志でもあり、二五〇冊の本は彼の死とともにマルクスが相続したのである(S.11-17; 成立と来歴S.889-898)。

「一八六四年五月から一八六五年半ばまでの手帳」(S. 326)で、マルクスは、ヴィルヘルム・ヴォルフの病氣と死やフェルディナンド・ラサールの死といった一八六四年の出来事を記している。この手帳にはそのほかに、マルクスがその後『資本論』第三部の草稿において組み入れた剰余価値率と利潤率についての様々な計算が含まれている(成立と来歴 S. 920-922を見よ)。

【89】さらに、マルクスは一八六四年五月ないし六月に「ヴィルヘルム・ヴォルフについての伝記的覚え書き」を書き、その中でヴォルフの生涯のいくつかの時期を書き留めた。彼は、ヴォルフについての伝記的な概要を執筆しようと考えていた(S. 62 成立と来歴 S. 931/932を見よ)。

マルクスは、「国際労働者協会についての手帳」と編集上名付けられたもの(S. 65-102)を一八六四年一月から一八六六年二月までと一八六八年三月から五月までおよび一八七〇年六月に執筆した。それは、決議文や住所、会員証や委任状の写し、とりわけ I A A で行われた講演「価値、価格および利潤」のために彼が準備したものによって、マルクスの I A A での活動を示しており、この過程で彼はわざわざ抜粋を作成し、的を絞って統計報告を調査した(S. 7483)。「価値、価格および利潤」での統計報告についてこれまで出典が不明であったすべてのものは、本編集で確定することができた(成立と来歴 S. 934-935を見よ)。

同様に編集上『資本論』第一巻のための手帳」と名付けられたもの(S. 328-347)は、一八六七年五月から八月の間および一八六八年二月に作成されたが、これは『資本論』第一巻の出版と関連している。これは『資本論』で引用されているダンテ・アリギエーリ(S. 331)やトマス・ヘンリー・ハクスリー(S. 341)の諸著作からの短い抜粋、また同様にルドルフ・フィルヒョー(S. 336)やカール・フリードリッヒ・ランメルスベルク(S. 338)およびフリードリッヒ・ベンヤミン・オジアンダー(S. 340)の諸著作からの抜粋を含んでおり、これら

はおそらく、マルクスの一八六七年のドイツ旅行——その間にマルクスは『資本論』の草稿を個人的に出版社に送った——の際に作成されたのであろう。さらに、この手帳は『資本論』第一巻のための印刷全紙の校正作業の際に作成された約三〇の指示も含んでおり、これらによって校正作業の進捗を跡付けることができる(『328/329』(成立と来歴S.1024-1032を見よ))。

本巻の中心をなすのは四冊の「農業ノート」である。

「農業ノート」の「二八六五／一八六六年の大ノート」(S.105-326)は、本巻で公刊された五冊の抜粋ノートのなかで唯一『資本論』第一巻の出版前に完全に作成されたものであり、そこでマルクスは地代や土地価格の形成についての様々な議論を扱っている。これらの研究は、土地疲弊論について述べたユストゥス・フォン・リービツヒの『農芸化学』第七版を読んだことで始まるが、このことはマルクスに大きな影響を及ぼした。続く抜粋は、ギュスターヴ・ド・モリナリとイポリット・フィリベール・パツシーの『経済学辞典』の二つの項目、エドモンド・ジェイムズ・スミス、ヒュー・スミス、ジョン・ロックハート・モートン、ジョン・イーヴリンの諸著作、また農業における機械設備の発展についての諸著作(ヴィルヘルム・ハム)やイングラランド(パトリック・エドワード・ダウ)、フランス(レオンス・ド・ラヴェルニユおよびルイ・ムニエ)、熱帯諸国(モーリッツ・ワグナー)、日本(ヘルマン・マローン)およびアメリカ合衆国(ジェイムズ・フィンレイ・ウィア・ジョンストン)における農業についての諸著作からのものである。このノートのそれ以外のテーマは、一八四七年および一八五七年の経済恐慌や「銀行法」についての議会報告書のほか、ベルギーの労働者階級の状態(「フランマン人の社会を前へ! 前進宣言」[1837]、アンリ・グレゴワールおよび「パティニーの民主会議の報告」)である。最後に、アドルフ・ケトレーの『社会システムについて』からの抜粋がある(成立と来歴S.957-986を見よ)。

『資本論』第一巻の出版直後の一八六八年の前半、マルクスは経済学および自然科学の研究とともに第二部および第三部の準備を継続した。とりわけ、主に一八六八年一月から夏までの間に作成された三冊のさらなる「農業ノート」において、マルクスはリービッツの土地疲弊論をめぐる論争を徹底的に追究した。この三冊の「農業ノート」の連続性は以下のことから明らかである。すなわち、マルクスは「一八六八年のノート一」で始めたオイゲン・デューリング『国民経済学説の批判的基礎付け』やカール・ニーコラウス・フラース『農業の本質』およびジョン・チャーマーズ・モートンが編集した『農業百科事典』からの抜粋を「一八六八年のノート二」において継続しており、また「一八六八年のノート二」で始めたゲオルク・ルードヴィヒ・フォン・マウラーの『マルク・ホーフ・村落・都市制度の歴史序説』やフランツ・クサーヴァー・フォン・フルーベク『農業総論』からの抜粋を「一八六八年のノート三」においても続けているのである。

「農業ノート」の「一八六八年のノート一」(S. 388-395)に含まれているのは、一八六八年以前になされた、主にフランスの、経済学以外の文献についての一連の短い抜粋のほか、一八六八年一月／二月になされた、フリードリヒ・アルベルト・ランゲ(S. 376-379)、カール・アルント(S. 380/381)、デューリング(S. 382-385, 405-407および411/412)およびフラース(S. 393-404および434)といった著者による、リービッツの土地疲弊論を支持した、あるいは否定した著作からのいくつかの抜粋である(成立と来歴S. 1038-1058を見よ)。

続いて、マルクスは、一八六八年二月、三月に「農業ノート」の「一八六八年のノート二」(S. 453-594)でさらに他の経済学の著作から抜粋を行っているが、それらはトマス・ロバート・マルサスやデイヴィッド・リカードの地代の問題点を扱っているものである。すなわち、リカードに対するトマス・ウェントワース・ビューラーの応答(S. 464-468)、マルサスとリカードに対するJ・C・ロスの批判(S. 482/483, 494-5, 499-510)およ

び地代と土地価格についてのデイヴィッド・ローの論文 (S. 487-489) である。ゲオルク・ブリュクナーの『土地および人別にみたアメリカの最も重要な特徴』からの抜粋 (S. 517/518) は、ジョンストンの『北アメリカノート』に対する補足とみなすことができる。それに加えてマルクスは「労働組合法」の展開と一八六六年夏にバルチモアで開かれた全米一般労働者評議会の八時間労働日に関する決議についても読んでいる (S. 324)。フランク・クサーヴァー・フォン・フルーベクの他に、マルクスはもう一人のリービッチ批判者に取り組んだ (S. 531-547 および 560-562、さらに「一八六八年のノート三」 S. 601-618 でも抜粋している)。フルーベクとフラーズは異なる観点からリービッチを批判している。すなわち、フルーベクは、今日、腐植説の最後の支持者の一人とみなされているのに対して、ミュンヘン大学教授のフラーズは土地の豊度の規定における「自然的」および「気候的」次元を重視し、リービッチがそれらをおざりにしていることを非難している。マルクスはリービッチの『農芸化学』をさまざまな観点から [83a] 批判的に検討することによって、同時に土地の性質、植物生理学、気候および土地疲弊の原因とそれを可能な限り防止するために講ぜられるべき措置についての知識を深めた。このような方法でマルクスは、彼の地代論を実証的、歴史的および自然科学的な見解で強化したのである (成立と来歴 S. 1089-1101 を見よ)。

「農業ノート」の「一八六八年のノート三」 (S. 585-736) において、一八六八年三月以降、マルクスは自身の農学研究を古代ギリシャやゲルマン社会の農業にまで拡張し、特にその所有システムに着目した。フラーズの『時間における気候と植物界』 (S. 621-627) やマウラーの『マルク・ホーフ・村落・都市制度の歴史序説』 (S. 589-600) ——この本からの抜粋は「一八六八年のノート二」で始まった (S. 542-559 および 563-577) ——は、マルクスに対し一八七〇年代に、資本主義以前の社会について取り組むためのきっかけを与えた。これらの抜粋

はきわめて詳細なものであり、また、マウラー研究はマルクスにとって死ぬまで重要な役割を果たした（成立と来歴 S. 1122-1145 を見よ）。

一八六八年四月／五月に作成された「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」(S. 737-809) は、マルクスの「固定」資本と「流動」(Gütsigem)資本との概念的区別に関する研究によって特徴づけられ、それは『資本論』第二部の準備に役立った。ここでマルクスが並行して抜粋したのは、ヘンリー・ダニング・マクラウド (S. 743-745, 769-776 および 780-785)、『ジョン・ソーン (S. 746, 754, 760, 766-768, 777-779, 786-792 および 803-806)』、ロバート・ホガース・パターンソン (S. 749-751, 755, 762-765, 793-802 および 807/808)、『アレクサンダー・サンデルリン (S. 761) およびアントワヌ・エリーゼ・シュルビューリエ (S. 752/753)』のさまざまな著作からである。固定資本と流動 (Zirkulierenden) 資本の研究に引き続き、マルクスはさらに、信用制度や貨幣市場、貸付可能資本、経済恐慌の問題について、マクラウドやレインおよびパターンソン等々の出版されたばかりの著作から抜粋を行った。それゆえ、このノートは編集上「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」と題されている。さらにそれはジョン・ララー (S. 758/759) やフランシス・デイヴィー・ロンジ (S. 756) の著作からの短い抜粋を含んでおり、後者はとりわけヘンリー・フォースセットによって主張された「賃金ファンド」論 (マルクスは「農業ノート」の「一八六八年のノート」で抜粋していた (S. 354/355)) に反論するものであった。(成立と来歴 S. 1182-1194 を見よ)。

「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」とおよそ並行して、マルクスは「農業ノート」の「一八六八年のノート三」において、マウラーやフラス、フルーベクからの抜粋の後に、三四の議会報告書から索引の形で膨大な抜粋を作成した。英国大使館と領事の三〇の商況報告書 (S. 628-664)、『インド・オリッサでの飢饉について』の三つの報告書 (S. 670-676) および英国鉄道制度に関する「鉄道についての王立委員会」の報告書 (S.

670-698)である。資料集の作成と分類にあたってマルクスが焦点を当てていたのは、『資本論』の二つの未刊行部をさらに推敲することであった。彼は本抜料あるいは[639]報告書そのものを、とりわけ『資本論』第二部のための第二草稿において利用し、輸送産業と在庫形成についての諸章ではじめて用いた。「一八六八年のノート三」では、その後には作成された抜料が続くが、それはアドルフ・スレイドの『トルコとクリミア戦争』(S. 723-726)や週刊新聞『コベットのポリティカル・レジスター』(S. 701/702)であり、またニコライ・ガヴリーロヴィチ・チュルヌイシェフスキー『宛名のない手紙』の当時未公刊の草稿の抄訳(S. 705-719)もある。本抜料がテーマ的に多様かつ膨大であるとはいえ、マルクスには自身の研究にとって十分なものはみえなかったため、そのためマルクスは、抜料の間も継続的に書誌についての覚え書きを——たとえば、抜料した本からや、大英博物館やロンドンの書籍商のカタログから——作成した。このようにして、マルクスは、本巻において、ヴィルヘルム・ヴォルフから遺された本のリストのほかに合計約七〇〇冊を書き留めた。

本巻の第二の部分を作成しているのは、フリードリヒ・エンゲルスによる「一八六四事業年度のドイツ鉄道統計」や、「サタデー・レビュー」および「シューヤ・イヴァノヴォ鉄道」についての「モスクワ報知」から三つの短い抜料である(S. 813-820)(成立と来歴S. 1207/1208 および 1210を見よ)。

## 『資本論』第一巻の仕上げ

一八四八／一八四九年の革命の失敗の結果、マルクスと家族はロンドンに移り、そこで死ぬまで暮らした。

マルクスは大英博物館の閲覧室で経済学分野についての膨大な研究を始めた。彼は『経済学批判』[2]の出版までに約一〇年、また『資本論』第一巻を発表できるようになるまでにさらにおよそ一〇年を要した。彼の徹底的な、しかしゆっくりとした研究方法は多数の草稿や抜粋ノートに表れているが、マルクス一家はたいてい経済的にとても困窮していた。マルクスが『資本論』を、「この「呪われた」本」[3]と呼び、それは彼に幸福も健康も家族も犠牲にさせた「4」が、しかし、「きっと、これまでにブルジョア（土地所有者をも含めて）の頭に投げつけられたもっとも恐ろしい礫」であるとしたのは理由のないことではなかったのだ「5」。彼の代表作は家族や友人、政治的同志の支援なしには成立することができなかっただろう。エンゲルスとならんでヴィルヘルム・ヴォルフは[840]重要な支援者だった。マルクスとヴォルフは一八四六年に知り合い、一八四八／一八四九年の革命の間「新ライン新聞」でともに活動した。同じくイングランドに亡命したヴォルフは、一八六四年五月九日にマンチェスターで亡くなり、彼の財産の大部分をマルクスに遺贈した。マルクスは「一八六四年五月から一八六五年半ばまでの手帳」のなかで、「ループスの遺産から」小計「二三五ポンド」の入金(588)とその後数週間の貨幣の支出について帳簿を付けている。マルクスは合計でおよそ八二四ポンド・スターリングをヴォルフの遺産から受け取った[6]（成立と来歴580を見よ）。

遺産を受け取った後、マルクス一家がすぐに彼らの借金を返済したことは、マルクスが手帳に記録したとおりである。これらの記録は、いかに彼らの生活が病氣と借金によって影響されていたかを明らかにしている。というのも、マルクスは質屋に対してだけで約四〇ポンド・スターリング(530; 581+および86)、医療費の支払いに二九ポンド・スターリング(585)という額の支出を記録しているのだ。その後、彼はヴォルフについての伝記的な概要を執筆するということを思いついた。彼は一枚の紙にそれに関連する重要な情報を書き

留めた(S.62を見よ)。マルクスは彼の「忘れがたき友、勇敢、誠実、高潔なプロレタリアート闘士」ヴォルフに『資本論』第一巻を捧げた[7]。

『資本論』の執筆にとって、マルクスが相続し、「一八六四年二月から六月までの手帳」でリストアップした二五〇冊のヴォルフからの遺贈本もまたいくらかの価値があった(S.111を見よ)。マルクスはリストのうち一二冊を『資本論』草稿において使用し、その後八冊を抜粋し、二二冊は彼の個人蔵書において引き継がれ、さらに一〇冊はSPD図書館の目録で確認することができた、つまり、おそらく死ぬまで彼が所持していた(成立と来歴S.890-893を見よ)。

これらの手帳および「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」は、そのほかに一八六七年までの『資本論』草稿の一連の補足資料と準備資料を収録している。これには、一八六四／一八六五年の手帳における「剰余価値率と利潤率との関係についての計算」が含まれる(S.374, 43および454f)。ここでマルクスはすでに、『資本論』第一巻のドイツ語版第二版[8]の自家用本における覚え書きより前に、資本の有機的構成の上昇にもなって利潤率もまた上昇する場合を扱っている[6]。さらに、「一八六五／一八六六年の大ノート」で作成された、恐慌と「銀行法」の作用の仕方に関する報告書からの抜粋は、並行して作成されたコメント付きの資料集「混乱」を想起させるが、マルクスはそれを[84]『資本論』第三部のための草稿の第五章に添えた[9]。しかし、これらの抜粋は「混乱」の章では使われず、第五章の他の箇所でも部分的に用いられた(S.109-117 および255-261。成立と来歴S.959-961を見よ)。最後に、マルクスは「国際労働者協会についての手帳」において、一八六五年一〇月一日のイングランド銀行の報告書を抜粋し、それをもって『資本論』第三部での「信用資本」の構想は終わっている(S.83。成立と来歴S.949を見よ)[1]。

さらに、『資本論』第一巻においてマルクスが用いたのは、「児童労働調査委員会報告書」(S. 32)やジョン・チャーマーズ・モートンの「農業において用いられる諸力について」(あるいは一八六〇年一月二日の『エコノミスト』における講演の再録)(S. 82, 1830)、「パティニーの民主会議の報告」、つまりエドゥアール・デュクペティオーの「ベルギーの労働者階級の経済収支」からの章句を要約したもの(S. 121/122)、「フラマン人の社会を前へ！ 前進宣言」(S. 118/119)、アンリ・グレゴワールの「ブリュッセル裁判所での活版印刷人」(S. 120)、一八四七年の恐慌についての議会報告書(S. 117)、ダンテ・アリギエーリ(S. 32)およびトマス・ヘンリー・ハクスリー(S. 34)であり、また同様に一八六四年一月九日のエンゲルスの手紙からの一節(S. 97/98)の抜粋も用いられている。また、「農業ノート」の「一八六八年のノート」——マルクスは一八六八年のはじめに研究を再開するにあたってノートを新たに利用する前に、すでに一八六四年以来、比較的短めの抜粋をそこに書き込んでいた——からも、彼が『資本論』第一巻で用いたものがあつた。それは、ヘンリー・フォーセットの『英国労働者の経済状態』からの抜粋(S. 354/355)のなかにあつた、ジョン・スチュアート・ミルが打ち立てた「賃金ファンド」論についての議論であつた。マルクスは「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」において、ミルに対する決定的な反論の一つとみなされていたフランシス・ダヴィ・ランゲの著書『賃金ファンド論の反論』からの抜粋で、この論争に再び立ち返っている(S. 756を見よ)。それ以前にマルクスは『資本論』第一巻において彼の批判を展開していた<sup>[2]</sup>。

## 『資本論』と農業問題。「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」

もっとも、「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」の『資本論』に対する最大の貢献は、一八六五年二月に書かれた第三部の「地代」についての章の準備のためにそこで行われた研究であり、それは第一巻第四章「機械設備と大工業」にも表れている<sup>[13]</sup>。マルクスは、<sup>[14]</sup>『資本論』第三部の準備において、利子生み資本についての第五章を執筆するにあたり「一八五〇—一八五三年のロンドン・ノート」から膨大な収集資料を参照した一方で、地代についての第六章のためには再び農業問題について研究することが必要であると判断した。彼は、「一八六五／一八六六年の大ノート」において、地代の形成や土地価格の規定といった経済問題を扱ったが、『経済学辞典』という辞典から行われたイポリット・フィリベール・パッシーの「地代」やギユスターヴ・ド・モリナリの「穀物」の項目の抜粋はそのための例である。マルクスは、地代についての章の執筆にあたり、このノートを何度も利用し、とりわけパッシーを、地代の源泉をより詳細な形態規定なしに土地の剰余生産物のうちに見ていると批判した<sup>[14]</sup>。マルクスはすでに「一八六一年から一八六三年の経済学草稿」において「差額地代」についても「絶対地代」についても説明していた<sup>[15]</sup>という点では、「一八六五／一八六六年の大ノート」での抜粋は、二次文献による補足や更新という特徴を部分的には有している。そのためマルクスは「一八六五／一八六六年の大ノート」が完結する時にエンゲルスに以下のように書いている。「僕は地代に関する僕の理論的研究を二年前に終えた。そして、ちょうどこの間に多くのことが、しかもまったく僕の理論を確証しつつ、成し遂げられた」<sup>[16]</sup>と。

ただし、一八六五／一八六六年のマルクスの研究の独自性は、土地の豊度に関して自然科学的研究を開始したという点にある。マルクスは継起的資本投下によって豊度が変化する精確なメカニズムに興味をもっていった。地質学や農芸化学に取り組んだ後、マルクスは古典派経済学者たちの欠陥を指摘したが、彼らは具体的な土地の性質をその目に捉えていなかったであろうし、それゆえ継起的資本投下の問題を適切に扱うことができなかつたのである。すなわち「現実の自然に即した土地疲弊の諸原因は（……）差額地代について書いたすべての経済学者に、その当時の農芸化学の水準のために当然知られていなかった」[17]。マルクスがここで念頭においているのは、当時進行していた、とくに農業の集約化から生じる土地疲弊の問題である。

マルクスの土地疲弊問題への取り組みは、ユストゥス・フォン・リービッヒに改めて向き合ったことの結果であった。マルクスにとってリービッヒの『化学の農業および生理学への応用』（以下『農芸化学』）がいかに重要であったかは、[18]「一八六五／一八六六年の大ノート」において作成された彼の抜粋の分量からだけでも明らかである（S. 129-130）。『農芸化学』を読んだ直後、マルクスは彼の興奮をエンゲルスに次のように伝えている。「ドイツにおける新しい農芸化学、ことにリービッヒとシェーンバインは、（……）この問題〔地代についてのマルクスの議論〕に関しては、すべての経済学者をまとめてもそれ以上に重要である」[18]。

ギーセンで化学の教授をしていたリービッヒは、異性体および安息香酸の発見につながったフリードリヒ・ヴェーラーとの実験のゆえに、「有機化学の父」とみなされ、また同時に彼独自の特許肥料を生産していたことから「化学肥料の父」とみなされている[19]。彼の画期的な著作である『農芸化学』にもとづくこうした名声は、ドイツの国境をはるかに越えていた。『農芸化学』の初版は一八四〇年にブラウンシュヴァイクで出版されて、リービッヒの存命中に第七版に至るまでいくつかの改訂と補足を加えて再版され、彼によって

一〇〇〇ページ以上の分量にまで拡充された。この本で彼は化学と生理学の最新の知見を用いて、実際の農業のためには無機的な植物栄養分と化学的な土壌分析についての学説が重要であることを述べた。それにもなつて彼は、ジェルダス・ムルダー（ユトレヒト）やアルブレヒト・テア（ツェレ）のいわゆる腐植説に反対した。腐植説は、枯死した植物の分解物である腐植が、耕土において、植物の成長のために不可欠な栄養素であるとしていた。リービッヒはこれに対し、実験室での多くの試験をもとにして、植物は腐植あるいは水に溶解した腐植酸ではなく、二酸化炭素と水を吸収するということを示した。より重要なことは、植物にとつて腐植だけでは十分ではなく、その成長には一連の無機物質が絶対に必要であるということを彼が立証したことであった。ここからリービッヒは「補充の法則」を導き出した。すなわち、土地の豊度を維持するためには、どんな農業者も土地から取り出した無機質を規則的に土地に戻さなければならず、あるいは収穫を増大させるためには、土地に、より多く補給しなければならない。同時に、リービッヒは農業の発展のためには人工的な無機肥料が重要であることを強調した。マルクスは、すでに一八五一年七月／八月の「ロンドン・ノートⅫ」において、『農芸化学』第四版（ブラウンシュヴァイク、一八四二年）から全面的に抜粋を行っていたが、それは彼が地代の形成とリカードウの「収穫通減法則」への批判に取り組んでいたときであった<sup>20</sup>。

しかしながら、リービッヒは自身の無機説とともに激しい論争を生み出した。それは主として彼が無機物質の役割を誇張していたがために生じ、しかも彼の論駁がアンモニアを植物の栄養源として強調する窒素説に対しても向けられるようになるにつれ、いっそう激しくなった。マルクスはこの無機説と窒素説の議論をきわめて正確に追い、また [Footnote] 一八六二年にはリービッヒがジョン・ベネット・ローズやジョセフ・ヘンリー・ギルバート（ともにロザムステッド）に対して書いた著作『農業における理論と実践』（ブラウンシュヴァイク、一八五六年）

から抜粋を行った<sup>[21]</sup>。これら窒素説の擁護者に対して、リービッヒは、土地は雨水や大気を通じて十分な量の窒素を含んでいるという理由から、肥料中のアンモニアによって人工的に補給することのいかなる利益をも否定するところまで進んだ。リービッヒの『農芸化学』は、部分的には論争的な性格を持っていたにもかかわらず、一般に高く評価された。

そして、リービッヒの著作は『資本論』にも影響を及ぼしたはずである。マルクスは、リービッヒの『農芸化学』についての新たな取り組みのきっかけを与えられた。というのも、この一八六二年の第七版には重要な変更がなされていたからである。この著作はいまや二巻本（第一巻「植物の栄養補給の化学的過程」、第二巻「耕作の自然法則」）になっており、一〇〇ページにおよぶ分冊で出版された序論（「耕作の自然法則への序論」）をともなっていた。「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」においてマルクスは、リービッヒの『農芸化学』を抜粋したが、補遺に再掲されたモリッツ・ヴァーグナーやヘルマン・マローンの寄稿論文（S. 183f. 190）および「ホーエンハイムのエミール・ヴォルフ博士と農芸化学」のなかの窒素説に対するリービッヒの反論も含めて抜粋したのである。

リービッヒは、彼のいくらか忘れ去られていた名声を『農芸化学』第七版で急速に取り戻すことができたが、それはこの著作が再び激しい論争を呼び起こしたからであった<sup>[22]</sup>。リービッヒは、化学や生理学の最新の展開に関して自身の著作を補足しただけでなく、序論において「掠奪経済」としての近代農業システムの根本的な批判も行った。近代農業は植物の栄養分を土地に戻すことなく土地から取り出しているが、それは農業者が自分の利潤についてただ近視眼的にのみ関心をもっているからであり、またそれにともなつて、土地の豊度は、将来世代への考慮なしに、収穫物の販売を通じて急速に貧困化させられるからであるとされた。リービッヒか

らすれば、このことは「掠奪農業」以外の何物でもないという。また、土地豊度の自然法則は都市と農村の対立が進むことよって侵害されるだろう。なぜなら都市で消費された土地の成分は土地に戻るのではなく、汚水として大都市のひどく汚れた川に行き着くであろうからである。リービッチは、飢饉や原料争いの時代を、また土地疲弊にもなつて存立の物質的基盤を失うであろうヨーロッパ文明の崩壊を警告していたのだ。

ヴィルヘルム・ハム——彼の著作である『イン格蘭ドの農業用具と機械』（フ라운シュヴァイク、一八五六年）をマルクスは同様に「一八六五／一八六六年の大ノート」に書き留めている（S. 299, 310を見よ）——は、リービッチの新しい『農芸化学』をきわめて肯定的に評価し、「この本でわれわれは[65]永久的な農業の不文律を受け取った」<sup>23</sup>と述べた。こうした見解をもつたのはただハム一人だけではなかった。農学者だけでなく、経済学者もリービッチの貢献を重要なものと考えた。ヴィルヘルム・ロツシャーはすでに一八六五年に「リービッチの最新の農芸化学研究の諸結果」を「国民経済学」に取り入れ、そうすることで「本質的に受容し、ただ国民経済学によりよく定式化」<sup>24</sup>しようとした。マルクスは、そのつど最新の書誌情報を収めたロツシャーの『国民経済学体系』の新版を注視し、また可能な場合には一八六五年版を読むことよつてリービッチの『農芸化学』にともなう新たな論争の取っ掛かりをつかんだのである。

リービッチを読んだ後、マルクスは「一八六五／一八六六年の大ノート」において、すでに以前に受容した著者に再び立ち返つた。それはジェイムズ・フィンレイ・ウィア・ジョンストンであり、マルクスは今回、彼の『北アメリカノート』（S. 311-320）から抜粋している。ジョンストンはスコットランドの地質学者であり、以前マルクスが「ロンドン・ノートⅢ」および「ロンドン・ノートⅣ」で引用した著作<sup>25</sup>で、植物の成長にとつて地中の無機物質が重要であることを立証したことで、同様によく知られた農芸化学者でもあった。それゆえ、

ジョンストンはより肥沃な場所を見つける見込みを高めるために、土地の地質学的組成をも分析していた。マルクスは、当時、ジョンストンの地質学に感銘を受け、彼を「イングラランドのリービッチ」と呼んだ<sup>26</sup>。

『北アメリカノート』においてジョンストンは、自身のニューイングランド旅行をもとにして北アメリカの農業の具体的状況を扱った。マルクスはこの著作を一八五〇年代のはじめ以来知っており、そのときは『エコノミスト』からの二つの記事<sup>27</sup>を通じて受容し、エンゲルスにすすめていた<sup>28</sup>。マルクスがジョンストンの新たな旅行記を勉強したということは驚くべきことかもしれない。というのも、マルクスは「平素は、職業上強制されないかぎり、<sup>29</sup>旅行記を読むようなことは概してな」<sup>29</sup>からだ。しかし、リービッチと同様にジョンストンもまた、北アメリカにおける農業の掠奪システムが土地の豊度を急速に消耗させているという差し迫った問題を指摘している。ジョンストンによれば、アメリカ合衆国からイングラランドへの穀物輸出は持続的ではありえない。なぜならアメリカの農業者は無機質な土地成分についての考慮なしに、またいづれの施肥もすることなしに土地を耕作しているからである。土地が疲弊してしまうと彼らはまだ耕作されていない「処女地」を貨幣で購入するために土地を売り、さらに西へと移動するだろう。このようなシステムのもとでは、土地の自然力の浪費と搾取が常態であろう。アメリカの農業は短期的な利益のために土地の豊度を浪費しているのだ。

マルクスは、「一八六五／一八六六年の大ノート」において、農業問題に関してもう一つの旅行記を、しかもヘルマン・マローンによる日本の農業についてのものを抜粋している。これはリービッチが自身の『農芸化学』第七版の補遺において抜粋し再掲していたものである。日本を旅行したマローンはヨーロッパの農業に比べて日本の農業がもつ優位性を称賛している。というのも、日本の農業は人間の排泄物を肥料として効果的に収集

し、使用し、グアノや人工肥料をまったく補給することなく、家畜飼育もなく、また飼料用植物の栽培もなく持続的に高い収穫を獲得できていたからである。ここで重要なのは、リービッヒ (S.173.10) と同様、マローン (S.186.26) もまた、日本の農業を特徴づけるために用いていた「持続性」という概念である。ヨーロッパの農業システムは、持続的な生産のための諸条件を充たしていないだけでなく、地力を浪費する。そのためリービッヒがそれらを「掠奪農業」と非難したのと同様、マローンはそれらを「見せかけの耕作」(S.186.37) と批判した。エンゲルスに対してマルクスは「日本についての説明も〔……〕この点では重要だった」[30] とマローンを肯定的に引き合いに出している。マルクスが『資本論』第一巻において日本の「模範的な農業」[31] について書いたとき、彼は確実にマローンの報告書を念頭においていた。

近代農業の消耗的な傾向についてのこれらの分析にマルクスは大きく共感した。リービッヒやジョンストンが土地疲弊の問題を都市と農村の対立関係の結果として問題にしたことは、資本主義において支配的な地理的対立という、『ドイツ・イデオロギー』以来マルクスがもっていた以前の、より一般的なテーゼを詳述し、またそれにひとつの科学的根拠を提供した[32]。それにもない、マルクスは自然科学の観点から、いかに土地収量の減少が近代に独自の形態で現れるかについて、以前よりもより精確に理解した。土地収量の減少についてのリービッヒのニュアンス含みな取り扱いをもとにして、マルクスは、資本主義的生産様式の中でいかに自然的限界が具体化されるかを理解することができた。それゆえ、彼は[33]「一八六五／一八六六年の大ノート」において、地代の理論とやらんで、いろいろな国々の農業の状況やその技術学的発展段階、さまざまな経営様式、社会的諸関係にも関心をよせ、とりわけ持続的生産の物質的諸条件の掘り崩しに関心をよせた。リービッヒやジョンストンのほかに、ラヴェルニュやムニエ、マローン、ヴァーグナーからも彼が抜粋したことはこの

関連を示している。

マルクスが導き出した結論は、『資本論』第三部での地代論の完成を待つことなく、直近の機会において土地疲弊をめぐる議論に介入するということであった。第一巻を仕上げる間に、彼はリービッツの理論から得た洞察を第四章第四節「機械設備と大工業」に組み入れた。「資本主義的生産様式は、それが大中心地に集積させる都市人口がますます優勢になるにしがって、一方では、社会の歴史的原動力を蓄積するが、他方では、人間と土地との間の物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料のかたちで消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地豊度の永久的自然条件を攪乱する。こうしてこの資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを、同時に破壊する」<sup>[33]</sup>。

マルクスは脚注においてリービッツの『農芸化学』についての高い評価を繰り返した。「自然科学の立場からなされた現代的農業の消極的側面の展開は、リービッツの不朽の功績の一つである」<sup>[34]</sup>。マルクスがリービッツの「農業史に関する歴史的概観も、粗雑な誤りがないわけではないが、「……」現代のあらゆる経済学者の諸著作を合わせたよりも多くの光明を(含んでいる)」<sup>[35]</sup>と付け加えたとき、彼はとりわけ「リカードウ学派」の著者を念頭においていた。彼らは、いわゆる「土地の収穫通減の法則」で、あらゆる社会に対して通用する自然法則として収穫はつねにより少なくなるという土地生産性の直線的減退を単純に想定していた。リービッツとは対照的に、リカードウ学派は土地の豊度の自然科学的研究も、土地豊度の歴史的に独自の減少を引き起こす近代農業の経営様式の特異性も、無視していた。

それゆえ、このようにしてマルクスは化学や地質学、気候学、生理学の最新の自然科学的知見を自身の経済学的分析に利用した。彼の研究は、生産の自然的制約についての理解の発展や社会的進歩の評価だけでなく、

資本主義的生産様式の分析のための概念的および方法論的基礎にも役立った。こうしてマルクスは労働力と自然力というふたつの根本的な生産要素に対する資本主義的な掠奪農業への批判を豊かにし、[36]『資本論』において警告したのである。「日々ますます威嚇的に膨れ上がる労働運動を度外視すれば、この工場労働の制限は、イングランドの畑地にグアノを注ぎ込んだのと同じ必然性によって余儀なく行われたのである。この同じ盲目的な掠奪欲が、一方の場合に土地を疲弊させ、他方の場合には国民の生命力の根源をすでに襲っていた」[36]。一方で、リービッチが警告していたのは、農業におけるグアノ——海鳥の排泄物で、肥料として利用され、英国の土地の豊度は南アメリカからのこのグアノの輸入に依存していた——の浪費であった。他方で、マルクス自身が分析していたのは、資本がその「剰余労働への渴望」[37]によって特徴づけられるように見えること、またその結果として生じる労働日の「残酷な」延長と労働の強化であった。マルクスがエンゲルスに伝えたように、一八六六年のはじめに、彼は『工場監督官報告書』、『児童労働調査委員会報告書』および『公衆衛生報告書』といった英国議会の報告書にもとづいて「労働日」についての章を拡充した[38]。マルクスは労働諸条件の悪化を詳細に叙述し、それらを一〇時間労働日のための新たな階級闘争の契機と解釈した。これらに刺激されて、彼は持続的な生産の物質的諸条件を掘り崩すことに対する批判を深めるために、自身の注意を土地疲弊へと向けた。彼の叙述は、「機械設備と大工業」の章の最後の節で最高点に達したが、この章はブルジョアジーによる生産力の発展といったものを称賛するのではなく、冷静に評価している。「資本主義的農業のあらゆる進歩は、たんに労働者から掠奪する技術における進歩であるだけでなく、同時に土地から掠奪する技術における進歩でもあり、一定期間にわたって土地の豊度を増大させるためのあらゆる進歩は、同時に、この豊度の持続的源泉を破壊するための進歩である。〔……〕それゆえ資本主義的生産は、すべての富の源泉すなわち土地お

よび労働者を同時に破壊することによってのみ社会的生産過程の技術および結合を發展させる」[39]。

しかしながら、マルクスは『資本論』第一巻では、彼が知っていた物質代謝の攪乱のすべての側面を論じることはできなかった。というのも、彼はこの問題を第三部において詳しく論じるつもりだったからである。ただし、彼はそのことを実現できず、また第三部は生涯未完のままであったため、彼の思考を探求するためには、彼の抜粋ノートが非常に重要である。一八六八年に作成された三冊の「農業ノート」に入る前に、本巻で公開された抜粋の中心的なテーマは化学や生理学、地質学、植物学といった自然科学であるので、はじめに、マルクスの経済学批判にとっての自然科学の重要性についての節を続けることにしよう。

#### 18491 マルクスの経済学批判にとっての自然科学の重要性

エンゲルスがマルクスの死後述べたように、マルクスが自然科学の著作を一般的な興味と「喜びをもって」読んだことは間違いない[40]。『資本論』を執筆している間も、彼が化学や生理学といった自然科学へのこうした傾倒を失うことはなかった。一八六四年にマルクスはエンゲルスに次のように書き送った。「近頃ではまったく仕事ができなくて、次のようなものを読んだ。カーペンター『生理学』、ロード『生理学』、ケリカー『組織論』、シユブルツハイム『脳と神経系統の解剖学』、細胞のことに関するシユヴァンやシユライデンのもの。ロードの『民衆生理学』のなかには、この男は宗教的であるにもかかわらず、骨相学のうまい批判がある。ある箇所はヘーゲルの『現象学』を思い出させる」[41]。マルクスは、自身の自然科学研究について以下のように付

け加えた。「すべて(一)僕には遅くやってくるということ、(二)僕はいつも君の足跡についていくということ。そこで、おそらく僕はいま暇のあるときに大いに解剖学や生理学をやって、そのほかに講義(そこではこんなことが明示されて解剖される)に出席するだろう」<sup>[42]</sup>。彼は手紙でエンゲルスと化学分子論の起源と歴史について論争し(これについては注解339.55を見よ)、そのためにシャルル・アドルフ・ウルツの関連著作を読んだ<sup>[43]</sup>。彼の「一八六四年五月から一八六五年の半ばまでの手帳」には、ウィリアム・ナッソー・モールスワースの天文学研究に対する関心が示されており、彼とマルクスは一八六五年八月には文通していた<sup>(S. 411c)</sup><sup>[44]</sup>。おそらく、一八六七年にハノーファーでルートヴィヒ・クーゲルマンのもとに滞在したとき、マルクスは医師のルドルフ・フィルヒョウ<sup>(S. 336を見よ)</sup>や化学者のカール・ランメルスベルク<sup>(S. 338)</sup>、婦人科医のフリードリッヒ・ベンヤミン・オジアンダー<sup>(S. 340)</sup>のドイツ語の著作からの短い抜粋を書き留めた。化学者のカール・シヨルレンマーはエンゲルスの親しい友人であり、マルクスはヘンリー・<sup>[850]</sup>エンフィールド・ロスコーの化学の教科書<sup>[45]</sup>のシヨルレンマーによるドイツ語改訂版や、一八七八年頃にシヨルレンマーがロスコーと一緒に書いた『詳説化学教科書』を何度も抜粋した<sup>[46]</sup>。マルクスの個人的な蔵書にも、シヨルレンマーやロスコー、ウルツ、マティアス・ヤーコプ・シュライデン、テオドール・シュヴァン、チャールズ・ライエル、ジョン・ティンダル、エドゥアール・オスピタリエといった著者の化学や地球科学、気候学、天文学、物理学、植物学、動物学<sup>[47]</sup>といった分野からの一連の著作があった。MEGA<sup>2</sup> IV/26や IV/31で刊行されている化学や地質学についての抜粋は、彼の後年における広範な研究分野を示している。

さらにマルクスがたとえばティンダルやアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・ホフマン(これについては注解339.56を見よ)、ダーウィン支持者であるトマス・ヘンリー・ハクスリー<sup>[48]</sup>らの進化論に関する自然科学的

な講演にも定期的に参加していたことは、とりわけフリードリヒ・レスナー<sup>[49]</sup>やヴィルヘルム・リープクネヒト<sup>[50]</sup>の回想によって明らかにされているとおりである。リービッヒやジョンストン、マローン、ハクスリー<sup>[51]</sup>、ウルツ<sup>[52]</sup>の洞察に加え、マルクスはまた、本巻で抜粋されているウィリアム・ロバート・グロヴの知見を受容したが、彼はさまざまなエネルギー諸形態<sup>[53]</sup>の可変性を提示し、熱の力学的理論を展開した。そして、マルクスは『資本論』第一巻において、二四時間のうちの労働量は、「彼の身体のなかで発生した化学的变化の検査によって、というのも物質における諸形態の変化はそれに先立つ運動力の行使を指し示すので」<sup>(S.327)</sup>計算されうると述べるに至った<sup>[54]</sup>。

しかしながら、マルクスは自然科学的なアプローチに対して無批判ではなかった。チャールズ・ダーウィンについてマルクスは高く評価していたが、それはダーウィンが『種の起源』で自然科学における「目的論」、すなわち種の発生は創造主の計画に従うというキリスト教の教義に「致命的な打撃」<sup>[54]</sup>を与えたとしたからであった。同時にマルクスは、ダーウィンがブルジョアの競争社会を動物界に投影したことを非難したのである<sup>[55]</sup>。また、ルートヴィヒ・クーゲルマンが『資本論』をベルリンの病理学者ルドルフ・フィルヒョウにすすめたとマルクスに伝えたとき——というのも彼は『資本論』における展開方法がフィルヒョウの細胞病理学におけるそれと同じだと考えていたからなのだが——<sup>[56]</sup>、マルクスは冷淡な態度をとり、クーゲルマンによって見出された自分とフィルヒョウの間の方法的な関連について、彼の『細胞病理学』を読むのには「うんざりした」として、コメントしないままにした<sup>[57]</sup>。それは正当な理由からであった。というのも、マルクスは、「労働生産物の商品形態または商品の価値形態」にブルジョア社会の「経済的な細胞形態」<sup>[58]</sup>を見たのであり、すなわち、たとえ『資本論』の冒頭で商品が研究されるにしても（また、商品がその担い手であるところの価値もまた、

細胞のように肉眼では見ることができないとしても）、商品においては資本主義的生産様式の諸矛盾は止揚されており、この諸矛盾が、たとえば経済危機においては必然的に爆発せざるをえないからである。それとは逆にフィルヒョウは、生物の病気の原因を以前は健康だった身体細胞の機能の仕方の攪乱に見ていた。細胞概念をマルクスは1851—1864年に読んだシュヴァンやシュライデン<sup>[59]</sup>、ケリカー、カーペンターの生理学研究からから得ていた<sup>[61]</sup>（成立と来歴 S. 893/894を見よ）。

細胞概念の使用が示しているのは、マルクスは自然科学の「受動的な」受容者であっただけでなく、自然科学を自身の理論的發展のために利用したということである。そのうえさらにマルクスは、自然科学をさまざまな次元で、また特殊な関心をもって、自身の研究のために勉強した。それゆえ、「農業ノート」の「一八六五—一八六六年の大ノート」において彼が自然科学に取り組んだ直接的な動機は、土地の素材的な性質を研究することによって自身の地代論を洗練させることであるといえる。そのために、マルクスは土地の分類や土地の収量、植物や動物の歴史、化学的関連など実証的かつ自然科学的な事柄を詳細に研究した。

若きマルクスが経済学の研究を始めたとき、彼はフォイエルバッハの「感性」という唯物論的・人間学的哲学の影響を強く受けた一方で、同時に生産における自然の中心的役割を認識していた。この関連は、一八四四年の『経済学・哲学手稿』において顕著であり、そこでマルクスは労働の疎外だけでなく自然からの疎外を特殊近代的な病理として扱い、またしたがって「人間主義Ⅱ自然主義」という定式において人間と自然との統一の再構成を訴えた<sup>[61]</sup>。フォイエルバッハの哲学から距離をおいた後、マルクスは人間の生産が自然に依存しているという見方にこだわった。彼が『ドイツ・イデオロギー』のなかで指摘したのは、あらゆる生産は「人間が当面している自然諸条件、すなわち地質学的、山水誌的、気候のおよびその他の諸状態」<sup>[62]</sup>によって制

約されていることや、あらゆる歴史的記述によって考慮されなければならないとされる、労働によって媒介される人間と自然との間の相互作用についてであった。『哲学の貧困』（一八四七年）において、マルクスは地代というカテゴリー規定のために自然科学、とりわけ化学や地質学における進歩が重要であることを認識した<sup>[63]</sup>。[63] それゆえ、マルクスが地代の形成を、「収穫通減法則」というリカードウの抽象を乗り越え、主題として扱うことができるためには、自然科学が重要であった。収穫通減法則に対する批判は、彼の自然科学研究の中心的関心事であり続けたのだ。

リカードウの法則は、土地について、資本投下が継起的に増大するとしても、収穫は常に減少するということを想定していた。価格は最も不利な生産によって規定されるので、より有利な諸条件のもとで生産された生産物はより高い価格で販売されることができらるだろう。この優等地と劣等地の間の差が地代の源泉になるとされる。人口増加の結果、つねにより不利な土地が耕作されなければならないであろうから、リカードウはこれから穀物価格の上昇傾向を導き出し、それが再び比例的に労賃を上昇させ、それにもなって利潤を減少させるであろうし、そのことが長期的にみれば生産の停滞につながらざるをえないとした。トマス・ロバート・マルサスは、人口は幾何級数的に増大するが、食糧生産はただ算術級数的にしか増加しないと、絶対的過剰人口は社会的発展の不可避的な傾向であると悲観的に考えた。

マルクスは、原理的には差額地代の論理に同意したとはいえ、すでに『哲学の貧困』においてリカードウの想定もマルサスの想定も受容してはいなかった<sup>[64]</sup>。彼は、地代の形成についてより抽象的でない分析を試み、それは「一八五〇―一八五三年のロンドン・ノート」が記録しているとおりである。マルクスはそこで彼の自然科学研究を継続し、リービッツやジョンストン、ジェームズ・アンダーソン、ジョン・モートンやヘンリー・

チャールズ・ケアリの著作にもとづいて農業問題を扱った (MEGA<sup>2</sup> IV/8 および IV/9)。その際、マルクスにとつて、近代的進歩について広範に流布していた楽観主義を見出し、それと自らを同一視することは難しいことではなかった。アンダーソンについては、マルクスは彼がすでにリカードウ以前に差額地代を考案しており [65]、同時に、農業が進歩し、最劣等の土地等級でさえも収量が増加するという考えの支持者であったことを認識した [66]。同様に、アメリカの経済学者ケアリはリカードウの体系を「不和の体系」として批判し、それに社会的発展が進むなかで農業生産が増大するという法則性を対置した [67]。ケアリは反対に、一国の耕作は [85b] 最劣等地で始まり、協同や道具の改良、機械設備の使用による社会的生産性の発展の結果、つねにより良い土地が耕作されるだろうと主張したのだ。当時、マルクスはケアリの著作から農業生産性が上昇する可能性についての多くの指摘を書き留めている [81]。

マルクスには、リカードウの「収穫通減の法則」を農芸化学や地質学の発展によって克服することは可能であるように見えた。というのも、農芸化学や地質学の発展は、交通手段や輸送手段の発展とともに、農業生産の急速な発展を期待させたからである。リービッチもまた彼の『農芸化学』第四版で、土地の豊度を維持するために、骨の折れる厩肥や骨を散布することは不要になるだろうと楽観的に予測していた。すなわち「この返還が排泄物、灰、骨のいずれの形態であろうと、どの形態で行われるかはほとんどどうでもよい。耕作地に水性ガスの溶解物(ケイ酸カリウム)、燃やした藁の灰、そして化学工場で作られたリン酸塩の肥料を撒く時代が来るだろう」 [69] としていた。ここから彼は、工場で大量生産された、無機物を十分に含む化学肥料を用いることで、農業生産性は急速に上昇するだろうと結論付けた。こうして彼は、はじめは、食糧不足と土地疲弊の問題は、化学の発展とそれの農業への充用によって克服されうると期待していた。この人工肥料の工業的な大

量生産に向けられた期待をマルクスはリービヒと共有していた。マルクスにとつて、マルサスの想定に対して、一九世紀の農業革命によって農業生産が増加するということを対置することは重要であった。すなわち、「しかし、僕がこんなことに従事するにつれてますます強まってくる確信は、農業の改革、したがってまたそれにもとづくつまらない所有の改革が、きたるべき変革のアルファでありオメガである、ということだ。それがないかぎり、マルサスおやじの言い分も正しい」<sup>70</sup>。

一八五〇年代はじめのマルクスの自然科学研究に関しては、さらに次の点が強調されなければならない。当時、マルクスは自然科学のおかげで重要な概念的拡張に成功していた。ここでかなり大きな意味をもつのは彼のローラント・ダニエルスとの友情であり、彼はマルクスに「物質代謝(Soffwechsel)」という概念の使用を通じて刺激を与えた。マルクスはこの言葉をダニエルスを通じて知ったのだが、それは、一八五一年二月に彼がマルクスに『ミクロコスモス』と題した草稿を送り、徹底的に批判するよう頼んだときであった<sup>71</sup>。『ミクロコスモス』において<sup>[85]</sup>ダニエルスはこの概念を、社会的なダイナミクスを特徴づけるために用いた。マルクスは、ダニエルの試みが、たしかに唯物論的ではあるものの、しかし同様に機械論的な歴史叙述であることには大して感銘を受けなかったが、一八五一年三月に物質代謝概念を自身の手稿「省察」において、むしろ貨幣や商品の循環をアナロジ的に、有機的で「生き生きとした」過程として描き出すために用いた<sup>72</sup>。ダニエルスはその直後、逮捕され、一八五五年に劣悪な拘留条件のために死亡した。

物質代謝という概念は、一九世紀のはじめ以来、さまざまな著者によって、生物とその環境との間の相互作用を描写するにあたって使われ、後にエルンスト・ヘッケルが「エコロジー」と名付けたものである<sup>73</sup>。リービヒもまた『農芸化学』においてこの概念を同化と異化の化学的過程を描くために使用した。人間は自然の

一部であり、自然と絶えず交流するなかでのみ生きることができるといえる。人間は呼吸し、食べ、飲み、排泄する。炭酸は植物によって再び酸素に変換され、排泄物は土地を豊かにする。リービッヒの理論が生理学を越えて広範に受容されるにもなると、この概念は、自然と社会との間の、また社会内部のさまざまな相互作用に對して用いられた。それは例えば経済学によって生産と分配、消費の社会的ダイナミクスを表すために用いられ、「metabolism (代謝)」——この語の英語訳——という現在の使用方法に相当している<sup>74</sup>。この視点は、著者の間で大きな違いはあるが、リービッヒだけでなく、ルートヴィヒ・フォイエルバッハやヤーコブ・モレシヨット、ユリウス・ロベルト・マイアーによっても共有されていた<sup>75</sup>。

その後何年かの間に、マルクスは物質代謝概念を、「労働」を自然との社会的交換の媒介として描くために用いた。すなわち、「人間と自然との間の一過程、すなわち人間が自然との、その物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程」であるとしたのだ<sup>76</sup>。それによれば、おそらくどのような社会でも「[so]n環境は労働という人間の行為によって合目的および意識的に変化させられるが、その際、資本主義的自然諸関係の独自性は、およそはじめて「資本が、〔……〕自然の普遍的領有〔を作り出す〕」ということにある<sup>77</sup>。もっとも、労働力の消費の仕方は各社会的諸形態における生産諸関係や生産力の水準および生産物によって大きく異なっているとされる。マルクスによれば、資本主義的生産様式や「賃労働と資本との関係」は、「自然との間で行う物質代謝の自然的、非有機的諸条件」<sup>78</sup>からの人間の「分離」によって特徴づけられる。その後、マルクスは労働力や自然力が資本の無限の増殖欲求のもとでどのように充用されるかを研究した。

マルクスはより広範な自然科学的術語を自らの経済学草稿に役立てた。前述のように、彼は商品をブルジョア社会の「**経済的な細胞形態**」と呼んだ。価値は対象化された労働として、感覚的に把握できないのだから、

「経済的諸形態の分析に際しては〔……〕顕微鏡も化学的試薬も役に立ちえない」とされる。「抽象力が両者に取って代わらなければならない」<sup>[79]</sup>。マルクスはジョンストンから「地質学的構成」<sup>[80]</sup>という概念を借用し、生理学からは「有機的構成」という表現を取り上げたが、これはたとえばルドルフ・ヴァーグナーが化学的生理学的過程の分析において有機物の組み合わせとして使用したもので<sup>[81]</sup>、それをマルクスは不変資本と可変資本とに分かれる資本の価値構成を示すために用いた。さらにマルクスは、経済学と生理学の間の方法論的類似性を見て<sup>[82]</sup>、ヘーゲルの<sup>[83]</sup>『論理学』に関しても次のように書いている。「貨幣所持者または商品所持者は、生産のために前貸しされる最小限の額が中世の最大限をはるかに超える場合にはじめて、現実には資本家に転化する。ここでもまた、自然科学の場合と同様に、ヘーゲルが彼の『論理学』のなかで発見した法則、すなわち、たんなる量的な変化がある一定の点で質的な区別に転化するという法則の正しさが、実証される」<sup>[83]</sup>。

しかしながら、マルクスの場合、自然科学の役割は経済的諸関連に対するアナロジーを形成するために自然科学的な術語を用いることにとどまらない。彼の自然科学研究は、彼の経済学批判にとって理論的な重要性をも有しており、それは驚くべきことではない。というのも、あらゆる生産は自然に関連しているからである。もちろん、人間と自然との間の物質代謝は資本によって根本的に変化させられ、再編成される。数多くの議会報告書にもとづいて、マルクスが労働力の疲弊を「労働日」や「機械と大工業」の章で詳細に叙述したように、彼の自然科学抜粋は自然力の疲弊という経験的内容を補完している。彼は自身の自然科学的知見の基礎のうえに、生産の物質的諸条件を悪化させる資本主義の破壊的傾向を批判した。この批判のためのきっかけを与えたのが、『資本論』第三部のための草稿の執筆やそのために作成された「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」なのである。

## 掠奪農業と人間と自然との間の物質代謝の攪乱

イングランドにおける農業革命は必然的に農業生産性の急速な上昇をともなったが、他方、同時に、土地疲弊と過度な森林伐採が社会問題となり、ある目撃者は「ドイツにおいてもまた、それどころか開墾されて間もない北アメリカにおいてさえも、多くの場所で土地の収量が憂慮すべき仕方です減少し」はじめたということが「今では百倍も証明されている」<sup>84</sup>と見ていたほどであった。「合理的農業」——アルブレヒト・テアが基礎づけ、リービッヒもまたその伝統のなかにいた——は、土地の豊度と貧困化の法則を突き止めるという実際上の必要性に対する一つの反応であった。というのも、この疲弊と再生という問題が、農業の、またそれにともなつて社会全体の「死活問題」<sup>85</sup>になつていたからである。

〔84〕土地疲弊の危険性の増大という文脈のなかで、リービッヒは、著作が約二〇年間絶版になつていた後に、『農芸化学』第七版を出版し、そこで彼の警告的なトーンを強めた<sup>86</sup>。新たに付け加えられた「耕作の自然法則への序論」においては、人工肥料を用いることで生産性は急速に増大するという以前の彼の楽観的な予想は消えていた。先述のように、マルクスは「一八六五—一八六六年の大ノート」のなかで、リービッヒの「序論」から非常に念入りに抜粋し、それによつて土地疲弊をめぐる論争への関心を深めたと同時に、彼は農芸化学の最新の見識を『資本論』第一巻に取り入れた。リービッヒの理論のおかげで、マルクスは土地疲弊のさまざまな原因を知るようになり、自然との間の社会的な物質代謝の攪乱を、資本主義的生産様式の矛盾として、明確に生態学的な観点から取り扱ったのだ。こうした文脈のなかで、リカードウの地代論に対するマルクスの評価

は新たな次元を獲得した。リカードウは差額地代の論理を明らかにしたが、土地収量が減少するという彼のモデルは、生産性の上昇を扱っていなかったからだけでなく、マルクスが土地疲弊という別の社会的動態が（資本主義的矛盾の現れとして）始動したのを見ていたがゆえに、説得力に欠けるものであった。

ケアリは一八五〇年代にすでに、アメリカ農業における土地成分の浪費は将来の世代に対する「犯罪」であると批判していた<sup>[87]</sup>。リービッツは、こうした警告を自身の掠奪農業批判に取り入れ、彼の『農芸化学』第七版や『化学通信』において、ケアリの著作から長い節句を引用した。「土地を掠奪するための労働は放り出された労働よりも悪い。後者の場合、それは現世代にとっての損失であるが、前者の場合、貧困は子孫が引き継ぐことになる」<sup>[88]</sup>。ジョンストンもまた、マルクスが「一八六五／一八六六年の大ノート」で書き留めたように、『北アメリカノート』のなかで「北アメリカにおける掠奪システム」について詳細に報告した。「古い土地を回復させるよりも、新しい土地を開墾し、作付けした方がより安上がりで、より多くの利潤をもたらす。『……』そして、もしその食物がソバのように、痩せた土壌でも育つようなものの場合、土壌を痩せるがままにしてしまいがちであるのは、それでもこの作物が育つであろうからである」(S. 312+18)。ここで特徴的なのは以下のような新たな洞察である。すなわち、掠奪農業は<sup>[89]</sup>近代の社会的生産のシステムの問題になったのであり、その問題は個人の道徳的に誤った行為に単純に帰することはできないというものである。だからこそ、農芸化学者のアドルフ・マイヤーもまた「掠奪システムの恒常性」について語ったのである<sup>[91]</sup>。

「一八五〇—一八五三年のロンドン・ノート」においては、マルクスはケアリやジョンストンのこうした警告には大した注意を払っていなかったが、それとは対照的に、一八六五／一八六六年には、掠奪農業の問題を『資本論』やI A Aでの講演に組み入れた。こうして、マルクスは講演の草稿において、リービッツの理論をイン

グランドの植民地支配に応用しつつ、アイルランドでの土地疲弊を指摘した。イングランドの掠奪経済がアイルランドを一大農業地域に転化させたとき、それはアイルランドの土地を疲弊させるとされた。「土地は施肥が足らず、酷使されている。それは、一部は考えもなく行われた農場の統合のためであり、一部は穀作エーカー制度のもとで、借地農業者は、たいてい自分用の土地の施肥を彼の労働者にまかせたからである。〔……〕」そこでその結果は、現地民が徐々に追い出されていくこと、そして、国民の生命の源泉である土地が徐々に衰え、疲弊していくことである」<sup>[90]</sup>。土地生産物はアイルランドからイングランドへ輸出されたが、土地から取り出した成分が戻されることはなかった。「生産物がエーカーあたり相対的に減少しているのだとすれば、忘れてはならないのは、イングランドがここ一世紀半このかたアイルランドの土地を輸出した——その耕作者に土地成分の補充手段すらも与えずに——ということである」<sup>[91]</sup>。

掠奪農業は国際的な商品取引にもなって進行し、人間と自然との間の物質代謝に「修復不可能な亀裂」をもたらすだろうとされ、その結果、「地力が浪費され、またこの浪費は商業をつうじて自国の境界を越えて遠くまで広められる（リービッチ）」<sup>[92]</sup>。こうしてマルクスは、資本のグローバル化の結果として、自然的物質代謝と社会的物質代謝における亀裂が拡大する危険性を定式化したのである。それによって、持続的な生産そのものも不可能になってしまふとされる。

これに応じてマルクスは、社会主義戦略を、人間と自然との間の物質代謝を回復させる必要性のうちに見出し、このやり方で「人間主義Ⅱ自然主義」という自身の以前の哲学的立場を再定式化した。いまやマルクスは「社会化した人間、アソーシエイトした生産者たちが、<sup>[93]</sup>盲目的な力としての自分たちと自然との物質代謝によって制御されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同的制御のもとにおくという

こと、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間本性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでの物質代謝を行なう」<sup>[93]</sup>ことを求めた。

マルクスにとって、自然の資本主義的な掠奪の問題は、土地疲弊に限られたものではなかった。ウィリアム・スタンレー・ジェボンズは「石炭問題」において、同じくリービッチの土地疲弊の理論にもとづいて、イングランドの石炭埋蔵量の枯渇を警告した<sup>[94]</sup>。マルクスはこの問題に対して関心をもち、「農業ノート」の「一八六六年のノート三」において、その著作のタイトルを書き留め、それにチェックをつけた（S.5874）<sup>[95]</sup>。「一八六五／一八六六年の大ノート」は、農業のより広範な領域に対するマルクスの注意を示している。たとえばマルクスは、ルイ・ムニエの『フランスの農業』を読み、それを『資本論』第三部のための草稿においても、土地価格の規定やフランスにおいて支配的だった分割地所有の特異性——ムニエはそれを王党主義的な観点から強く批判していた——に関連して用いた<sup>[96]</sup>。ムニエの著作からの長い抜粋のなかで、マルクスはアルプス山脈やピレネー山脈での大規模な森林伐採が地域の気候を変化させ、それによって伝統的な農業が困難になったという報告にも注意を向けた（S.195-198）。

さらに、マルクスは畜産もまた近代的な生産諸力の発展の影響下にあるという事実を認識していた。この文脈において重要な人物がロバート・ベイクウエルである。彼は、第一次イングランド農業革命の間、「選択の体系」によって、骨を少なくし肉を大幅に増加させた動物品種を飼育した。マルクスはベイクウエルをレオンズ・ドラヴェルニユの著作を通じて研究しているが、ラヴェルニユはこうした発展をフランスの農業に対するイングランドの農業の優越性として無条件に称賛した。マルクスはこうした発展には魅力を感じなかったとみえ、「新しい」動物品種について次のように述べている。「それゆえ、早熟、全般的に弱々しく、骨の欠如、たくさん

の脂肪と肉の発達など、これらすべてが人工的な産物を特徴づけている。反吐が出る！」(S. 234.33-35)。

ラベルニュはヴィルヘルム・ハムというドイツでの支持者を得ていた。ハムからの抜粋において、マルクスは再びこのような樂觀的見解から距離をおき、以下のようにコメントしている。「この牢屋のなかで動物たちは【86】生まれ、殺される日までそのなかにいる。問題は次のようなことだ。このシステムが、飼育システムと結びついて動物たちをたんなる肉と脂肪の塊に変えるために異常な形で成長させ、その骨を抑えつけるが、以前（一八四八年より前）は解放された空気のもとに可能なかぎりどどまることによって緩和されていたのであり、最終的には、生命力を大いに損ねる原因になるのではないか」(S. 303.13)。マルクスはこれらの抜粋のなかで、資本主義的な掠奪農業がいかに農業や素材的環境のさまざまな領域を変容させ、劣化させるかを認識した。

パトリック・エドワード・ダヴ——マルクスは彼の『政治学要諦』を読んでいた——は、「人間は地球の生命を借りる者にすぎない」(S. 284.17)と、生態学的な観点から掠奪農業を批判した。同様の考えはリービッヒにも見られる(S. 133.22-38)。そこから刺激され、マルクスは『資本論』第三部のための草稿において次のように書いている。すなわち、「より高度な経済的社会構成体の立場からは、個々の個人による地球の私的所有は、ある人間による他の人間の私的所有と同様にまったくばかげたものとして現れるだろう。一社会全体さえ、一国民でさえ、いな、同時代のすべての社会を一緒にしたものでもさえ、大地の所有者ではない。それらは大地の占有者、大地の用益者にすぎないのであり、よき家長たちとして、これを改良して次の世代に遺さなければならぬのである」<sup>97</sup>。

マルクスとダヴの重要な違いは、たしかにダヴは掠奪農業という見解をもとに土地所有者階級を批判したが、しかし、その解決策としてはたんに土地の国家管理を提案しただけだったことにある。意識的な土地管理とい

同様の考えは、オイゲン・デューリングにもみられる。すなわち、「土地疲弊の危険性は政治的機能の介入を必要とし、すなわち社会が共同体としてまた国家として植物の栄養素の循環が確立されるようにしなければならぬ」<sup>[98]</sup>というのだ。一方、ジョンストンは、このことを必然的な運命として受け入れたので<sup>[99]</sup>、これに対してマルクスは彼を「まったく保守的な農芸化学者」と特徴づけた<sup>[100]</sup>。マルクスは自然諸条件の悪化に対抗する手段として、自然との間の社会的物質代謝の実際の変革を、資本主義的生産様式を越えたところで見ていた。それは「同時に、あの物質代謝のたんに自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する」<sup>[101]</sup>のだ。この構想の具体化が、マルクスが一八六八年以降追求した理論的および実践的課題の一つである。

### 1862 一八六八年の三冊の「農業ノート」における物質代謝概念の拡張

本巻は、マルクスが『資本論』のための草稿を執筆している間に作成した「一八六五／一八六六年の大ノート」をはじめて公開するだけでなく、一八六八年以降のマルクスの仕事や研究の過程にとって部分的には新たな出発点を示すような四冊の抜粋ノートをも公開する。

一八六七年九月に『資本論』第一巻が出版された後、マルクスは一八六八年一月から続きの部の仕上げに着手した。この年の前半はマルクスにとって非常に生産的なものであった。というのも、マルクスは四冊の抜粋

ノートを作成し、『資本論』第二部のための第二草稿の執筆を開始したのだ。マルクスが書物と自身の関係について述べた有名な言葉はこの時期に生まれている。彼は「機械なんだ、本をもりもり食べ、それからこれを違った形にして、歴史のこやしの山に放り出すようにきめられている機械なんだ」という<sup>102</sup>。同時期にマルクスはルートヴィヒ・クーゲルマンに宛てて、「統計その他ものすごい量の「資料」をどうにか平らげたが、その「資料」だけでも、こういう類の餌や、これをたちまちに消化することに慣れた胃腸を持っていない連中なら、病気になるかねないほどのものだった」と書いている<sup>103</sup>。それにくわえてマルクスは「この四ヶ月の間に、青書や調査書、銀行についてのアメリカの報告書などに金をつぎ込んだため」、娘のラウラの結婚式のためのお金が「残っていないという始末だった」<sup>104</sup>。これは、一八六八年夏に「農業ノート」の「一八六八年のノート三」に抜粋された三四の議会報告書をとくに意味しており、マルクスはそれらを「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」とともに、『資本論』のさらなる作業のための資料集として使用した。それにくわえて、マルクスは、一八六八年に作成された三冊の「農業ノート」において、とりわけリービッツの理論をめぐる状況を研究し、その際に自然科学研究と資本主義以前の社会の農業事情をますます深く掘り下げていったのである。

近代的な掠奪農業と土地疲弊に対するリービッツの批判を『資本論』で大いに称賛していたにもかかわらず、マルクスはこれらのテーマについての研究をやめなかった。逆に、一八六八年以降、マルクスは自然科学をさらに徹底的に研究した。『資本論』第一巻の出版後、彼はリービッツの土地疲弊と土地の豊度に関する理論を精査し、それを関連する自然科学の最新の発展で補強する差し迫った必要性を感じた。リービッツの主張が性急で、あるいは誇張されていたのではないかと考えながら、マルクスは一八六八年一月三日にエンゲルスに宛

てて手紙を書き、カール・シヨルレンマーに専門的な助言を求めた。「シヨルレンマーに、農芸化学の最新最良の本（ドイツ語のもの）はどれか、聞いてもらえないだろうか？ さらに、鉬物肥料論者と窒素肥料論者との間の争点は今どうなっているのか、についても（最後に僕がこの問題を研究してから、[86] ドイツではいろいろ新しいものが現れたのだ。リービッヒの土地疲弊論に対する反論を書いた近頃のドイツ人たちについて、シヨルレンマーは何か知っているだろうか？ ミュンヘンの農学者フラス（ミュンヘン大学教授）の冲積理論を彼は知っているだろうか？ 地代に関する章のために、少なくともある程度までは、この問題の最近の事情を知っておきたいのだ」[85]。だが、エンゲルスがこの件について、シヨルレンマーは「フラスの本のことは「……」知らなかった」[86]と短く答えた時、マルクスは独自に本を読み始めていた[87]。続いて三冊のさらなる「農業ノート」が作成されたのである。

リービッヒの理論は大きな論争を引き起こし、「時の話題」にまでなっており[88]、まもなく反論のための一連の試論が出版された[89]。他の経済学者も土地疲弊論争には積極的に参加していたので、マルクスは複雑な状況を目の当たりにしていた。一八六八年のはじめ、マルクスは「農業ノート」の「一八六八年のノート一」と「一八六八年のノート二」にオイゲン・デューリングのいくつかの著作から抜粋したが（S. 382-385, 405-407, 411/412 および 512/516）[90]、それはこのベルリンの私講師が『資本論』全体についてはじめての書評を書いたことが直接的なきっかけとなっていた（成立と来歴 S. 1047-1056 を見よ）。この時、マルクスが[864]リービッヒとデューリングの関連を見落としていたとはおそらく考えられない。というのも、ケアリの支持者であったデューリングは、ケアリとリービッヒとの間の親和性に気づき、リービッヒの土地疲弊論をケアリの理論に組み入れることで、保護主義的政策の弁護を強化しようとしていたからだ。デューリングは次のように主張して

いる。「この疲弊は、埋め合わせの補給がされることなく奪われることによって生じる〔……〕」。十分な肥料や、それどころか肥料の入手について当惑するだろう。収穫は不可避免的に減少するようになるだろう。人民の生存をその根本において脅かすようなこうした不測の事態に直面して、とりうる唯一の手段は、つまり物質分配を意識的に制御することだけである」<sup>111</sup>。マルクスもまた同様に、「アソーシエイトした生産者たちが、〔……〕自分たちと自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同的制御のもとにおく」ことを求めていたが<sup>112</sup>、その後数年で彼のデューリングに対する評価が悪化するにつれ、この類似性にますます苛立ちを募らせていったのはたしかである。

他のリービッツ批判者は、彼の「マルサス主義」に対して批判を向けた。ダーウィンにとつてと同様、リービッツの土地疲弊論にとつても、マルサスの人口論は着想の源として機能した。過剰人口についてのマルサスの想定が、リービッツの助けを借りて科学的妥当性の外観を手に入れたのは、リービッツがヨーロッパの人口増加が農業生産性の増加を上回り、世界的なグアノ貯蔵量が急速に使い果たされるだろうと述べたことによるものだった<sup>113</sup>。マルサスの理論は、「土地疲弊の亡霊」という姿で甦らされたように見えた。土地疲弊の問題が自然科学を越えて経済学の対象となったのは、まさにマルサス的なニュアンスをともなうて提起された、ヨーロッパの将来に関するこの問題によってだったのである。

デューリングは、リービッツのマルサス主義に対して以下のように異議を唱えた。すなわち「彼は、この点では、食料備蓄と人口数の不均衡がすべての困窮とすべての道徳的墮落の決定的な原因であるとみなしたマルサスと同様のやり方をとっている。彼がわれわれに示しているのもまた、もし土地疲弊が防<sup>114</sup>がれなかったならば確実に生じるはずの恐ろしい事態である」<sup>114</sup>。これに対して、デューリングはケアリに同意し

て、農業生産性は人口増加とともに上昇すると主張した。こうして、デューリングは、農業生産増大の法則性というケアリの発見とともに、「マルサスの亡霊」は「無のうちへと消散した」とし<sup>115</sup>、それゆえ「昔の土地疲弊の亡霊」は最終的に葬られなければならない、とした<sup>116</sup>。アドルフ・マイヤーはこれに同意し、「このようにして、私たちは、敢然とそれを直視することさえすれば、掠奪農業の亡霊が無に帰すのを見る」とした<sup>117</sup>。

「農業ノート」の「一八六八年のノート」においてマルクスは、カール・アルントやフリードリヒ・アルベルト・ランゲ、フランツ・クサーヴァー・フォン・フルーベクといったリービッツの理論に批判的な著者の著作をさらに抜粋した。さらに彼の個人蔵書には、ユリウス・アウの著作が引き継がれた<sup>118</sup>。アウと同様、ヨハネス・コンラート——彼の本をマルクスは後にリストに書き留めており、もしかすると読んでいたかもしれない<sup>119</sup>——も、掠奪農業が永遠に埋め合わせられないというリービッツの主張は根拠のないものであり、リービッツとは、肥料の有益性を決定する投資の収益性を無視しているという見解を主張していた。土壌物質は豊富に存在しているので、掠奪農業は是正されうるというのである。グアノの枯渇や土壌物質の浪費は、技術的發展によって克服されるかもしれないというのだ。こうしてコンラートは新たな設備を用いて海のリン酸を収集することを提案した。マルクスはこうした純粋に技術的な解決策とは間違いなく距離をおいていたとはいえ、彼はリービッツの理論のうちにあるマルサス主義の危険性を認識していた。結果として、土地耕作に関するより精確な歴史的研究も、掠奪農業に対するニュアンス含みの非運命論的な批判も必要になった。

この論争の参加者の誰もが、このような技術学的で市場志向的な解決策の支持者であったわけではない。重要な例外が、マルクスの一八六八年の研究において中心的な位置を占めるカール・フラーズである。彼は、マ

ルクスが一八六八年の「農業ノート」三冊すべてにおいて、その著作から抜粋した唯一の著者である。彼の『農業の歴史』は「一八六八年のノート一」(S. 393-494)に、『農業の本質』の二巻本両方は「一八六八年のノート二」および「一八六八年のノート二」(S. 413-434, 459-463, 469-481, 490-498 および 519-530)に、また『時間における気候と植物界』は「一八六八年のノート三」[1866] (S. 621-627)に抜粋された。さらにマルクスはフラーズの別の一連の著作を所有しており<sup>[20]</sup>、また読みながらエンゲルスに熱心に手紙を書いた。

フラーズの『時間における気候と植物界、両者の歴史』(一八四七年)は非常におもしろい。というのは、歴史的な時間のなかで気候も植物も変化するということの論証としてだ。彼は、ダーウィン以前にダーウィン主義者であり、歴史的な時間のなかで種そのものを発生させている。だが、同時に農学者でもある。彼は次のようなことを主張している。すなわち、耕作が進むにつれて——その程度に応じて——、農民によってあんなに愛好される「湿潤さ」が失われていって(したがってまた植物も南から北に移って、最後にステツプの形成が現れる、ということである。耕作の最初の作用は有益だが、結局は森林伐採などによって荒廃させる、云々、というわけだ。この男は、化学者や農学者などであるとともに、博学な言語学者でもある(彼はいくつかのギリシャ語の本を書いている)。彼の結論は、耕作は——もしそれが自然発生的に前進していったら——意識的に支配されないならば(この意識的な支配にはもちろん彼はブルジョアとして思い至らないのだが)——荒廃を後に残す、ということだ。ペルシアやメソポタミアなど、そしてギリシャのように。したがってまたやはり無意識的な社会主義的傾向だ! 「……」彼の農業の歴史も重要だ。「……」農業について新しいものを、そして最新のものを、精密に調べる必要がある。自然学派は化学学派に対立している。<sup>[21]</sup>

フラーズは土地疲弊論を厳しく批判していたので、この発言はリービッヒ支持者にとっては意外に見える。第一に、マルクスは「化学学派」と「自然学派」の対立を指摘している。後者の代表的人物であるフラーズは、リービッヒの農芸化学を、それが植物にとってリン酸が重要であることを明らかにしたという理由で称賛したが、しかし同時に、それが土壤中の栄養素の化学的分析に集中していたがために、その一面性を問題視した（成立と来歴 S. 1053/1054 を見よ）。そして、土壤の風化能力は同様に、気温や日射量、降水量などの「自然科学的な気候」というもう一つの要素によって本質的に規定されているという。フラーズは『歴史的・百科事典的農業論概説』（シュトゥットガルト、一八四八年）においてすでに同じ対立に言及している<sup>[12]</sup>。たしかにフラーズが指摘するように、こうした論争は当時すでにそのほとんどすべてが終わっており、またリービッヒ自身も後に彼の特許肥料が失敗すると、自らの誇張を認めた<sup>[12]</sup>。しかし、マルクスは一八六八年のはじめに農学の「最新のもの」（一八四〇年代の無機説と窒素説との間の古い論争ではなく）を研究したいと考えた。というのも、一八六六年にフラーズが『農業危機とその治療手段』という著作を出版し、今度はリービッヒの土地疲<sup>[8]</sup>弊論を論難して以降、「自然学派」と「化学」学派との間に新たな対立が生じていたからだ。フラーズは、まさにこの本のなかで、リービッヒのマルサス主義と高価な人工肥料への一面的な依存を批判する。それに対して、フラーズは沖積（水によって運ばれてきた土や砂、岩の塊）には、自然界にすでに存在している植物性栄養分の循環があることを認識していた。フラーズは、堰の建設や川水の規制による人工沖積を提案し、それは土地の豊度を暴力的に疲弊させるのではなく、規制的に維持し、さらには増加させるだろうとした。

次に、マルクスはフラーズの著作のなかに、何世紀もの間に人間の活動によってもたらされた局所的な気候

変動についての詳細な説明を見出している。この時期の『気候と植物界』でのマルクスの研究が明らかにしているのは、ルイ・ムニエも警告していたような、広範囲にわたる森林伐採のために局所的な気候が変化し、気温の上昇や干ばつが引き起こされ、それにもなつて土壌や水分平衡が崩されてしまったがために、南ヨーロッパは古代文明によつて荒廃させられてしまったということだ。フラスの植物相の歴史的研究は、このことが植物を南から北へ、平野部から山岳部へと移動させ、その結果、平野部ではステップの形成が進んだことを示している。このような気候変動は、これはまたこれで既存の農業を困難なものにし、そこからフラスは、自然との相互作用を意識的に規制しなかつた古代文明は、後になって意図しない諸結果を被らざるをえなくなり、その存続が不可能になつたと結論づけた。彼は、リービツヒと同様、差し迫つた文明の没落を警告し、近代技術と交通手段が森林破壊を加速させる可能性があるだろうとしたのである。

こうしてマルクスはリービツヒのほかに資本主義的生産の掠奪農業を真剣に研究する、さらなる著者を発見した。マルクスは自らの知見を急速に拡張し、リービツヒの理論をめぐる研究領域を切り拓き、それとともに、リービツヒを相対化することができた。その結果、マルクスは一八七二年の『資本論』第二版において、リービツヒに対する自身の以前の評価を修正し、彼の「不朽の功績」について控えめに述べるにとどめた。すなわち、リービツヒの著作は、いまではもはや「現代のあらゆる経済学者の諸著作を合わせたよりも多くの光明」<sup>[124]</sup>を含んでいるのではなく、ただ「光明」を含んでいるだけとされた<sup>[125]</sup>。

マルクスがフラスに「社会主義的傾向」を見出したことから、マルクスが人間と自然との間の物質代謝の回復を、自由な諸個人のアソシエーションの中心的課題としてさらに規定していることが明らかになる。こうした傾向が「無意識的に」フラスの著作の基礎をなすとされるのは、現代の社会では持続的な生産が脅か

されているという観点にもかかわらず、フラーズは物質代謝を意識的に取り扱うことの必要性への洞察に「もちろんブルジョアとして」思い至ら「ない」からである。さらに、自然力を利用して生産性を高めることで、農業を持続的に営むというフラーズの展望は、おそらくマルクスに肥料の資本主義的な浪費に対する対案を提示しただろう。

[126] これに対してマルクスは、自身の陣営において、政治的展望について激しく論争し、アソーシエイトした生産者たちによる土地の共同な規制を支持した。フラーズを読んだ後、例えば「土地問題」(「土地所有の問題」<sup>[126]</sup>)についての国際労働者協会の議論は、マルクスにとってこうした立場を具体的に述べる機会となった。一八六九年七月六日のロンドン中央評議会の会議では、マルクスが出席していなかったI A Aブリュッセル大会の決議が議論となった。ブリュッセルのI A A構成員は、運河や電信、森林を共同財産(コモン財産)とすべきだと要求したが、鉱山や鉄道、耕作地の社会化の問題については、労働者によって経営される農業企業に国家が土地を賃貸すべきだ<sup>[127]</sup>と、ためらいがちな態度を見せた。マルクスは、こうした弱体化はブルードン主義の影響によって引き起こされたものであるとみて、中央評議会において修正する必要性を主張した<sup>[128]</sup>。というのも、彼にとつてブリュッセルの決議はあまり十分なものではなかったからだ。「市民マルクスは、ミルナーが討論の本質を十分に理解していないという意見であった。鉱山や森林を共同財産とすることに對しては、なんの反対もなかった。少数者の手に土地が集積されることによつて引き起こされる害悪については、皆が承認した。異論があつたのは、耕地についてだけである。反対をとなえたのは、小規模農業の支持者たちであつた。論争点は小所有だつた」<sup>[129]</sup>。

[130] もっとも、マルクスは、共同財産を確立することの「社会的必要性」を指すブリュッセルの立論に

同意していたが、他方でこれは、ロンドンの中央評議会の構成員の幾人かからはあまり支持されなかった。というのも、彼らは、大規模土地所有によって侵害されていると彼らが見ていた、土地に対する個人的自然権を強化していたからだ。自然権という観点において、小土地所有への傾向性と類似していることをマルクスは認識した。「この自然権ということ論理的な帰結にまでおしすすめれば、各人は自分の分け前の土地を耕作すべきだという主張に到達するであろう」<sup>[130]</sup>。両潮流の立場——何人かのブリュッセルの小土地所有支持者、何人かのロンドンの抽象的な自然権主義者——は、マルクスから見れば、商品生産の諸範疇にとらわれており、それらとの決別を的確に述べるにはふさわしくなかった。パーゼルでの次の I A A 大会は、マルクスの二つの点が大多数の賛成で決議された<sup>[131]</sup>。

マルクスはさらに、地域的な諸関係を考慮に入れることが重要であると考えた。それにとまって、個々の国の農業諸関係に関する彼の研究は、政治的な重要性をも与えられた。というのも、そうした研究は政治的な要求を具体的に述べるができるようになるための前提条件だったからだ。こうしてマルクスは、土地の共同的管理への移行を個々の国の与えられた状況に合わせるといふ考えを提示した。フランスの農業は、債務を負いつつ土地を所有する小農民によって規定されているのに対し、イングランドの大土地所有は、賃金が支払われる農業労働者によって規定されており、それゆえ、マルクスは、当初の状況の違いに応じていろいろな行動様式が必要であろうと考えた。すなわち、「イングランドでは、議会の法律によって、二週間以内に土地を共同所有に転化することができらるだろう。フランスでは、このことは、土地所有者の負債と彼らの租税負担を通じて、実現されるに違いない」<sup>[132]</sup>。こうした問題は、その後の数年間のうちにマルクスにとって、ロシアを例として非常に重要になった。

18701 一八六八年の抜粋ノートにおける『資本論』第二部および第三部の  
さらなる準備

フラーズによって喚起された林業や森林伐採の問題に対するマルクスの関心は、彼の個人蔵書によっても裏付けられる。そこには一八六八年以降に出版された関連する著作が五冊もある<sup>133</sup>。マルクスはこれらの問題を研究しながら、『資本論』第二部と第三部のためのさらなる草稿を執筆した。彼の草稿やノートには、自然科学的な洞察を、地代論をも越えてさらに自身の経済学批判に組み入れようとしていたことがうかがえる多数の指示がある。注目に値するのは、彼が経済的な側面と生態学的な側面を結合させようとした方法である。

この関連では、マルクスが一八六八年から七〇年までの、『資本論』第二部のための第二草稿で扱った「資本の回転」が重要である。資本は回転時間をできるかぎり短くしようとする傾向を有しているとされる。こうした努力は、はるかにずっと長い自然の再生産時間に反することになるという。フリードリヒ・キルヒホーフの『農業経営提要』（デッサウ、一八五二年）からの引用の後に、マルクスは第二草稿で、より短い回転時間を目指す資本の「衝動」と、森林の長い生産時間という物質的制約とは両立不可能であると結論づけている。すなわち、「森林育成の生産時間（比較的わずかなだけの新たな労働時間を含む）が長いこと、それゆえにその回転期間が長いことは、それを不利な私的経営部門、したがってまた本質的に私的経営である資本主義的経営部門にする（個々の資本家のかわりに結合した資本家が現れたとしてもそうである）。文化および産業一般の発達は、昔からきわめて能動的に森林を破壊するものとして実証されてきたが、それに比べれば、この発達が逆に森林の保全や生産のためにしてきたことからは、まったく微々たるものである」<sup>134</sup>。

「a」またさらに、マルクスは『資本論』第二部のための第二草稿で、畜産への資本主義的影響についても研究している。「一八六五—一八六六年の大ノート」におけるのと同様、マルクスはラヴェルニユがイングランドでの畜産の生産性向上を称賛したことを批判し、このことをウィリアム・ウォルター・グッドの『政治農業、商業上の誤謬』（ロンドン、一八六六年）によって補足している<sup>[135]</sup>。掠奪農業という見解から導き出されるのと同様に、生産性の上昇が持続性を有していないのであれば、それはたんに見かけだけのものであるということだ。マルクスが主張するのは、動物を「それが経済的標準年齢に達しないうちに」殺すことは、最終的には「農業に大損害」を与えるはずだということである<sup>[136]</sup>。生産性の発展が、生産の物質的諸条件のこのような悪化をともなっているならば、このことは資本に困難をもたらすということは、マルクスが『資本論』第三部のための草稿で確認したとおりである。すなわち、「農業における生産力の社会的発展の増大は、自然力の減退をただ埋め合わせるだけか、または埋め合わせさえもせず（この埋め合わせはつねにある期間だけしか作用できない）、したがって、産業的発展が起きても、生産物は安くならないで、ただ生産物がさらにより高くなることが妨げられるだけだということもありうる」<sup>[137]</sup>。社会的生産性の増大が掠奪農業と手を組んで進むならば<sup>[138]</sup>、この「埋め合わせ」すら確実ではないだろう。

マルクスが意図したのは、利潤率の規定にとって非常に重要な、原料や補助材料の生産に対する自然的制限をも認識できるということだった。機械の導入は、生産性を突然二倍あるいは三倍にすることができるかもしれないが、しかし、原料や補助材料の準備がつねにそれに歩調を合わせられない。なぜなら、それらの生産は自然に大きく依存しているからである。これにくわえて、予期せぬ不作や鉱山や土地の疲弊が加わることもありうる。原料の騰貴は、不変資本の騰貴を招き、結果として利潤率の低下を招くとされる。さらに、

不可欠な原料の供給の攪乱は、生産一般の物理的な中断につながるという。しかし一方で、マルクスは、原料の突然の価格変化が「投機」を動機づける可能性を意識しており、キルヒホーフの関連する指摘を、[87a]後に第三部でこの問題を分析するための注意喚起として書き留めている[39]。マルクスが一八七八年にジョン・イツからの抜粋で研究したように、資本が新たな輸送手段や使用価値、供給源および市場を発明するさらなる可能性はあり、それによって、資本は原料の騰貴に対する対抗手段を得るのである[40]。

『資本論』第二部および第三部のさらなる推敲にとつてとりわけ重要なのは、「農業ノート」の「一八六八年のノート三」におけるマルクスの抜粋である。「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」とおよそ並行して、マルクスは三四の議会報告書から膨大な抜粋を作成した。すなわち、三〇の英国大使館および領事の商況報告書(S. 628-664)[41]、インド領オリッサにおける飢饉についての三つの報告書(S. 670-676)および英国鉄道システムについての「鉄道についての王立委員会」報告書(S. 1126-1139)である。

推敲と資料収集の整理にあたってマルクスが焦点をあてたのは、農業と生産の自然的諸条件であった。すなわち、原料の埋蔵量とその採掘、地下資源と土地疲弊(ブラジルでのコーヒー・モノカルチャーやエジプトでの棉花栽培による)、また、機械設備の不足(例えばメキシコでのアガーベ収穫において)やインフラストラクチャーが不十分であること(スペインやポルトガル、ギリシャ、オーストリアにおける)あるいは入植の不足(メキシコ)による一国の生産力の休眠、というよりもむしろ素材的な富の浪費であった。抜粋のもう一つのテーマは、鉄道のエネルギー源に関係するものであった。すなわち、石炭やその費用、自由に処分可能なこと、代替可能性である。『資本論』第三部のための草稿のなかで、マルクスは、「労働の生産力は「……」自然的諸条件に縛られて」おり、「**自然的諸条件が社会的生産力の発展とは独立に、しばしば反対に、どこまで労働の生産性に影響を与えるかとい**

う研究の全体は「……」、地代の考察に「属する」と想定していた<sup>[142]</sup>。収集された資料は、このような研究に役立つことができたのであろう<sup>[143]</sup>。

[67a] 一八六八年春に農業問題について徹底的に取り組んだ後、マルクスはより狭い意味での経済学に移った。すなわち「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」のはじめに「流動」 („flüssig“) (あるいは „zirkulierendem“) 資本と「固定」資本の概念を、さまざまな著者の場合で比較した (S. 743-753, 761)。このような区別をマルクスはすでに「経済学批判要綱」と一八六三年から一八六五年までの『資本論』第二部のための第一草稿で取り扱っていたが、そこで彼が批判していたのは、アダム・スミスとデイヴィッド・リカードウにおける、彼の考えでは不適切な、以前の概念の区別であった。本ノートは、このテーマについての最新の文献を収録しており、『資本論』第二部のための第二草稿において用いられた<sup>[144]</sup>。すでに一八六七年秋／冬には、マルクスは見出し語に応じて出典の抜粋を整理し<sup>[145]</sup>、『資本論』第二部のための第二草稿および第四草稿でこの二冊のノートを用いた。

「固定資本と流動資本」の章のため、とりわけそこに挿入されている一七ページの研究のため、そして在庫形成と運輸業についての章のために、マルクスはとりわけ「農業ノート」の「一八六八年のノート三」において作成された、「鉄道についての王立委員会」報告書からの抜粋をもとにした資料を同じく詳細に用いたが、その資料は、さまざまな場所での列車やエンジン、線路の耐用年数を記述したものであった<sup>[146]</sup>。この時マルクスは、摩滅という概念を使用した。「摩滅は、固定資本が、その消耗によって、その使用価値を失っていく平均的程度に応じてだんだん生産物に引き渡していく価値部分のことである」<sup>[147]</sup>。使用そのものによる摩滅と自然諸力の作用による摩滅との区別を、マルクスは報告書からの例を用いて導き出している<sup>[148]</sup>。

第二草稿の第一章で問題になっているのは、小麦貯蔵費<sup>[149]</sup>、「鉄道王たち」と「産業者や商人」との対立に発展するとされる運輸業による価値付加と貨物運賃の関連<sup>[150]</sup>、また鉄道会社による輸送品の分類の問題<sup>[151]</sup>である。<sup>[151]</sup>マルクスが運輸資本と産業資本との間の利害対立を説明するのは、産業資本が絶えず削減しようとする資本の回転期間にとって、たとえば鉄道路線や電信線といったインフラストラクチャーがもつ重要性についての自身の議論においてである。すなわち、「資本の回転にとってのこうした事情の重要性は、いろいろな場所の代表者（商人と産業資本）とイギリスとフランスとドイツとの衝突に示されている（上記で引用した鉄道委員会の青書を見よ）」<sup>[152]</sup>。この抜粋のなかで、マルクスは、貨物の分類と乗客の扱いに関する鉄道会社の「ごまかし」について、二箇所まで参照している（S. 682.29 および 687.9）。

固定資本と流動資本についての研究に引き続き、マルクスは「一八六八年の固定資本と信用についてのノート」において、さらにヘンリー・ダニング・マクラウドやジョン・レイン、ロバート・ホガス・パターソンなどの当時出版された最新の著作から信用制度や貨幣市場、貸付可能資本、経済恐慌といった諸問題について抜粋を行った。これらの抜粋は、マルクスが一八六八年以降にさらに何回か、膨大な抜粋ノートで着手した恐慌や信用・銀行システムについての彼の新たな研究の発端をなした。

### 資本主義の周縁にて

マルクスは、『資本論』に関わる執筆や恐慌、信用・銀行制度についての抜粋（これらは MEGA<sup>2</sup> IV/19 および

IV25で公刊される)のほか、彼の生涯の最後の一五年間に、生理学(これはMEGA<sup>2</sup> IV23で公刊される)、化学、鉱物学、地質学、植物学、動物学(MEGA<sup>2</sup> IV26およびIV31)といった自然科学研究も行った[53]。もっとも、この研究は、たんに一八六三年から一八六五年までの『資本論』第三部のための草稿を、統計的あるいは事実 に即して補足または更新したことを意味するものではない。それと同じくらい、彼の経済学批判が先述の理論領域において非常に大きく拡張し、それは『資本論』のそれまでの計画を越えるように見えるものであり、それにともなって『資本論』の完成をはるかに困難なものにしたのだろう。このように、一八六八年以降、マルクスは人間と自然との間の相互作用を、それらの資本主義に独自の諸形態を理解するために、さまざまな観点から研究した[54]。最終的[B75]には、資本主義以前の社会や非西洋社会(これらのノートはMEGA<sup>2</sup> IV21からIV24まで、IV27およびIV28で公刊される)に取り組むことによって、マルクスの経済学批判の地理的範囲は広がった[55]。抜粋においてマルクスは、国際的な信用システムや銀行システムの発展、自然科学に関する知識の急速な進歩、資本主義の地理的拡大を跡づけた。マルクスは、不測の理論的新展開を彼の経済学草稿のなかでつねに説明していたわけではなかったため、エンゲルスによって編集された『資本論』の諸巻は最終的な版を示しているわけではなく、マルクスの抜粋がつねに考慮に入れられなければならない。

マルクスの経済学批判と彼が生涯の最後の一五年間に取り組んだ「新たなテーマ領域」——自然科学と資本主義以前の社会や非西洋社会——との関連を理解するために、本巻で公表された一八六八年の三冊の「農業ノート」は示唆に富んでいる。なぜなら、これらは、晩期マルクスの新たな研究の出発点を示しているように思われるからである。というのも、第一に、マルクスはここでまさにこの二つの分野に、具体的にはフラスとゲオルク・ルートヴィヒ・フォン・マウラーの著作を読むことによって、取り組んでいるからである。二人の著

作は相互に結びついているので、ここに、晩期マルクスの二つの中心的な研究分野を関連づける発端があるだろう。

第二に、ロシアやアイルランド、インド、エジプト、オスマン帝国のような、一部は非西洋的な、一部は植民地的従属におかれた、農業的な性格の濃い諸国の諸関係は、「農業ノート」の「一八六八年のノート三」で継続的に取り組まれたテーマである。マルクスはこのノートを、はじめ一八六八年三月から夏まで用いていたが、その後何度か、まだ空白のページを新しい抜粋で埋めるためにこのノートに立ち戻った。一八六八年一月、彼はアドルフ・スレイドの『トルコとクリミア戦争』からの抜粋を作成し、約一年後にも「コベットのポリテイカル・レジスター」からの抜粋を作成したが、それは[88]アイルランドの経済もテーマとしている。そして最後に、おそらく一八七二年一月にマルクスは、ニコライ・ガヴリーロヴィチ・チェルヌイシエフスキの未刊行原稿である『宛名のない手紙』からの抄訳的な性格をもつ抜粋をここに書き留めている。まずはこの二点目について見ていこう。

マルクスは、議会報告書からの抜粋においても、周縁部における諸関係についてたびたび取り上げている。彼が『資本論』第二部のための第二草稿において、「アイルランドでの<sup>156</sup>イングランドの鉄道管理が、いかにその国の生産力を発展させようとするかわりに、遊休させておくかは後の箇所で見ることになる」<sup>157</sup>と書いたとき、おそらく「鉄道についての王立委員会」報告書からの自身の抜粋を念頭においていた。マルクスは、『資本論』のための諸草稿のなかではこの関心事にはもう戻らなかったが、彼のこの抜粋には「アイルランドの漁業と鉄道」や「アイルランドの鉄道」という表題のもと、多くのキーワードが集められており、それらが注意喚起しているのは、いかにアイルランドにおける鉄道の拡張がアイルランドの発展に役立たず、むしろ、鉄道

によって資源をよりよくアイルランドから運び去ることができたがために、英国の植民地支配を深めたかということがある。「漁業人口の減少」〔……〕と同時に**鉄道の拡張**〔……〕（鉄道の拡張とともに、彼らは自分たち自身でとった魚をもちや食べておらず、ダブリンやロンドン、リバプール、バーミンガム、マンチエスターの人々が魚を食べているということについて述べる）（S. 690.11-14）。マルクスは、まさに鉄道の拡張によってアイルランドからグレートブリテンへ直に資源が売り払われていることについて、さらに次のように書き留めている。すなわち「ウシがイングラ

**ンドのために奪われた**」（S. 691.12）のである。

そのほかに、『資本論』第二部での在庫や在庫形成といったテーマに関する議論にとって重要なのが、アメリカの南北戦争によって引き起こされた綿花恐慌、「綿花飢饉」である。エジプトは、「綿花飢饉」の間に綿花の輸出国となったが、土地利用が変化したがゆえに食料の輸入国にもなったため、地価が四倍になったという。マルクスはこれを望ましくない変化、「変化（望ましくないもの）」（S. 693）とみなした。他方でスイスでは、この数年で、前もって蓄えられていた綿花在庫が「綿花飢饉の間の有利」として現れた（S. 691.15）。恐慌が支配的でないときには、これらの在庫の管理や保存は生産費の上昇を意味するだろう。しかし、スイスの紡績業者にとって、これらの在庫は、「綿花飢饉」の間には例外的に有利なものであることが明らかとなったであろう。それとは逆に、グレートブリテンでは「綿花飢饉」は綿花産業の大恐慌を防いだだろう。なぜなら、綿花産業は、それ以前には、綿花在庫を多く抱えずぎていたのであり、さらに綿花を輸入した場合には、大幅な価格下落を経験することになったはずだろうからである<sup>[58]</sup>。

[58] また、「在庫形成」の節のために、マルクスは、インドについての三つの議会報告書からの抜粋も利用したが、そのうちの二つ——「東インド（ベンガルとオリッサの飢饉）」と「東インド（マドラスとオリッサ）の飢饉」

——は、インドのオリッサ州（現オディッシュャ州）での飢饉を扱ったものである。この飢饉は一八六五年一月／一二月から一八六六年の終わりまで猛威を振るい、公的な報告によれば当時のオリッサ州の人口の三分の一にあたる一〇〇万人が死亡した。飢饉の直接的なきっかけは、モンスーンが発生しなかったことよって引き起こされた一八六五年冬の干ばつで、それは冬の米收穫の不振をもたらした。その際、秋の雨量は十分だったが、降水を貯めて分配するための灌漑システムが不十分だった。研究文献では、英国の植民地支配が間接的な責任を負っていることが認められている。オリッサの基幹産業、とりわけ塩産業と綿花産業が英国によって経営不振に陥らされていたのであり、そのことがこの地域で多くの失業と、収入の停滞、さらには減少をもたらした。同時に米価が高騰し、そのため米や小麦の古い在庫は使い果たされ、窮状の前も、その最中でさえもオリッサから輸出されていた<sup>[159]</sup>。ベンガルに本拠を置く「歳入局」は、オリッサで飢饉はなく、たんに経済的不況があるだけで、解消のための国家的な介入は必要ないという論拠によって、一八六五年一月には価格統制とオリッサへの臨時的な米の供給を拒否した。

マルクスは、すでに一八六七年八月一四日に彼の書籍商であるフィリップ・シュテファン・キングにこの報告書を注文しており<sup>[160]</sup>、『資本論』第一巻では二箇所での大惨事について言及していた。自然諸力の社会的統制、とりわけ灌漑の問題という文脈で、マルクスは次のように書いた。「インドの相互につながるのな小生産有機体に対する**国家権力**の物質的基盤の一つは、灌漑の調整であった。インドのムハンマド人の支配者たちは、このことについては、彼らのイングランド人後継者よりもよく理解していた。ベンガル太守のオリッサ州で二〇〇万人以上のヒンズー人の生命を犠牲にした一八六六年の飢饉を、思い出すだけでよいだろう」<sup>[161]</sup>。「農業ノート」の「一八六八年のノート三」において、マルクスは英国植民地行政の往復書簡や飢<sup>[162]</sup>饉の経過、

オリッサの地理的諸条件、自然の変化（たとえば森林伐採の洪水への影響について）、非常事態の間の英国植民地管理の失敗についてのキーワードを書き留めているが、基本的に、借地農業者たち（「ライヤット」と地主たち（「ザミンダール」）との間のインドの土地における階級諸関係や、英国の植民地政策、例えばインド農民への課税についてもキーワードを書き留めている。マルクスの抜粋では、インドの伝統的な経済と、一九世紀半ばに世界市場に統合された際にそれが破壊された状態との比較がたびたび問題になっている。古代インドには、価格統制のシステムや消費ファンドを優先させること、危機のときの生活手段の支給があったというが、それに対して近代インドでは食糧備蓄が枯渇し、米の価格が高騰したのであり、道徳的な経済がなければ農民は自由な賃労働者として市場に完全に依存するだろう。マルクスは、「現代の社会システムが飢饉に打ち勝つのは」前近代社会よりも「困難である」と書き留めており（S. 672.21-22）、本巻ではこの事項にもっとも明瞭な欄外書き込みを付与している。

また、マルクスは、一八六一年から出版されたシリーズ『インドの道徳的および物質的進歩と状態に関する報告』の一八六七年に刊行された版からも抜粋している。報告書が述べているのは、インドの借地農業者と地主は、灌漑を利用すると借地料ないしは地租を増加させられるということを恐れて、灌漑設備にほとんど手をつけようとしないうということだ。「ライヤットは彼にかかる地代が増加するという恐怖から水を定期的に利用することができない」（S. 672.64-65）<sup>16]</sup>のだ。

マルクスは『資本論』第二部のための第二草稿で、米や小麦の価格高騰の理由を、「綿花飢饉」によって綿花に対する需要が高まったことにみていた。綿花はますますインドで栽培されるようになり、しかもそれは、以前には食料生産のために使われていた土地で行われたのである。米価の高騰が、不作の場合のために穀物を

備蓄するというインドの伝統的な習慣を断ち切り、農業地域での貯蔵古米が売却されることにつながったのだろう。このようにして、「自己需要のための生産から商品生産への」移行は、「その土地の経済にもっとも恐ろしくもっとも危険な危機」を引き起こしたのである<sup>[163]</sup>。マルクスは、「備蓄という商品形態と備蓄そのものは、二つの異なるもの」であると要約し、「直接的な生産物備蓄が商品備蓄の形態に転化することにあたっての大惨事」について「インド、アルジェリア」の例を参照することを指示した<sup>[164]</sup>。

これらの評価は、マルクスの歴史観の新たな展開を示唆している。一八五三年の「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」の記事において、彼は<sup>[8]6</sup>まだ「これらの牧歌的な村落共同体が、たとえ無害にみえようとも、それがつねに東洋専制政治の強固な基礎となってきた」<sup>[165]</sup>と指摘し、それゆえ英国の植民地支配は近代化のための「社会革命」であるように彼には見えた<sup>[166]</sup>。しかしながら、後年、彼の見解は変化した。「経済学批判要綱」で彼は、人間と自然との間の物質代謝のあの「分離」は存在していなかったということを明らかにするために、ゲルマン的生産様式、古典古代的生産様式およびアジア的生産様式を「資本主義的生産に先行する諸形態」において研究した。ただし、『資本論』の初版ではまだ、「産業のより発展した国は、発展の遅れた国に対して、ほかならぬその国自身の未来の姿を」示しているという言明が見られる<sup>[167]</sup>。

この直線的な歴史的経過という示唆は、マルクスが生きている間にもすでに、特にロシアでは、当地で一八七二年に『資本論』第一巻の最初の翻訳が出版された後、議論になっていった。晩期マルクスの非西洋社会や資本主義以前の社会についての取り組みにとって、ロシアは大きな役割を果たすこととなった。マルクスはロシア語を学び、この国についてのさまざまな著作を読んだ。当時のロシアには、再分配的な共同体（ミール）がまだ存在しており、これが社会主義的社会の物質的な基礎として機能しうるのかどうか、あるいは、それは

近代化の過程がどんなに残酷なものであっても、まず資本主義的生産様式によって置き換えられなければならないのか、ということがさまざまな社会主義的潮流のもとで議論されていた。マルクスは『資本論』第一巻の翻訳者の一人であるゲルマン・アレクサンドロヴィチ・ロパーチンと個人的に知り合いであり、また他の二人の翻訳者、ニコライ・フランツェヴィチ・ダニエリソンとニコライ・ニコラエヴィチ・リュバーピンとは手紙のやり取りをする仲であり、彼らは農村共同体を基礎とした社会主義へのロシアの特別な道程を宣伝していた。とりわけロパーチンとダニエリソンを通じてマルクスは、シベリアに追放された革命家であり文芸評論家であるニコライ・ガヴリーロヴィチ・チュルヌイシェフスキーの著作を知り、彼の『宛名のない手紙』の草稿を「農業ノート」の「一八六八年のノート三」において、大部分自らドイツ語に翻訳している（S.705-719）（成立と来歴 S.1142-1144を見よ）。チュルヌイシェフスキーはここで、一八六一年の農政改革に対する自身の批判を展開しているが、彼の考えでは、これは貴族と土地所有者の利益のために行われたものであり、農民の解放ともなうものではなかった。これに対して、彼は「ミール」の維持、農奴の完全解放、そして農民にとって有利になるような土地の無償配分を要求している。

「農業ノート」の「一八六八年のノート三」が示しているのは、マルクスは、すでに一八六八年には資本主義以前の社会や非西洋社会にますます関心を持つようになっていたことである。すでに一八七二年から一八七五年までの『資本論』フランス語版で、マルクスは、本源的蓄積<sup>[80]</sup>の歴史を西ヨーロッパに限定するために<sup>[68]</sup>、一段落を修正しており、そこには一八六八年以降の非西洋社会への彼の徹底的な取り組みが表れている。結果として、マルクスは、『資本論』における自らの分析の妥当性の限界を明らかにしただけでなく、資本の力に対する非西洋の社会主義的抵抗の新たな可能性をも見てとったのである。

マルクスはロシア社会やインド社会についての知識を深めるにつれ、自覚的に自身の以前の洞察をより精密に規定した。彼の資本主義以前の社会に対する新たな評価は、ヴェーラ・イヴァノヴナ・ザスーリチへの手紙とその下書きにおいてまさに示されている。一八八一年二月、このロシアの女性社会主義者はマルクスに、ロシアの農耕共同体は歴史的法則的必然性にしたがってまず解体されなければならないのだろうか、それともそれが専制的な支配から解放されることができれば、社会主義への直接的な移行の可能性はあるのだろうか、と質問した<sup>169</sup>。マルクスはひとつの回答のために、四通の下書きを書き、それらのなかで、「この運動の「歴史的宿命性」は西ヨーロッパ諸国に明示的に限定されている」と繰り返し、またイングランドの植民地支配がインド社会に及ぼした進歩的作用を否定した<sup>170</sup>。マルクスは、いまでは資本主義以前の社会の「生命力」を強調し、それについて「原始的共同社会の生命力は、セム人、ギリシヤ人、ローマ人などの社会のそれよりも、まして現代資本主義諸社会のそれよりも、比較にならないほど大きかった」と指摘している<sup>171</sup>。さらに彼は「この「農耕共同体」が、それから生まれ出た新しい共同体にきわめてはつきりと刻印を押していることが見られ、そのため、マウラーは、後者の意味を読み解くことによって、前者を復元することができたほどだということである。〔……〕自己の原型から受け継いだ諸特質のおかげで、この共同体は、全中世をつうじて自由と人民生活の唯一の根源となっていた」<sup>172</sup>と続けた。

注目に値するのは、マルクスがこれらの手紙の下書きのなかで、本巻で徹底的に抜粋した二人の著者の知見に言及していることである。それは、マルクスがエンゲルスへの一八六八年三月二五日付けの手紙のなかで強調して称賛したのと同じ二人の著者である。つまり「二人は、過度の森林伐採から生じた気候変動の結果、古代文明（セム人、ギリシヤ人、ローマ人の社会）が没落したことを指摘したカール・フラスその人であった。こ

これらの社会では、すでに私的な土地所有システムが支配的であり、もはや土地はほとんど共同的に規制されていなかった[80]が、「原始的な諸共同社会」[73]では私的所有がまったく存在していなかった。まさにこのような共同的な規制力こそがその共同体に強い「生命力」、すなわち物質的生産の持続性を与えていたのである。

マルクスが名前をあげた二人目の著者は、ゲオルク・ルードヴィヒ・フォン・マウラーであり、彼の『マルク・ホーフ・村落・都市制度および公権力の歴史序説』をマルクスは一八六八年のはじめに詳細に読んだ。「農業ノート」の「一八六八年のノート二」および「一八六八年のノート三」で、彼はこの本のほぼすべての章から抜粋しているが(S. 542-559, 563-577 および 589-600)、そこで法歴史家のマウラーは、ゲルマン社会とその所有システムを論じている。すでに、ゲルマン共同体は個人的所有が優位であることによって特徴づけられると見ていたユストゥス・メーザーやニコラウス・キンドリッガーとは対照的に、マウラーは詳細な事例を用いて、共同体自身の構成員による長年にわたる共同的規制を証明しようとしている。農耕共同体の構成員たちは、耕作地などを抽選で年々再配分したのである。その際、共有地は庭園や畑地、草地、森林などとともに、共同利用のために用意され、民主的な調整を行っていたのだろう。マウラーを読んだ後、マルクスはエンゲルスに一種の「判断力の欠如にとらわれて」<sup>174</sup> いたことを伝えた。マルクスはマウラーに賛同し、現在もなお存在している共同的土地所有の痕跡を認識したのだ。

一見したところ、ミュンヘンの農学者であるフラスとミュンヘンの法歴史家であるマウラーとは、ほとんどなんの共通点も示していないように見える。しかし、フラスは、マルクスが持っていた『農業危機とその治療手段』という著作のなかで、マウラーの『序説』から引用を行っている。フラスが農業における生産性向上の歴史的法的性質を指摘するとき、彼はマウラーの論証を称賛しながら、ゲルマン的農耕共同体の例に言及し

ているのである。フラーズによれば、マウラーは「最初のゲルマン的村落形成は、すでに、つねに地力の向上の必要性という法則に従っていた」<sup>175</sup>ことを示したという。彼はマウラーを次のように解釈している。すなわち、「そしてもし、村落マルクがもちろんまだ木も、干し草や糞も、それどころか糞尿、牛（豚！）でさえも、村落構成員のほかにも販売することを認めず、マルク内で栽培されたすべての作物は、ワインを含めて、そこで消費もされなければならぬと命じていた（そこからしばしば独占的経営権が成立した）のであれば、畑地の力を維持するための手段が不足しなかったただけでなく、森林や牧草地の助力を利用したり、より多くは川によって施肥された草地を利用したりすることで、いたるところで（地）力の上昇が生じたに違いなかった（マウラー「……」）<sup>176</sup>。このことは、いくつかの資本主義以前の社会を特徴づけた「生命力」の物質的基礎以外の何ものでもない。

【66】おそらく、『農業危機とその治癒手段』を読んだことが、マルクスにマウラーの著作を読むきっかけを与えたのだろう。一八六八年三月二五日付けのエンゲルスへの手紙のなかで、マルクスはフラーズとマウラーの二人に「無意識的な社会主義的傾向」を認めた。一方でフラーズは、森林破壊が文明の崩壊をもたらし、近代的な生産諸力の上昇が事態の悪化を招いたと指摘し、そこからマルクスは、自然と意識的に関わることを将来社会の課題として導き出した。フラーズ自身は、自然力を利用することが持続的な農業経営にどのように貢献できるのか、を詳述した。他方でマウラーは、マルク共同体の農業は、すべての構成員の平等と自由を保証するような方法で組織されていたことを示した。それとともに彼は「最古のものなかに最新のもの」<sup>177</sup>を見出した。それゆえ、フラーズが、生産性が上昇するもてさえ生産が持続的であることを強調した一方で、マウラーは平等の可能性を説いた。この点で、マルクスが後年、自由と平等、持続性が支配的になるような生

産様式のための諸条件を研究するために二つの分野——自然科学と資本主義以前の社会——を同時に研究したことは理解できることである。

したがって、一八六八年のマウラーへの取り組みは、晩期マルクスの資本主義以前の社会についての研究の出発点であるように思われるが、それは、マウラーに続く、オリッサでの飢饉や「コベットのポリテイカル・レジスター」についての抜粋、またスレイドやチエルヌイェフスキーの本からの抜粋がすでに示しているとおりである。一八六八年以降、マルクスはさらに二度、マウラーの多数の著作から抜粋し<sup>178</sup>、さらにそれを越えて、資本主義以前の他の社会について研究した。この時期に作成された抜粋の公刊は、ザスーリチへの手紙の下書きにも、マルクスの最後の出版物である『共産党宣言』のロシア語第二版への序文にも新たな光を投げかけるであろう。後者では、マルクスはエンゲルスとともに次のように書いた。すなわち、「もしロシア革命が西欧のプロレタリア革命に対する合図となって、両者が互いに補いあうなら、現在のロシアの土地共有制は共産主義的発展の出発点となることができる」<sup>179</sup>。

マルクスはまた、ザスーリチへの手紙の第一の下書きのなかで科学についても語ったが、それは、資本主義が<sup>180</sup>直面していることに気づいた二重の困難という文脈においてであった<sup>180</sup>。リービッツヒヤフラーのような自然科学者は一方で、資本主義的生産様式のもとの農業生産性は、人間と自然との間の物質代謝を攪乱することなしには高めることができず、その結果、科学の潜在力は不十分にしか実現されないであろうと示した。他方で、資本は、その絶え間ない蓄積の結果、自己増殖を目指す「衝動」に簡単に従属させることができない他の社会の諸形態に遭遇するとされる。この点において、自然科学と資本主義以前の社会に関するマルクスの研究が統合されている。二つのテーマ領域に対する彼の関心は、一八八三年に彼が亡くな

るまで続いた。

## 編集者例言

本巻は、一九九三年から用いられている編集方針にしたがって編集された<sup>[18]</sup>。校訂済みテキストの基礎をなすのは、マルクスとエンゲルスの現存するオリジナル草稿である。

抜粋ノートと手帳は年代順に配列され、すなわち、それらの成立順に再現されている。例外は、「農業ノート」の「一八六八年のノート」にあるMs-S-[1]-[28]の覚え書きと抜粋で、それらの大半は、マルクスがこのノートを一八六八年一月から農業に関する研究を続けるために利用する前の、一八六四年から一八六七年末までの間に作成された。ノートの時期推定の根拠は、個々のノートやテキスト典拠に関係する付属資料部分である成立と来歴に記した。

抜粋ノートと手帳のなかの資料は、異なる時期に作成された可能性がある。校訂済みテキストは、マルクスのノートのページ付けに従っている。マルクスがノートあるいは手帳にページ付けをしていなかった場合には、校訂済みテキストはノートあるいは手帳の物理的な始まりから終わりまでのページの順序に従っている。とりわけ手帳については、ここに含まれている資料の成立時期が異なることが、筆記具が異なることによって示されている。注解と典拠文書についての記録には、用いられた筆記具についての情報が記載されている。

マルクスとエンゲルスは多言語の典拠から抜粋しているため、校訂済みテキストも、とりわけドイツ語、英

語、フランス語、ロシア語、オランダ語、イタリア [80] 語、ラテン語、古代ギリシャ語を含んでいる。マルクスは、テキストの節句を逐語的に書き写したり、より長い一節を部分的に自分の言葉で要約したりしたので、文法的、統語的、正書法的には特異で、また誤りも示すような多言語混在のテキストが作成された。正書法の統一ないし現代語化は行わなかった。一般的な略称 (u, od, v, j) やマルクスが頻繁に使用した略称 (G.F., B. o. E.) はそのままにしておき (略称・略語・記号一覧を見よ)、その他の略された語やマルクスが略したドイツ語の冠詞 (d) は、編集者フォント (下点) で略さずに書いた (der, die, das など)。マルクスがしばしば行った単語の短縮によって省略され、短縮され、つづめられた文字は、校訂済みテキストでは無印で書かれている。例として挙げられるのは、„dch“ (durch) , „währd“, „whhd“ (während) , „Engld“ (England) である。このことは、二重の n や m に対して一文字のみで、その上に横棒が書かれた単語にも適用されている。

抜粋ノートと手帳には、三枚の糊付けされた新聞の切り抜きが収録されている。この種のテキストと手書きのテキストとを区別するために、糊付けされた新聞の切り抜きは八ポイントのフォントサイズで印刷され再現されている。マルクスとエンゲルスの手書きは一〇ポイントのフォントサイズで、また彼らが手書きで作成した比較的大きな表は八ポイントで再現されている。

校訂済みテキストには、マルクスやエンゲルスが自分自身で使用するために作成した草稿や覚え書きが含まれており、それゆえ多くの不備や矛盾が見られる。明らかな書き間違いや写し間違い、事実の記載間違いは編集上訂正された。句読点や引用符、括弧の欠落は、それがテキスト理解のために必要なことが明らかな場合のみ付け加えた。判読が困難な文字は、大文字の「X」あるいは小文字の「x」で再現されている。テキストのこうした変更はすべて、訂正目録に示されている。テキスト理解のために必要な編集上の挿入 (たとえば、欠

落している単語や、抜粋の個々の節の表題の欠落など）は、編集者フォント (Helvetica) で印刷し、角括弧で囲んでいる。これについて必要な指摘は訂正目録の評注に示されている。

典拠のテキストを再現していることを示すためにマルクスによって付けられた引用符のすべては、すべてフランス語の逆引用符 (◁▷) として統一的に示されている。マルクスが抜粋したテキストを (◁▷) で示された引用符で囲んだ場合、それは通例、ほぼ逐語的な引用となっている。典拠のテキストから抜粋に引き継がれた引用符や、典拠から抜粋されたテキストを囲んでいない引用符は、通常の形 (◁▷) で再現されている。

手稿ページの先頭と末尾は、校訂済みテキストに明示されている。また、マルクスのページ付けは示されており、あるいはそれが無い場合には、編集上、角括弧で補足されている (略称・略号・記号一覧および典拠文書についての記録を見よ)。

【666】マルクスが抜粋した典拠のページに関する欠落や不完全な記載は、編集者フォントと角括弧で補足されている。これらの補足は、著者の書き方に応じて、テキストのより大きなまとまりの最後におかれている。

テキスト内の強調はすべてマルクスとエンゲルスによるものである。抜粋されたテキストの下線は、それらが抜粋そのものと同じ筆記具で引かれたものであれば、イタリック体で再現されている。マルクスが抜粋で用いた筆記具ではなく、それゆえ、おそらくより後の時点で引いたと思われる下線は、校訂済みテキストでは「青鉛筆、赤鉛筆、鉛筆」のように記されている。

切り抜かれたテキストに書かれたマルクスの下線は下線で再現されている。新聞の切り抜きにおける強調 (イタリック体あるいは隔字体で印刷された単語) はイタリック体で再現されている。

欄外の線引きは、校訂済みテキストでは、「インク」<sup>1</sup>、鉛筆<sup>1</sup>、青鉛筆<sup>1</sup>のような縦線で示されている。

その他の欄外の目印は適切な方法で再現されている。

巻中に再現されている各テキスト典拠に対しては、学術的な付属資料が提供されている。付属資料は成立と来歴の部分（典拠文書についての記録を含む）と訂正目録および注解から構成されている。注解には、とりわけマルクスが典拠に見て取った文献についての指示やマルクスの他の著作への指示が収録されている。抜粋され糊付けされた新聞記事のうちいくつかは典拠が不明であるが、多くの場合、他の雑誌に掲載されたほぼ同じテキストを、いわゆる「代替典拠」とすることができた。

資料には、マルクスによる広範な書誌に関する覚え書きが収録されている。すべてのタイトルは、文献索引に完全な書誌情報とともに収録されている。これらは、a) マルクスの覚え書きにあるタイトルが明確に識別できないため、文献索引で容易に見つけることができない場合、またはb) タイトルが推測されるだけである場合、またはc) マルクスによってタイトルが使用されたことが報告されているか、またはマルクスの蔵書一覧においてその本を確認することができる場合に、注解が加えられている。この一覧は、マルクスおよびエンゲルスの個人蔵書で確認されたものの注釈付き目録 (MEGA<sup>2</sup> IV/32) 、ダニエルのリスト (MEGA<sup>2</sup> IV/5) およびマルクス・エンゲルスの蔵書の多くのタイトルを受け入れたSPD図書館の目録である。

本巻には、さらに人名索引、文献索引、付属資料で検討された典拠と利用された研究書の目録、ならびに校訂済みテキストの最重要見出し語を収録した事項索引が含まれている。英国大使館と領事の三〇の議会報告書からの抜粋については、マルクスは独自の事項索引を作成した（「上記のための簡略化した索引」(S. 666-669) を見よ）。人名索引には、校訂済みテキストにおける人名綴りのうち、確実な形から逸脱しているものはすべて丸括弧に入れて挙げられている。

[800]本巻は、大谷禎之介(東京)およびベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー(BBAW)のティム・グラースマンの指揮のもと東京の日本MEGA編集委員会で編集された。編集委員会には明石英人(東京)、浅川雅己(札幌)、斎藤幸平(大阪)、佐々木隆治(東京)、隅田聡一郎(東京)、平子友長(東京)、高畑明尚(沖縄)、森下宏美(札幌)が所属している。そのほかに、天野光則(千葉)、伊藤武(大阪)、出雲雅志(神奈川)、竹永進(東京)、鳥居伸好(東京)、内田博(札幌)も様々な作業段階で参加した。全体の編集、付属資料の諸部分、成立と来歴の事柄および解題の仕上げは斎藤幸平とティム・グラースマンによって行われた。解題では斎藤幸平の „Natur gegen Kapital: Marx' Ökologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus“ (Frankfurt a.M. 2016) から研究成果が組み込まれた。典拠文書についての記録は大谷禎之介がリウドミール・ヴァーシナ(モスクワ)の協力のもと作成した。事項索引は、斎藤幸平、明石英人、隅田聡一郎、佐々木隆治が作成した。

本巻の編集者は、以下の方々の協力と支援に感謝する。リウドミール・ヴァーシナは、ロシア語の典拠からの抜粋の編集に協力してくれた。ロルフ・ヘッカーは解読作業に携わり、ヴァルター・シュミットとともに「ヴェルヘルム・ヴォルフについての伝記的覚え書き」についての注解を執筆してくれた。付属資料のためのラテン語の引用文の翻訳は、ウルリーケ・ホーエンゼー(BBAW)と平子友長によって行われた。ギヨーム・フォンデュとジャン・ケティエはフランス語のテキストの訂正を読んでくれた。クラウディア・ライヒェル(BBAW)フープマン(BBAW)、クラウディア・ライヒェル、羽島有紀、神岡秀治、菊地賢、隅田聡一郎(いずれも東京)が協力した。さらに編集者は、本巻の準備と編集に協力してくださったすべての機関、とりわけアムステルダム・社会史国際研究所(IISG)およびモスクワのロシア国立社会政治史文書館(RGASPI)に感謝の意を

表したいと思う。最後に、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーが本作業を包括的に支援してくれたことに感謝する。

本巻の編集作業は二〇一八年一二月に完了した。

- [一] Marx an Engels, 1. Mai 1865. In: MEGA<sup>2</sup> III/13. Br. 239. 5-7.
- [二] Karl Marx: Zur Kritik der Politischen Oekonomie. Erstes Heft. Berlin 1859. In: MEGA<sup>2</sup> II/2. S. 95-245.
- [三] Marx an Engels, 13. Februar 1866. (MEGAdigital.)
- [四] 「そんなわけで、私の著作を完成するために、仕事のひまの瞬間はすべて利用しなければならぬ。私は健康も人生の幸福も家族も犠牲にこつきたのだよ。」(Marx an Sigfrid Meyer, 30. April 1867. (MEGAdigital.))
- [五] Marx an Johann Philipp Becker, 17. April 1867. (MEGAdigital.)
- [六] Engels an Marx, 11. März 1865. In: MEGA<sup>2</sup> III/13. Br. 180. 53. ㊦<sup>46</sup>
- [七] Karl Marx: Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Erster Band. Hamburg 1867. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 7.
- [八] Marx: Das Kapital. Bd. 1. 3. Aufl. MEGA<sup>2</sup> II/8. S. 591. 37-41. ㊦<sup>46</sup>
- [九] マルクスは「一八六七〜一八六八年の草稿におおむね同様の計算を行っている」。MEGA<sup>2</sup> II/4. 3. を見<sup>46</sup>
- [一〇] Karl Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 561-583. ㊦<sup>46</sup>㊧<sup>46</sup>㊨<sup>46</sup>㊩<sup>46</sup>
- [一一] Ebenda. S. 664. 9-29.

- [25] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 493.
- [26] 彼はエンゲルスの一八六六年二月三日付の手紙を以てのちうに述べてゐる。「この『呪われた本』はどうか、それはどうなつてゐる。それは一二月末にできあがつた。時代に關する論述、つまり最後から二番目の章だまでも、今の草稿では、ほとんど一冊の本をなしてゐる。僕は、昼間は博物館の行方、晩に書きた。」(MEGAdigital)
- [27] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 725.
- [28] Karl Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863). In: MEGA<sup>2</sup> II/3.3. 頁<sub>46</sub>。
- [29] Marx an Engels, 13. Februar 1866. (MEGAdigital)
- [30] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 723.
- [31] Marx an Engels, 13. Februar 1866. (MEGAdigital)
- [32] William H. Brock: Justus von Liebig. The Chemical Gatekeeper. Cambridge 2002. S. VII. 頁<sub>46</sub>。
- [33] Karl Marx: Exzerpte aus Justus Liebig: Die organische Chemie ... In: MEGA<sup>2</sup> IV/9. S. 172-213.
- [34] Karl Marx: Exzerpte aus Justus von Liebig: Ueber Theorie und Praxis in der Landwirtschaft (HSG, MEN, Sign. B 93).
- [35] Mark R. Finlay: The Rehabilitation of an Agricultural Chemist: Justus von Liebig and the Seventh Edition. In: Ambix. Vol. 38. 1991. Nr. 3. S. 155-166. 頁<sub>46</sub>。
- [36] [Wilhelm Hamm:] Justus von Liebig. In: Agronomische Zeitung. Jg. 20. 1865. Nr. 50. S. 791. Zitirt nach Wolfgang Böhm: Biographisches Handbuch zur Geschichte des Pflanzenbaus. München 1997. S. 189.

- [25] Wilhelm Roscher: System der Volkswirtschaft. Bd. 2. Nationalökonomik des Ackerbaues und der verwandten Urproductionen. 4. verm. und verb. Aufl. Stuttgart 1865. S. VI. やや広いロッシェナー持論のよらいを書こうとする。「彼が国民経済学的重要なる一つかもの事実を見逃してしまふところも、それではこの偉大な自然研究者の名が、つねにアレクサンダー・フンボルトの各々同様に、国民経済学の歴史にならうべき重要な地位を占め続けるべきである。」(Ebenda. S. 66.)
- [26] Karl Marx: Exzerpte aus James Finlay Weir Johnston: Lectures on Agricultural Chemistry and Geology. In: MEGA<sup>2</sup> IV/9. S. 276-317; und ders.: Exzerpte aus James Finlay Weir Johnston: Catechism of Agricultural Chemistry and Geology. In: MEGA<sup>2</sup> IV/9. S. 372-386.
- [27] Marx an Engels, 13. Oktober 1851. In: MEGA<sup>2</sup> III/4. S. 232. ——「ハコウ井代ジヤトランスはシモンソンの地質学の著作『農林社会学や地質学の概論』(Edinburgh, 1842) から抜粋しようとする。この抜粋はこうだが、MEGA<sup>2</sup> IV/26. S. 70-82 に収録されたはず。」
- [28] Karl Marx: Exzerpte aus: The Economist 1851. In: MEGA<sup>2</sup> IV/8. S. 88-90.
- [29] Marx an Engels, 13. Oktober 1851. MEGA<sup>2</sup> III/4. S. 232.
- [30] Marx an Engels, 13. Februar 1866. (MEGAdigital.)
- [31] Marx an Engels, 13. Februar 1866. (MEGAdigital.)
- [32] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 97.
- [33] Karl Marx, Friedrich Engels: Deutsche Ideologie. Manuskripte und Drucke. In: MEGA<sup>2</sup> I/5. S. 71/72.
- [34] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 409.
- [35] Ebenda. S. 410.
- [36] Ebenda.

- [9] Ebenda. S. 184/185.
- [10] Ebenda. S. 183, 184 頁 46 の 205.
- [11] Marx an Engels, 10. Februar 1866. (MEGAdigital.)
- [12] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 410-413.
- [13] 「実用に供しようとするの必要があるからかたにかかわりなく、なにかの分野で新しい科学的進歩が達成されるまで、彼ほど純粹に喜ぶことのできた人はほとんどいませんでした。」(Friedrich Engels: Draft for the Speech over the Grave of Karl Marx. In: MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 403.)
- [14] Marx an Engels, 4. Juli 1864. In: MEGA<sup>2</sup> III/12. Br. 375.32-36.——「わたしのテキストをプレゼントせよ以前にロマンソンの書籍商のカタログから書き留められた。注解 23.22, 24.8, 24.9 頁 46 の 24.10 を見よ。彼の処理済みの線引は、彼が、この本のリストに書き留められた、わたしが四つの自然科学のタイトルを入手したことを示している。ちなみに、George Combe: The Constitution of Man (注 23.24), P. Evers: The Student's Compendium of Comparative Anatomy (注 23.38), William Lovett: Elementary Anatomy and Physiology (注 23.31), Robert Bunsen: Gasometry (注 24.11) がある。」
- [15] Marx an Engels, 4. Juli 1864. MEGA<sup>2</sup> III/12. Br. 375.44-47.
- [16] [Charles] Adolphe Wurtz: Histoire des doctrines chimiques depuis Lavoisier jusqu'à nos jours. Paris, Londres, Leipzig 1869. プレントマンの本を彼の蔵書として持っている (MEGA IV/32. Nr. 1432)。一八七〇年代における分子論に関する彼の取組みについては MEGA<sup>2</sup> IV/31. S. 285-294 参照。
- [17] William Nassau Molesworth an Marx, 23. und 25. August 1865. In: MEGA<sup>2</sup> III/13. Br. 296 und 297 参照。

[45] Karl Marx: Exzerpte aus Henry Enfield Roscoe: Kurzes Lehrbuch der Chemie (IISG, MEN, Sign. B 108); und in: MEGA<sup>2</sup> IV/31. S. 3-463. Handexemplar mit Marginalien von Marx: RGASPI, Sign. f. 1, op. 1, d. 6407. (MEGA<sup>2</sup> IV/32. Nr. 1139)

[46] マルクスは『化学詳解』を彼のフリードリヒ・シェードラー『自然読本』やシエイムズ・フインレー・ウート・シヨーンストン『農業化学および地質学の要素』からの抜粋のなかに用いている。MEGA<sup>2</sup> IV/26. S. 45-94 ㊦㊧ MEGA<sup>2</sup> IV/31. S. 3-463.

[47] 「農業および林業」および「自然科学、数学、技術学」の項目の索引 (MEGA<sup>2</sup> IV/32. S. 730 ㊦㊧ 737) を見よ。

[48] Marx an Engels, 28. Januar 1863. In: MEGA<sup>2</sup> III/12. Br. 207.37; Marx an Engels, 9. März 1870 (IISG, MEN, Sign. L 4645) を見よ。同様で、イェニー・マルクスは、ヨハン・フョリッペン・シッカーへの一八六六年一月二九日付けの手紙において、ハクスリーの講義に彼女の子どもたちを連れて参加したことを書いて書いている (MEGAdigital)。㊦㊧ Jenny Marx (Tochter) an Eleanor Marx, Juni (RGASPI, sign. f. 7, d. 253. 再版㊦㊧ O. Worobjowa und I. Sinelnikowa: Die Töchter Marx. Berlin 1984. S. 56) を見よ。

[49] 「私はロンドン大学でのハクスリー教授やティンダル教授、ホフマン教授による生理学や地質学、化学についての講義に定期的に参加していた。〔……〕ここでは私たちにそうするよう鼓舞したのはカール・マルクスだった。マルクス自身はこの講義にときおり参加するのを常としていた。」 (Friedrich Leßner: Vor 1848 und nachher. Erinnerungen eines alten Kommunisten. In: ders.: Ich brachte das „Kommunistische Manifest“ zum Drucker. Berlin 1975. S. 98.)

[50] 「とくに自然科学の分野において〔……〕マルクスはあらゆる新刊を追いか求め、あらゆる進歩をつきとめていた。また、モレシヨットやリービッヒ、ハクスリー——彼らの「一般講座」にわれわれ

はきちんと参加していたのだが——は、リカードウやアダム・スミス、マカロック、スコットラン  
 ンやイタリアの国民経済学者のちやうに「しばしばわれわれの仲間内で名前があがった。」(Wilhelm  
 Liebknecht: Karl Marx zum Gedächtnis. In: Mohr und General. Erinnerungen an Marx und Engels.  
 Berlin 1965. S. 81.)

[5] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 395.28-36.

[5] Karl Marx: Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Erster Band. 2. Aufl. Hamburg 1872.

In: MEGA<sup>2</sup> II/6. S. 308.43-44 und Var. 104°.

[5] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 427.35-39. 本巻で公刊された抜粋は、ある雑誌に掲載さ  
 れたクローヴの講演からのものである(成立と来歴 S. 1022を見よ)。

[5] Marx an Ferdinand Lassalle, 16. Januar 1861. In: MEGA<sup>2</sup> III/1. Br. 202.55-56.

[5] 「ダーウインが、分業や競争、新市場の開拓、「諸発明」やマルサスの「生存競争」をともなう彼の  
 イングランド社会を、動植物界のなかでも再認識しているということは、注目に値する。それは  
 ホップズの言う「万人の万人に対する闘争」であり、また『現象学』のなかのヘーゲルを思い出さ  
 せるが、ここではブルジョア社会が「精神的な動物界」として現れ、他方でダーウインにおいては  
 動物界がブルジョア的社會として現れるのだ。」(Marx an Engels, 18. Juni 1862. In: MEGA<sup>2</sup> III/12. Br.  
 82.38-45.)

[5] Louis Kugelmann an Marx, 8. April 1868: 「[……] 私は、いま彼(フイルヒョウ)にあなたの著作  
 への注意を喚起し、彼に、いかにあなたが細胞としての商品形態を出発点としてブルジョア社会を  
 分析しているか等、あなたが経済学において採用している方法が、彼が医学において採用している  
 方法と同じなのだということを伝えます。あなたの『資本論』はブルジョア社会の「細胞病理学」  
 と適切に称することができるのだ。」(RGASPI, Sign. f. 1, op. 5, d. 1849.)

- [7] Marx an Kugelmann, 17. April 1868 (JISG, MEN, Sign. C 349). ヲルクヌスが指こつたのぞ、Rudolf Virchow: Die Cellularpathologie in ihrer Begründung auf physiologische und pathologische Gewebelehre. Berlin 1858 の「ツルツル」を指す。
- [8] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 12.
- [9] 一八六四年八月三十一日。『マルクスはエンゲルスに「シュライデンがもつてゐるのは「愚説への生得の素質であり、彼は誤解の結果として細胞を発見したにもかかわらず、そうである」と語つた(MEGA<sup>2</sup> III/12, Br. 402.31-33)』。
- [10] 脚注「ツルツル」を見よ。また、Seungwan Han: Die Metapher der Zelle. Zur Rekonstruktion Marxscher epistemischer Kontexte. In: Karl Marx - zwischen Philosophie und Naturwissenschaften. Hrsg. von Anneliese Griese und Hans-Jörg Sandkühler. Frankfurt a. M. u. a. 1997. S. 105-128 を見よ。
- [11] Karl Marx: Ökonomisch-philosophische Manuskripte. In: MEGA<sup>2</sup> I/2. S. 263.
- [12] Marx, Engels: Deutsche Ideologie. MEGA<sup>2</sup> I/5. S. 8.
- [13] 「他方で、地代は土地の豊度の不変指数としては役立つことができない。なぜならば、近代における化学の応用はたえず地質を変化させることができるからであり、また地質学上の知識が、今日まさに相対的な豊度の旧来の評価をまったくくつがえし始めているからである。イングランドの東部諸地方における広大なこれまで未開墾であった土地で耕作するようになったのは、たかだが二〇年前からだが、それは腐植土と下層土の成分との関連がようやく最近評価されるようになったからである。だから、歴史が、地代においてできあがつた土地評価台帳を与えてくれるのではなく、それどころか、いかに歴史が既成の土地評価台帳をつねに変化させ、完全に覆すのかが見られるのである。」(Karl Marx: Das Elend der Philosophie. In: MEGA<sup>2</sup> I/30. S. 325.)

- [51] Ebenda. S. 327 ㊦㊧ Marx an Engels, 7. Januar 1851. In: MEGA<sup>2</sup> III/4. S. 10 ㊦㊧㊨。
- [52] Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863). MEGA<sup>2</sup> II/3. S. 765.
- [53] Karl Marx: Exzerpte aus James Anderson: An Inquiry into the Causes ... In: MEGA<sup>2</sup> IV/9. S. 119; ders.: Exzerpte aus James Anderson: Essays Relating to Agriculture and Rural Affairs. In: Ebenda. S. 124 ㊦㊧㊨㊩。
- [54] Karl Marx: Exzerpte aus Henry Charles Carey: The Past, The Present, and the Future. In: MEGA<sup>2</sup> IV/8. S. 745 ㊦㊧㊨㊩㊰。
- [55] Ebenda. S. 743, 744, 746.
- [56] Marx: Exzerpte aus Liebig: Die organische Chemie ... MEGA<sup>2</sup> IV/9. S. 209. [監註: S. 210 ㊦㊧㊨㊩㊰㊱]
- [57] Marx an Engels, 14. August 1851. In: MEGA<sup>2</sup> III/4. S. 183. ㊦㊧㊨㊩㊰㊱ 『國民雑誌』批評大體』に於て『フナキハの雜誌』に於て『森田の雜誌』を論じてゐるに『フナキハの雑誌』に於ては。
- [58] Roland Daniels: Mikrokosmos. Entwurf einer physiologischen Anthropologie [1851]. Frankfurt a.M. 1988. Roland Daniels an Marx, 8. Februar 1851. In: MEGA<sup>2</sup> III/4. S. 308.
- [59] Karl Marx: Reflection. In: MEGA<sup>2</sup> IV/8. S. 233/234.
- [60] Ernst Haeckel: Generelle Morphologie der Organismen. Allgemeine Grundzüge der organischen Formen-Wissenschaft, mechanisch begründet durch die von Charles Darwin reformirte Descendenz-Theorie. Bd. 1.2. Berlin 1866 ㊦㊧㊨㊩㊰。
- [61] Eugene P. Odum: The Strategy of Ecosystem Development. An Understanding of Ecological Succession Provides a Basis for Resolving Man's Conflict with Nature. In: Science. Vol. 164.

1969. Is. 3877. S. 262-270. マルクスはテオドール・シュヴァーンの「細胞論」をも知っており、その理論は「細胞の化学的変化や相互作用を「代謝的な」という形容詞を用いて記述している。脚注41を見よ。

[7] [Julius] R[obert] Mayer: Die organische Bewegung in ihrem Zusammenhange mit dem Stoffwechsel. Ein Beitrag zur Naturkunde. Heilbronn 1845; Jac[ob] Moleschott: Die Physiologie der Nahrungsmittel. Ein Handbuch der Diätetik. Darmstadt 1850; ders.: Lehre der Nahrungsmittel. Für das Volk. Erlangen 1850; Ludwig Feuerbach: Die Naturwissenschaft und die Revolution [1850]. In: Gesammelte Werke. Bd. 10. Berlin 1971. S. 347-368.

[8] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 129.

[7] 「自然ははじめ、純粹に、人間にとつての対象となり、純粹に、有用性をもつ物象となり、独自の威力と認められることをやめる。また、それどころか、自然の自立的な諸法則の理論的認識が、自然を、消費の対象としてであれ、生産の手段としてであれ、人間の諸欲求に服従させる。そのための狡猾なこじつけが現れなす。」(Marx: Grundrisse. MEGA<sup>2</sup> II/1. S. 322.) マルクスは「このことを『経済学批判要綱』におおつて「資本の偉大な文明化作用」とみなした。

[8] Ebenda. S. 393.

[9] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 12.

[8] Marx: Exzerpte aus Johnston: Lectures on Agricultural Chemistry and Geology. MEGA<sup>2</sup> IV/9. S. 288, 292/293, 312を見よ。後にマルクスは以下のように書つてゐる。「やまやまな地質の諸層の順次的継起について、ひとは、明確に分離された諸時代が突如として現れるなどと考えてはならないが、さまざまの経済的社会的構成体の形成にうつつても同様である。」(Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863). MEGA2 II/3. S. 1972.) -Anmerkung

Griese: Die naturwissenschaftlichen Studien von Marx. Versuch ihrer Einordnung in die Wissenschaftsentwicklung des 19. Jahrhunderts. In: Interaktionen zwischen Philosophie und empirischen Wissenschaften. Hrsg. von Hans Jörg Sandkühler. Frankfurt a.M. u.a. 1995. S. 263-287 ※註 46

[62] Handwörterbuch der Physiologie mit Rücksicht auf physiologische Pathologie. Hrsg. von Rudolph Wagner. Bd. 1. Braunschweig 1842. S. XXI.

[62] Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863). MEGA<sup>2</sup> II/3. S. 817.

[63] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 246.

[63] Lothar Meyer: Die Chemie in ihrer Anwendung auf Forstwirtschaft. In: Zeitschrift für Forst- und Jagdwesen. Hrsg. von Bernhard Danckelmann. Bd. 1. Berlin 1869. S. 312-341, hier: S. 320.

[63] H[enry] C[harles] Carey: Die Grundlagen der Socialwissenschaft. Bd. 1. München 1863. S. 350.

[63] マックス・ヴェーバーもまた、近代的生産の掠奪的性格に以下のちうな警告を発した。「掠奪とはちなるが、一定期間の後には鉱山がもはや利益をこもなかつて掘るべきでなくなるとう危険を冒しつゝ、ちなるかゝる急速かつ高う利益のちを顧慮しつて経営が行われるとうの危険を〔……〕」(Max Wirth: Grundzüge der National-Ökonomie. 2., umgearb., verm. und verb. Aufl. Bd. 2. Köln 1861. S. 292.)

[63] H[enry] C[harles] Carey: Letters to the President on the Foreign and Domestic Policy of the Union, and its Effects, as Exhibited in the Condition of the People and the State. Philadelphia 1858. S. 55.

[63] Justus von Liebig: Chemische Briefe. Wohlfelte Ausgabe. Leipzig, Heidelberg 1865. S. 487.

- [81] Adolf Mayer: Das Düngerkapital und der Raubbau. Eine wirtschaftliche Betrachtung auf naturwissenschaftlicher Grundlage. Heidelberg 1869. S. 45.
- [82] Karl Marx: Draft of a Speech on the “Fenian Question”. In: MEGA<sup>2</sup> I/21. S. 19. 一八世紀末の隆のイギリスの産業空洞化についてのマルクスの評価についての「文」を思ふ。 Entwurf des Vortrags über den Fenianismus im Arbeiterbildungsverein. In: Ebenda. S. 26/27.
- [83] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 569.
- [84] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 752/753.
- [85] Ebenda. S. 838.
- [86] [William] Stanley Jewons: The Coal Question; an Inquiry Concerning the Progress of the Nation, and the Probable Exhaustion of Our Coal-Mines. London, Cambridge 1865.
- [87] 一八八二年一月十九日「エンヂルスはマルクスに次のように書き送った。「ボドリンスキーが完全に忘れてゐるのは、労働してゐる人間は、たんに現在の太陽熱の固定者であるだけでなく、それよりもずっとはなはだしい過去の太陽熱の浪費者であるといふことだ。エネルギーの貯蔵物である石炭や鉄石、森林などの乱費をおごつて、われわれが何をきつてゐるか、僕より君のほうがよく知つてゐる。」(HSG, MEN, Sign. D 1878.)
- [88] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 744-753. 成立と来歴 S. 968-970 を参照せよ。
- [89] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 718.
- [90] [Eugen] Dühring: Bodenvergeudung und Volkswirtschaft. In: Centralblatt für die gesammte Landeskultur. Jg. 17. Prag 1866. S. 135.

- [6] James [Finlay] [Weir] Johnston: Notes on North America. Agricultural, Economical, and Social. Vol. 1. London 1851. S. 54/55.
- [7] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 670.
- [8] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 409/410.
- [9] Marx an Laura und Paul Lafargue, 11. April 1868 (RGASPI, Sign. f. 1, op. 1, d. 6052).
- [10] Marx an Louis Kugelmann, 6. März 1868 (IISG, MEN, Sign. C 346).
- [11] Marx an Louis Kugelmann, 17. März 1868 (IISG, MEN, Sign. C 347). これがあつた事実なら、  
このころに、本巻S. 85, 18の彼の支出を見よ。
- [12] Marx an Engels, 3. Januar 1868 (IISG, MEN, Sign. L 4512).
- [13] Engels an Marx, 6. Januar 1868 (IISG, MEN, Sign. D 1661).
- [14] 二月のはじめには、シヨルレンマー自身が次のような否定的な返答をしている。「過去数年の農芸化学の進展については、文献が手に入っていなかったため、ほとんど追うことができていない。一八六六年の化学の進展についての年誌はまだ完全には出版されておらず、農芸化学を含む分冊を受け取るのは来月になる。フラスコの沖積理論については、君以上には知らなからぬ。〔……〕ローズとギルバートの様々な論考がある。彼らは昨年、王立協会の賞をもらつてゐる」(IISG, MEN, Sign. D 3986)。この返答はおそらくマルクスを失望させるものだっただろう。というのも、マルクスはすでに一八六〇年代のはじめには、リービッチによる論駁書である『理論と実践』(ブラウンシュヴァイク、一八五六年)を読み、ローズやギルバートとリービッチの間の論争を追っていたからである (IISG, MEN, Sign. B 93)。
- [15] 「彼によって提起された問題は、あらゆる教養ある実践人たちの間での時の話題となった。ほどなくして、ほぼすべての農業関連の集会の議題にあがるようになり、同時に、文筆家や出版社の投

機にとつてたぐさんの儲けをもたらす源泉になったのだ。」(Julius Au: Die Hilfsdüngemittel in ihrer volks- und privatwirtschaftlichen Bedeutung. Eine gekrönte Preisschrift. Heidelberg 1869. S. 85.)

[57] フウの『補助肥料……』(脚注81)のほかに、マルクスが所有し詳しく読んでおられたメグアートの『メグア (MEGÄ<sup>2</sup> IV/32. Nr.42)』[Johannes] Conrad: Liebig's Ansicht von der Bodenerschöpfung und ihre geschichtliche, statistische und nationalökonomische Begründung kritisch geprüft. Jena 1864 & Karl Arnd: Justus Liebig's Agrikulturchemie und seipenst der Bodenerschöpfung. Frankfurt a.M. 1864; Mayer: Das Düngerkapital und der Raubbau (脚注88); Etienne Laspeyres: Justus von Liebig's Theorie der Bodenerschöpfung, vom nationalökonomischen Standpunkt beleuchtet. Riga 1869.

[58] マルクスは当時、チューリングの著作をほかにも多く読んでいた。成立と来歴 S. 1047-1050を見よ。  
[59] Eugen] Dühring: Kritische Grundlegung der Volkswirtschaftslehre. Berlin 1866. S. 230.

[60] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGÄ<sup>2</sup> II/4.2. S. 838.

[61] 「あと数年でグリン資源が枯渇し、そうなれば、生命の諸条件の維持に配慮するよう人間に命ずる自然法則の存在を実証し、その法則の侵害がどのように報復するかを実証するのは、科学的であるいはこう言ってもよいが、理論的説明も必要としないであろう。諸民族は自己保存のために、均衡に達するまで悲惨な戦争のなかで絶え間なく相互に傷つけ合い、殲滅し合うことを余儀なくされるだろうし、一八一六年と一八一七年のような二年が続いたときには——どうかそんなことにはならないでほしいが——それを経験する人々は数十万人もの死者が路上に斃れているのを見るだろう。」(Liebig: Agriculturechemie. Einleitung. S. 125/126.)

[62] Eugen] Dühring: Liebig's Lehre von der Bodenerschöpfung. In: Ergänzungslätter zur Kennt-

- niß der Gegenwart. Hrsg. von [Hermann] [Julius] Meyer. Bd. 1. H. 8. Hildburghausen 1869. S. 499.
- [2] Eugen Dühring: Carey's Umwälzung der Volkswirtschaftslehre und Socialwissenschaft. München 1865. S. 67.
- [3] Dühring: Liebig's Lehre von der Bodenerschöpfung (農林学). S. 500.
- [4] Mayer: Das Düngerkapital und der Raubbau (農林学). S. 59.
- [5] Conrad: Liebig's Ansicht von der Bodenerschöpfung (農林学). トンクニシキヒキ書物館蔵  
 大分県立 1875/1876 (IISG, MEN, Sign. B 139. S. 26) 2498°
- [6] Karl Fraas: Die Ackerbaukrisen und ihre Heilmittel. Ein Beitrag zur Wirtschaftspolitik des Ackerbauschutzes. Leipzig 1866 (SPD-Bibliothek. Nr. 33717); ders.: Historisch-encyklopädischer Grundriß der Landwirtschaftslehre. Stuttgart 1848 (MEGA<sup>2</sup> IV/32. Nr. 435); ders.: Das Wurzelleben der Kulturpflanzen und die Ertragssteigerung. 2. Ausg. Berlin 1872 (MEGA<sup>2</sup> IV/32. Nr. 437).
- [7] Marx an Engels, 25. März 1868 (IISG, MEN, Sign. L 4527).
- [8] Fraas: Historisch-encyklopädischer Grundriß der Landwirtschaftslehre (農林学). S. 64.
- [9] Ebenda. S. 111.
- [10] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 410.
- [11] Marx: Das Kapital. Bd. 1. 2. Aufl. MEGA<sup>2</sup> II/6. S. 477.
- [12] Meeting of the General Council June 22, 1869 In: MEGA<sup>2</sup> I/21. S. 665.
- [13] 「議会の考へは、現代社会の経済的发展が生み出すものは、耕作地を社会の共同財産に転化」

鉱山や鉄道に関して述べられているのと類似した条件のもとで、土地を国家にかわって農業企業に貸すという社会的必要性である。」(The International Working Men's Association. Resolutions of the Congress of Geneva, 1866, and the Congress of Brussels, 1868. London [1869]. S. 12/13 (MEGA<sup>2</sup> I/21. S. 1955).)

[128] 一八六九年七月六日の中央評議会の議事録には以下のよう書いている。マルクスは「決議にもっと力強い形式を与えることに反対しているのではなかった」(Ebenda. S. 671)。彼は、中央評議會は決議に対して「責任を負わない」と力説した (Ebenda. S. 672)。

[129] Ebenda. S. 670/671. プルドン主義的立場に対するマルクスの批判には、「農業ノート」の「一八六五／一八六六年の大ノート」において広範囲にわたって抜粋された、分割地所有に対するルイ・ムニエの王党主義的な批判も余韻を残している。それによれば、フランス農業の生産性の低下や森林伐採や環境破壊の原因は、フランスにおける土地の断片化と囲い込みの欠如にあるという。すなわち、「土地所有の二つの形態がどちらも好ましくならぬ結果をもたらしたことを見てきた。小農民は名目上の所有者にすぎないのだが、自分ではいままなお事実上の所有者のつもりでいるので、なおさら危険なのである」(Ebenda. S. 672. ムニエについては、成立と来歴 S. 968-970 を見よ)。しかしマルクスが、イングランドのような既存の大土地所有を、農民企業あるいは労働者企業に賃貸することに反対していたということは、彼が現存する小農民の即時土地収用を擁護していたことを意味するものではない。これにつらてマルクスは、すでに「土地の国有化」(RGASPI, Sign. f. 1, op. 1, d. 2543) という編集上のタイトルで知られ、MEGA<sup>2</sup> I/23 で公刊される草稿において立ち返ったこと(ハルドリッパ、Hal Draper: Karl Marx's Theory of Revolution. Vol. 2. The Politics of Social Classes. New York 1978. S. 408-410 を見よ)。

[130] Meeting of the General Council July 6, 1869 (MEGA<sup>2</sup> I/21. S. 671).



- [4] Karl Marx: Das Kapital <Ökonomisches Manuskript 1868-1870>. Zweites Buch: Der Zirkulationsprozeß des Kapitals (Manuskript II). In: MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 203. マルクスはまた「一八七二年の『資本論』第二版において、新たな脚注で、スコットランド高地の肥沃な土地を利潤獲得のために耕作せず、狩猟のための原生林として利用することが認められたことにより、資本主義における農業の発展が妨げられたことを指摘した。」(Marx: Das Kapital. Bd. 1. 2. Aufl. MEGA<sup>2</sup> II/6. S. 658/659. Carl-Erich Vollgraf: Marx über die sukzessive Untergrabung des Stoffwechsels der Gesellschaft bei entfalteter kapitalistischer Massenproduktion. In: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung. N.F. 2014/15. Hamburg 2016. S. 106-132.)
- [5] Marx: Das Kapital <Ökonomisches Manuskript 1868-1870>. Zweites Buch. MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 188.
- [6] Ebenda. S. 187.
- [7] Marx: Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863-1865). Drittes Buch. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 709.
- [8] これはマルクスが次のように書いたときの彼の想定のものである。すなわち「両者〔訳注：大工業と工業的に経営される農業〕をはじめに区別するのが、前者がむしろ労働力を、それゆえ人間の自然力を荒廃させ破壊させ、後者がむしろ直接に土地の自然力を荒廃させ破壊させることであるとするれば、その後の進展において両者は互いに手を取り合う。このうちは、工業システムは農村でも労働者たちを衰弱させ、工業と商業のほうは農業に土地を疲弊させる諸手段を与えるからである。」(Ebenda. S. 753.)
- [9] Marx: Das Kapital <Ökonomisches Manuskript 1868-1870>. Zweites Buch. MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 214/215.
- [10] Karl Marx: Exzerpte aus John Yeats: The Natural History of the Raw Materials of Commerce. In: MEGA<sup>2</sup> IV/26. S. 3-44.

- [14] 抜粋は詳細な内容目録という性格を有している。マルクスはそのたびごとに、国名と年号を表題として書き留め、その下にキーワードと、ときには記事からの比較的長めの引用を、その後ろには報告書からのページ数を記している。このようにして、マルクスはほとんどすべての大陸の三五を超える国、地域および一つの自由都市（フランクフルト・アム・マイン）についての一〇〇の記事を記録している。彼は、これらの目録を「上記のための簡略化した索引」という題とともに、再び上位の内容目録にもとめてくる（S. 666-669）。成立と来歴 S. 1130 を見よ。
- [42] Marx: *Ökonomisches Manuskript* 1863-1865. MEGA<sup>2</sup> II/4.2. S. 333.
- [43] これ以外のテーマとしては、とりわけ、金融システムと農業における生産諸関係との関係や、そのほかに通貨、銀行と信用会社、国家債務（ギリシャ、スペイン、オーストリア、トルコ）、為替相場がある。最後に、マルクスは、一八五七年と一八六六年の経済恐慌の経過と、ナッサウ、ジュネーブ、フランクフルト・アム・マイン、オランダ、スペイン、ブラジル、中国、インドでのその展開を扱っている（成立と来歴 S. 1129/1130 を見よ）。彼は他の抜粋ノートでこの二つの恐慌について詳しく研究した（MEGA<sup>2</sup> IV/14, IV/19 を見よ）。
- [44] Marx: *Das Kapital* 〈*Ökonomisches Manuskript* 1868-1870〉. Zweites Buch. MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 178.
- [45] Karl Marx: *Thematisch ausgewählte Quellenauszüge für Buch 2 des „Kapitals“*. In: MEGA<sup>2</sup> II/4.3. S. 44-56.
- [46] Marx: *Das Kapital* 〈*Ökonomisches Manuskript* 1868-1870〉. Zweites Buch. MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 101-105.
- [47] Ebenda. S. 114.
- [48] Ebenda. S. 112-114.
- [49] Ebenda. S. 66.

- [50] Ebenda. S. 71.
- [51] Ebenda. S. 84.
- [52] Ebenda. S. 211.
- [53] エンゲルスはマルクスの死後、二人は自然科学を「ただ断片的に、ときれときれに、散発的にしか追求」できなかったと述べた(Friedrich Engels: Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. Vorwort zu 3. Aufl. In: MEGA<sup>2</sup>/27. S. 494)。
- [54] マルクスの晩年における自然科学に関する歩みには、フルーベクが、彼の『農業総論』の「序文」で述べたことが対応しているように思われる。すなわち、「こうした精確な知見は「……」、物質的な自然全体が植物の生産や動物の生産と相互作用するかぎり、物質的な自然全体にまで及び。知見の対象が多様であることと人間の理解に制約があることが要請するのは、自然をさまざまに観点から理解し、研究し、同質の知見を生み出し、それをわれわれの思考法則に照応するような、あるいは体系的な関連のなかに導くこと、あるいは個別の自然科学を分業によって明るみに出すことである。このようにして、地理学、天文学、鉱物学、地質学 (Geognosie, Geologie)、植物学、動物学、物理学 (Naturlehre oder Physik)、化学、解剖学、生理学、病理学、治療学が生まれ、それらの知見が連関のなかで把握されることで、物質的な自然に関する人間の知識をなしてこそ。」([Franz] Xaver] Hlubek: Die Landwirtschaftslehre in ihrem ganzen Umfange ... 2., verb. Aufl. Bd. 1. Wien 1851. S. VIII.)
- [55] これらの抜粋は、マルクスにおけるエコロジー、エスニシティ、ジェンダー関係の問題を研究するうえで示唆に富むことが明らかになった。以下のものを見よ。Kevin B. Anderson: Marx at the Margins. On Nationalism, Ethnicity, and non-Western Societies. Chicago 2010; Heather A. Brown: Marx on Gender and the Family. A Critical Study. Boston, Leiden 2012; Vollgraf:

Marx über die sukzessive Untergrabung des Stoffwechsels ... (脚註 17); Kohei Saito: Natur gegen Kapital. Marx' Ökologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus. Frankfurt a.M. 2016.

[19] 「In Irland (トイレルランド)」と云ふ譯語は MEGA<sup>2</sup> II/11 で挿入された。「In Irland (国名)」と云ふ解説もこの文脈に属する。

[20] Marx: Das Kapital〈Ökonomisches Manuskript 1868-1870〉. Zweites Buch. MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 75. Ebenda. S. 68.

[21] 佐々木啓祐。J. K. Samal: Economic History of Orissa, 1866-1912. New Delhi 1990; H. K. Mishra: Famines and Poverty in India. New Delhi 1991; Bidyut Mohanty: Orissa Famine of 1866: Demographic and Economic Consequences. In: Economic and Political Weekly. Vol. 28. 1993. Nr. 1/2. S. 55-57 und 59-66; Upanmanyu Pablo Mukherjee: Natural Disasters and Victorian Empire. Famines, Fevers and Literary Cultures of South Asia. Basingstoke 2013.

[22] Marx an Philip Stephen King, 14. August 1867. (MEGAdigital.)

[23] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 419. — 本源的蓄積の章に於てマルクスは次のように書いている。「一八六六年には、オリッサ一州だけで一〇〇万人以上のヒンズー人が餓死した。[...] それにもかかわらず、この餓死しかかっている人々に売られる食料の価格によってインドの国庫を富ませることに成功した」(Ebenda. S. 603)。

[24] マルクスは、「東インド灌漑・運河株式会社」が導入した、「オリッサの農業における灌漑の問題を」一八六九年に『マナー・マーケット・レビュー』からの抜粋 (MEGA<sup>2</sup> IV/19) に於て追っている。

[25] Marx: Das Kapital〈Ökonomisches Manuskript 1868-1870〉. Zweites Buch. MEGA<sup>2</sup> II/11. S. 61.

[26] Ebenda. S. 535.

- [9] Karl Marx: The British Rule in India. In: MEGA<sup>2</sup> I/12. S. 172.
- [10] Ebenda. S. 173.
- [11] Marx: Das Kapital. Bd. 1. MEGA<sup>2</sup> II/5. S. 12.
- [12] 「だが、旧ローマ・ローナの如く、この運動を運動として見るのではなく、ただ感嘆の表現の運動を、環境によつて地域的に各々が変わり、あるところではそれがより狭く範囲をこぼれ、あつたり、あるところではあつたり田舎になつた特徴を示したり、またあるところでは逆した順序をたどつたところを見なすのである。」(Karl Marx: Le capital. Trad. de M. J. Roy, entièrement rev. par l'auteur. Paris 1872-1875. In: MEGA<sup>2</sup> II/7. S. 634.)
- [13] Vera Zasulic an Marx, 16. Februar 1881 (RGASPI, Sign. f. 1, op. 5, d. 4255; veröffentlicht in: Marx-Engels-Archiv. Bd. 1. Hrsg. von David Rjazanov. Frankfurt a.M. [1926]. S. 316/317).
- [14] Karl Marx: Lettre à Vera Ivanovna Zassoulich. Troisième projet. In: MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 235/236.
- [15] Karl Marx: Lettre à Vera Ivanovna Zassoulich. Premier projet. In: MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 229.
- [16] Marx: Lettre à Vera Ivanovna Zassoulich. Troisième projet. MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 235. [註: s. 236 の註記を参照せよ]
- [17] 「ブルノスガ「原古紙」よつて言葉に驚愕を必要ならざるが如くだ。(Marx: Lettre à Vera Ivanovna Zassoulich. Premier projet. (MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 220)).
- [18] Marx an Engels, 25. März 1868 (IISG, MEN, Sign. L 4527).
- [19] Fraas: Die Ackerbaukrisen und ihre Heilmittel (興社社). S. 209.
- [20] Ebenda. S. 210.
- [21] Marx an Engels, 25. März 1868 (IISG, MEN, Sign. L 4527).
- [22] 一八七六年にブルノスは以下の著作から新たな抜粋をとりまじり三冊の抜粋ノートを作成した (IISG,

MEN, Sign. B 133, B 134, B 135)°。ちなりが、„Einleitung zur Geschichte der Mark, Hof, Dorf- und Stadt-Verfassung“ の 52 „Geschichte der Markenverfassung in Deutschland“ (Erlangen 1856)° 四卷からなる „Geschichte der Fronhöfe, der Bauernhöfe und der Hofverfassung in Deutschland“ (Erlangen 1862/1863) の 4 の 2 卷からなる „Geschichte der Dorfverfassung in Deutschland“ (Erlangen 1865/1866) である°。一八八二年、彼は再び『序説』と『ムンッヒッヒルンク体制の歴史』からの抜粋を作成した (HSQ, MEN, Sign. J 22 und J 44)°。

[79] Karl Marx, Friedrich Engels: Vorrede zur zweiten russischen Ausgabe des „Manifestes der Kommunistischen Partei“. In: MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 296.

[80] 「歴史的見地からみて、きわめて有利な事情は、〔……〕「この農耕共同体」が、資本主義制度のまだ無傷であった時代をとりこして生き残ったということ、それどころか、現在、資本主義制度が西ヨーロッパにおいても合衆国においても、労働者大衆とも科学、またこの制度の生み出す生産諸力そのものとも、闘争状態にあるのを、一言で言えば、それが危機のうちにあるのを「農耕共同体」が目のとたりこして生き残らないうちは、」(Marx: Lettre à Vera Ivanovna Zassoulitch. Premier projet. In: MEGA<sup>2</sup> I/25. S. 225.)

[81] Editionsrichtlinien der Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA). Berlin 1993 を用よ°

はじま・ゆうき 駒澤大学経済学部経済学科講師

1983年生まれ。専門はマルクスとエコロジー、地代論。共著に『マルクスとエコロジー——資本主義批判としての物質代謝論』（堀之内出版、2016年）。論文に「『資本論』第3部主要草稿における差額地代第二形態論の再検討」（『唯物論』92号、2018年）、「マルクスの地代論草稿とその射程」（『季刊経済理論』第54巻第2号、2017年）など。

# 恐慌論と利潤率の低下

恐慌の真っ只中にあるとき、マルクス主義者はしばしば恐慌の原因を説明するために利潤率の傾向的低下論に訴えてきた (e.g. Carchedi 2011; Kliman 2012; Shaikh 2010; Moseley 1990)。例えばマイケル・ロバーツ (二〇一四) は最近の研究発表の中で、現在の長期不況の原因をこの傾向に帰している。この傾向ないし法則は以下のように作用する。

1. 競争は、資本主義的生産者が市場シェア維持のために労働節約技術に投資することを強いる。
2. 充用された生産手段の価値 ( $c$ 、不変資本) は、投下された労働力の価値 ( $v$ 、可変資本) を上回る傾向にある。
3. 投下された可変資本に対する不変資本の比率 (生産性ないし資本の価値構成、 $c/v$ ) が上昇する。もしも搾取率 ( $s/v$ 、投下された可変資本に対する生産された剰余価値の比率) が変わらなければ、利潤率 ( $s/(c+v)$ ) は低下するだろう。

David Harvey

ニューヨーク市立大学特別教授

小谷英生 訳

群馬大学准教授

4. とはいえ、対抗的傾向もある。労働力搾取率は上昇しうる。機械装置、原材料、中間生産物を供給するセクターでの生産力上昇に伴って、不変資本は安価になりうるからである。だが、長期的な利潤率の減少傾向を相殺するには、こうした対抗的傾向では不十分であると信じられている。「それゆえ」とロバーツは結論づける、「収益性は低下する傾向にあり、資本主義は恐慌に、すなわち短期的な成長によってのみ中断されるような、ひとつの運動へと向かうのである」。

利潤率の傾向的低下の法則は、資本の収益性が時間とともに辿るコースについてのもっともらしい理論的シナリオを描き出している。ロバーツは利潤率低下に関するグラフと統計データを列挙し、法則の妥当性の証拠として提示することによって、彼の主張を強化している。だが、そうしたデータが実際に彼の議論を支持するかどうかは、次のことにかかっている。(一) 理論に対するデータの信頼性と適切性。(二) ロバーツが説明したメカニズムとは異なった、しかし利潤低下をもたらしうるようなメカニズムの有無。果たして、彼の議論のどこが誤っているのだろうか。

マルクスは古典派経済学批判というやり方によって、自身の理論的仕事に着手している。『経済学批判要綱』においてマルクスが批判し、置換しようと試みたのは、なによりもまずリカードウ説における利潤低下の法則であった。リカードウは利潤低下を土地の限界生産性低下に関するマルサスのテーゼに帰している。「このテーゼによれば」土地の限界生産性低下が意味するのは、おそらくは賃金の上昇に結びつく食糧価格の上昇である。食糧価格の上昇は地主階級を強化し、特にもっとも肥沃な土地で地代の上昇を引き起こす。それゆえ、生産資本の利潤は賃金上昇と地代上昇に挟まれて減少するだろう。究極的にはこのこ

とは、産業資本主義の終焉をもたらすだろう。

明らかにマルクスはこの考えを支持していたが、社会変革を自然要因（自然の希少性やマルサスの限界のような自然要因）に帰することを忌避した。だから彼は、資本の内的矛盾に由来する利潤低下の原因を探究したのである。これこそマルクスの利潤率低下理論が行っていることである。利潤率の低下を引き起こすのは、飽くなき競争を通じた相対的剰余価値の追求から生じる、絶えず上昇する資本の生産力に他ならないのである。『経済学批判要綱』の中では、生産力の絶えざる上昇が資本主義の究極的な「墓掘人」であることが判明するかもしれない、とさえ仄めかされている（Marx 1973: 750-754）。マルクスは特定の想定の下で利潤率低下の法則を演繹している。私がおのところで示したように、『資本論』の大部分において、マルクスの理論構築は、彼が名付けた合法的な一般性の範囲に限定されている。あらゆる普遍的諸条件（予測不能な自然との関係）、諸々の特殊性（分配制度、剰余価値取得をめぐる階級闘争およびその他の闘争、そして競争状態）、諸々の個別性（消費者の流行の移り行きや国家政策の諸効果のような）は、マルクスの論証から除外されている。マルクスは、彼が考える「純粹」状態においていかに資本が機能するかを吟味しているのである（Harvey 2012）。彼の最高傑作『資本論』の「こと」から多くのことが除外されているという事実は、自然との関係、分配および市場の特殊性、人為的選択の個別性などは重要ではない、あるいは、いかなる社会システムでも何か取るに足りない特徴でしかないとマルクスが考えていた証拠だと受け取られてはならない。より歴史的・政治的な著作においては正反対のことが示唆されているからである。利潤率低下理論を含む理論的展望は『資本論』において探究を進めるためにマルクスが選んだものでしかなく、より厳密に限定されているわけである。

『資本論』第一巻において「資本〔主義的〕蓄積の一般的法則」を構築する中で、マルクスは更なる具体的な

想定を行っている。第一に、資本家は何の問題もなく自らの財を市場で価値通りに販売し、回収した剰余価値を生産へと再循環させる。全ての商品は価値通りに売買される（ただし、労働力を例外として。労働力の価値は蓄積の活発さに応じて上下するからである）。市場を見い出すのに何の困難さもないし、有効需要の欠如も存在しないわけである。第二に、剰余価値が「さまざまの部分……例えば利潤、利子、商業利得、地代等々に分裂する」（Marx 1976: 709-710）仕方については、考察から除外されている。第三に、マルクスは次のように宣言している。「研究の対象をその純粋性において攪乱的な付随事に煩わされることなくとらえるためには、われわれはここでは全商業世界を一国とみなさなければならぬのであり、また、資本主義的生産がすでにどこでも確立されていてすべての産業部門を支配しているということを前提しなければならぬ」（Marx 1976: 727）。

こうした想定は全て、『資本論』第三巻における利潤率低下の導出に引き継がれる。第一巻・第三巻においてマルクスは、高度に単純化された資本蓄積のダイナミクスに関するモデルを構築している。このモデルが導出されるのは、完全競争と困難なき剰余価値の実現または分配によって特徴づけられた閉鎖システムにおいて作動する絶対的・相対的剰余価値の理論からである。「絶対的剰余価値と相対的剰余価値という」二つのモデルは資本のダイナミクスの重要な特徴を明らかにする一方で、資本が全体として「すなわち「純粋」でない状態として」見られたときには、こうしたダイナミクスの絶対的真理に近似した何ものかとみなすことはできない。どちらのモデルもその共通の想定が許すかぎりでのみ正しい。生産と分配の矛盾、独占と競争の矛盾、その他諸々と同じように、「価値の」生産と実現の矛盾的統一は考慮されていない。このことは、導出された法則の適用可能性を厳しく制限してしまう。

問題を以上のように抽象的に扱った点で、私はマルクスを批判しているのではない。抽象的なものを定式化

し、経済システムのモデル化と現在では呼ばれる仕事に従事することによって、マルクスは資本蓄積の複雑さにとどのように取り組むべきかを私たちに教えてくれる。この点で彼は素晴らしいパイオニアなのである。マルクスは『資本論』第一巻では自身の想定を綿密に説明しているが、(第三巻の)利潤率低下理論の場合にはそうしていない。このことは、私たちに伝わっている諸資料が準備段階のものである点を踏まえるならば理解可能である。ところが利潤低下法則の支持者たちの中には、マルクスが行った諸限定に対する異なった、そして私見では不当な読み方をしてきた者たちがいる。彼らに言わせれば、マルクスが利潤低下法則を述べる際に分配の諸問題(とりわけ金融、信用、利生子み資本の役割)を無視しえた以上、金融化と二〇〇七—〇八年の暴落の間には何の関係もないことをマルクスの議論は示していることになる。こうした主張は実際の出来事の経過を見れば馬鹿げたものであるように思われる。こうした主張はまた、恐慌を生み出す際に銀行家と金融業者が果たした役割を無視し、彼らを免責してしまうのである。

マルクスの想定が持つ厳格な性格に鑑みれば、私たちは彼の理論的帰結をあまりにも遠くまで推し進めることに注意深くするべきである。『資本論』第一巻で提示されますますます貧困化する産業予備軍の生産と、第三巻で提示された利潤率の傾向的低下は、状況依存的な命題である。どちらの傾向も、もっぱら技術変革のダイナミクスによって進展する。マルクスのオリジナル草稿を読めば、徐々に彼が恐慌を資本主義の差し迫った崩壊の兆候ではなく、資本主義の再編成と更新の段階とみなすようになっていったことが示唆されている。それゆえマルクスは、「恐慌は、つねに、ただ既存の諸矛盾の一時的な暴力的な解決でしかなく、攪乱された均衡を一瞬間回復する暴力的な爆発でしかない」(Marx 1981: 357)と述べているのだ。上昇する労働の生産力から恐慌が生まれる(という考え)はマルクスの頭から消え去ることはなかったが、そうした恐慌は周期的な「資本

の「プレトラ」や、過剰蓄積へと向かう絶えざる傾向のような他の諸矛盾に補完されたり関連づけられたりすることは可能であるし、またされるべきなのである (Marx 1981: Chapter 15; Harvey 1982: 176-203)。

マルクスのオリジナル草稿の編集を担うドイツ人研究者たちの一人、ミヒヤエル・ハインリッヒ (2009, 2013) は、マルクスは利潤低下法則に対して、エンゲルスが編集した版に認められるよりも全く熱心ではなかったと主張し、論争を巻き起こした (Thomas and Reuten 2014 も見よ)。利潤低下法則の支持者たちの一部は、控え目に見ても猛烈と言える抗議を行っている。私はドイツ語を読まないのですが、この問題の解決は研究者たちに任せる。しかしハインリッヒの説明は、利潤低下法則の一般的妥当性について私が長年抱えてきた懐疑と大部分で一致しているように思われるのだ。周知のように、マルクスの用語法は彼の発見を法則と呼ぶか、傾向的法則と呼ぶか、あるいは場合によっては単に傾向性にすぎないと言うにとどめるかの間で揺れ動いている。彼は『フランスにおける内乱』のような政治的著作においては、利潤率の傾向的低下についてまったく言及していないのだ。『資本論』第三巻における一八四八年と五七年の二つの恐慌について考察した箇所さえ、それらの恐慌は「商業と金融の恐慌」と描写され、銀行業、信用、金融の諸章において分析されている。この分析の中では利潤率低下についてごくわずかに言及されているだけである (Marx 1981: Chapters 30-34)。私たちはさらに、マルクスが一八六八年以降——明らかに不完全でおそらくは重要であるにもかかわらず——利潤率低下理論に戻らなかったことも知っている (Mosley 2014)。その理由を明言することはできないものの、かつて『経済学批判要綱』の中で「経済学の最重要法則」と呼んでいたものを、マルクスがその研究生生活の最後の十数年間で無視することに決めたというのは奇妙であるように思われる (もっとも、「経済学の最重要法則」と呼んだときにマルクスがリカードウの経済学を話題にしているのか、それともマルクス自身のそれを話題にしているのかははっきりとは分から

ないのだが)。

「一八七〇年代の終わりに」とハインリッヒ (2013) は述べる、「マルクスは新しいタイプの恐慌に直面した。それは何年も続く不況であり、マルクスがそれまで知っていた急激で局面的な上下運動からはっきりと区別されるものであった」。マルクスは「瞬間的な」崩壊としての恐慌という考えを、もはや適切なものとは考えていなかったに違いない。

こうした文脈においては、マルクスの注意は国立銀行が新たに果たす重要な国際的役割に向けられているのであるが、その役割とは恐慌の過程に重大な影響を与えているというものだ。マルクスによってまとめられた考察が明らかにしているのは、恐慌論の体系的な取り扱いは、(エンゲルス版『資本論』第三巻が示唆するように) 利潤率の傾向的低下の法則に直接基づくことはできず、むしろ利子生み資本と信用の登場後に初めて可能となるということである。(Henrich 2013)

このことは、なぜ一八四八年と五七年の恐慌が「商業と金融の恐慌」と呼ばれ、銀行業と金融の諸章で検証されたのかを説明してくれるだろう。しかしながら、もしも「国立銀行がそのような重要な役割を演じたならば」、ハインリッヒは続ける、「国家の分析が除外されているにもかかわらず、信用システムがカテゴリーとして提示されうるといふのは非常に疑わしい。同様のことは世界市場にも当てはまる」。かつては利潤低下法則の導出は形式的想定の下に限定されていたが、マルクスは、おそらくは実際に生じている蓄積のダイナミクスに関連づけるために、この想定を放棄することが必要だと明確に理解していた。マルクスはまた普遍性という

レヴェルを脇におき、分配（とりわけ信用システム）と市場競争の状態という特殊性を自身の理論形成に組み入れた（Harvey 2012）。

ハインリッヒ（2013; Thomas and Reuten 2014も参照）は次のように結論づけている。「恐慌理論の体系的取り扱いには……「利潤率の傾向的低下の法則」から直接的に生じえず、利子生み資本と信用というカテゴリーが展開された後にはじめて可能となる」。

一見するとマルクスの議論は両義的で揺らいでいるようにみえるが、それをどの程度真剣に受け取るべきかは、彼の厳格な想定をどのように理解するかだけでなく、彼が特定した対抗的諸傾向が持っている強度と普遍性にも依存している。法則の擁護者は概して対抗的諸傾向を軽視している。マルクスは『資本論』の中でそうした諸傾向のうちの六つを挙げているが、「そのうち二つ（外国貿易と株式資本の増大）はマルクスの最初の想定（閉鎖的な経済と、実際の分配を考慮外に置いた剰余価値の概念）とつまりく適合しない」（Harvey 1982: Chapter 6; Marx 1981: Chapter 14）。ところが現実の恐慌では、『資本論』第三巻で一八四八年と五七年の恐慌に対してマルクスが述べているように、金融と株式資本の問題を度外視できる余地はない。金融と株式資本は、恐慌の根本的原因とまではいかなくとも、その現象形態においてはかなり重要な役割を果たしたからである。同様に、貨幣と金融の諸章の中で提示された証拠に基づけば、外国貿易の不均衡が与える不確定的な影響（こうした影響に言及される場合には、「地金流出」と呼ばれる）を無視することもできない。マルクスはもちろん、ロバートの言う二つの対抗的影響を強調しているが、それに加えて「賃金を労働力の価値よりも低く抑えること、産業予備軍が増加すること」を挙げている。産業予備軍の増加は、労働力を機械によって置換するインセンティヴを減少させることによって、特定のセクターをテクノロジーの進歩による損害から保護する。イギリスで発明されたテクノロジー

は、労働力の過剰のために当地では充用されていなかった、と『資本論』第一巻の中でマルクスは指摘している。むしろ労働力が不足しているアメリカにおいて用いられたのである、と (Marx 1976: 516-517 を見よ)。

『経済学批判要綱』では、利潤率を安定させるその他色々の要因について列挙されている。もしも利潤率を回復させられるとすれば、恐慌によってなされうるひとつの方法は既存の不変資本（とりわけ固定資本）の大幅な減価をもたらすことである。しかしマルクスはまた次の点にも言及している。既存資本の一部の恒常的な減価（これはおそらく、技術変革の結果として固定資本設備の「社会的」磨滅が早々と進み、減価することを意味している）。大部分の資本が直接的生産には役立たない固定資本へと転化すること（例えば公共事業と都市化への投資は全て、企業の利潤を全く顧みず、利子のみを自当てに流通しうるだろう）。そして非生産的な浪費（軍事費のようなもの。マルクスは軍事費を、商品を海に投げ捨てるのと同じだと考えていた）。重要なことであるが、マルクスはさらに、利潤率の低下は「資本に比例してより多くの直接的労働が必要な生産諸部門、あるいは、労働の生産力すなわち資本の生産力がまだ発展していない新たな生産諸部門が創造されることによって、妨げら」れうると記している。最後に、独占は利潤率低下に対する緩衝材だと論じられている。その理由は、技術革新に向かう競争圧力を和らげるからである (Marx 1973: 750-751)。

これは、私がかつて論じたように、考慮されるべき「諸要因のやや寄せ集め的な列挙」である (Harvey 1982: 178)。そのような要因の内のいくつかは、（独占や新しい生産ラインの開始といったように）圧倒的に重要でありうる。その他の要因、土地への固定資本投下や、より一般的には都市化といった要因は、私がかつて別のところで示そうとしたように、恐慌の成立や解決にとって決定的な役割を果たしている（二〇〇七年とその直後に生じた出来事においてもっとも明らかであったように）。

一九六〇年代終盤にかけてのフランス共産党における国家独占資本主義の理論家たち (Boccarda 1974) は、利子と引き換えに共同的な固定資本を流通させることを、利潤率低下を埋め合わせるための一方策と考えていた (共同的な不变資本はいわば割り引き価格で流通しうる)。「家屋を建て、物で満たす」ことで恐慌から脱出したアメリカの歴史はよく知られている (それは一九六〇年代には決定的な役割を果たした)。こうした歴史は現在、住宅建設だけでも近年のGDP成長の四分の一を占めていると考えられている中国で繰り返されている。逆に言えば、不動産市場の暴落はより一般的な恐慌のよく知られた引き金である。二〇〇七―〇八年がもっとも明白な近年の事例であるが、一九二八年のアメリカは重大な、しかし見落とされてきた歴史的事例である (Harvey 2013b: Chapter 2)。

〔利潤率低下への〕様々な対抗的影響をさらに複数挙げることは難しくない。例えばエンゲルスは、『資本論』第二巻で考察された主題である) 生産と流通の双方における回転時間の増速・加速が利潤率に作用することに気づいていた。エンゲルスは (非常に正しいように思われるのだが) 『資本論』第三巻の中にこうしたトピックに関する章を挿入している。ところが彼は、利潤率低下への影響に言及することはしなかった (Marx 1981: Chapter 4)。この点については、一般に利潤率低下法則の支持者たちから無視されてきた。マルクスはいえ、漠然としてはいるものの他の可能性を示唆している。もしも何か特定の産業において生産力が二倍に上がったならば、生産された商品の単位価格は半分にになり、全体の生産量は二倍になりうる (十分な有効需要に支えられた商品に対する要求や欲求あるいは欲望が存在するならば)。その結果、労働の生産力が二倍になっているが、産業における雇用 (と剰余価値生産) は変わらず維持されるかもしれない。満たされていない要求、欲求あるいは欲望に支えられて有効需要が増加すると、雇用と剰余価値生産が増加することさえありうる。これはT型フォード・モデルの組み

立てライン式生産という歴史的事例において、実際に生じたことである。近年私たちはコンピューターと携帯電話において似たような現象を目撃している。こうした事例全てにおいて、消費者世界が創出されたわけである。この消費者世界では、贅沢品が急速に必需品となり、増加する（信用ベースの？）有効需要が商品市場を拡張していった。生産力の上昇と雇用・剰余価値生産の増加は、特定の状況においては手を取り合って心地よく進む。結局のところ利潤はまったくもって簡単に上下しうるものだ、と結論づけることは難くないのである。ここでエンゲルスの介入は決定的である。『資本論』第三巻において致命的な言葉を付け加えたのは、まさにエンゲルスだったからである。すなわち、「しかし実践においては、すでに見てきたように、利潤率は長期的に低下するだろう」（Marx 1981: 337）と。

第三巻の続く章「この法則の内的な諸矛盾の展開」では、より興味深い事態が生じている。このミスリーディングな章タイトルはエンゲルスによって付されている。この章は実際には、法則を導出する際に用いられた諸想定を取り除いたときに何が生じるのかを論じているのであるが、章タイトルが示唆しているのは、にもかかわらず利潤率低下の法則ないし傾向は損なわれることなく、しかし内的矛盾を抱えている、といったものである。結果として、多様な諸矛盾を同時並行的に並べ立てて、恐慌の成立過程を果てしなく描写した章となってしまうている。用語法も変化しており、恐慌がここでは資本主義の終焉を告げる前兆という契機としてではなく、均衡を回復するのに役立つ暴力的爆発であると確言されている。市場における〔価値の〕実現をめぐる諸問題、世界市場における生産、非資本主義社会の形成との諸関係、資本の集中と分散の度合い、信用システム内部に存在する通貨不安と過剰投機、減価と問題含みな固定資本流通、こういったこと全ては、資本の過剰蓄積やいわゆる資本の「プレトラ」の役割、そして「慈悲深いやり方」で全人口の要求を満たすことが慢性的に不可能

性であるといった概念に即して導入されている。既存資本からの「資本剥奪」という形態でなされる新規の本源的蓄積期間までも引き合いに出されている。こうした全てが恐慌成立のストーリーの一部となるのである。マルクスは、エンゲルス版によると明確できっぱりとした答えを持っているように思われる個所で、多様な問いを提示している。「問題は」と草稿に深く通じた研究者のひとりであるヘルト・ロイテンは言う(2009: 229)、「エンゲルスが自身の編集作業の中でマルクスの心配事の大部分を消し去り、あたかも『資本論』第三巻がたんなる研究草稿ではなくほぼ完成原稿であるかのごとく仕立て上げたことである」。私は、まさにこうした(『資本論』第三巻に見られる)交錯する力線や多様な諸矛盾の渦の中から、資本主義の下でいかに恐慌が展開するのか、いかにして恐慌への傾向は、決して消え去ることなく転移し続けるのかについての感覚を長年にわたり鍛え上げてきた (Harvey 2010)。

してみれば、利潤率低下をもたらす諸矛盾やメカニズムのうちには、他にどのようなものがあったのか。『資本論』第三巻では、例えばマルクスは次のように述べている (1981: 615)。「すべての現実の恐慌の究極の原因は、やはり、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限なのであって、この衝動は、まるでただ社会の絶対的消費能力だけが生産力の限界をなしているかのように生産力を発展させようとするのである」。第三巻ではまた、次のようにある。

資本主義的生産様式における矛盾。労働者は商品の買い手として市場にとって重要である。しかし、彼らの商品——労働力——の売り手としては、資本主義社会は、その価格を最低限に制限する傾向がある。もう一つの矛盾。資本主義的生産がそのすべての潜勢力を發揮する時代は、きまって過剰生産の時代となっ

て現われる。なぜならば、生産の潜勢力は、それによってより多くの価値が単に生産されうるだけでなく実現もされうるほどには、けっして充用されることができないからである。しかし、商品の販売、商品資本の実現、したがってまた剰余価値の実現は、社会一般の消費欲望によって限界を画されているのではなく、その大多数の成員がつねに貧乏でありまたつねに貧乏でなければならぬような社会の消費欲望によって限界を画されているのである。(Marx 1978: 391)

このことは、『資本論』第三巻の重要な第一五章の中で、「価値」実現能力の制限として現れる。この制限は「分配の敵対的状况」のせいであり、「この状況は社会の大多数の人々による消費を最低限度まで減少させる」(Marx 1981: 352) のである。

ほとんどの場合これまでの研究は、利潤率低下理論についてのマルクスの労作を扱うのと同様の真剣さで、以上のような記述を扱ってこなかった。その理由はおそらく、利潤率低下に抵抗するような可能性の探求によって、マルクスが問題を混乱させてしまったからである。資本主義は「支払う消費でない消費は知らない」のだから、「恐慌は支払能力ある消費または支払能力ある消費者の不足から生ずる、と言うことは、まったくの同義反復」である。こう述べた後でマルクスは次のように付け加えている。「まさに、労賃が一般的に上がって、労働者階級が年間生産物中の消費費用部分のより大きな分けまえを現実を受け取るという時期こそは、いつでも恐慌を準備するのだ」(Marx 1978: 486-7) と。恐慌はそれゆえ、賃金が抑制され需要が不十分となる時期はもちろん、労働者階級の賃金が上昇し、そして／あるいは期待が上昇する時期においても生じることになる。資本主義的蓄積の一般法則について述べる際、マルクスは蓄積が活発に行われる局面での賃金増大がいかに利潤を

減じさせ、結果として蓄積を鈍化させるのかを説明している (Glyn and Sutcliffe 1972)。次のように結論づけることができるだろう。恐慌はまったく別の方向からやって来ることがありうる。もしも賃金が高くなりすぎたならば、利潤の割合が減少するため、蓄積は危機に瀕する。ところが、もしも賃金が低すぎたならば、有効需要の欠如が問題を引き起こす。したがって恐慌は、複合的で高度に局所的でさえあるような諸条件に基づいている。利潤低下の目的論は、変動的な状況依存性に道を譲るわけである。

結論的に言えば、マルクスの利潤率低下理論はそれ自体、決定論的命題ではなく状況依存的な命題として扱われなければならない。すなわち利潤率低下理論は事実、もしも利潤率の低下が存在するならば、利潤率低下をもたらしうるであろう多くの道筋のうちの一つが存在すると主張している(「にすぎない」)のである。だが、作用しているのが「利潤率低下」というこの特定のメカニズムなのかどうかは、現在するダイナミクスを注意深く分析してみなければ分からない。私見では、このメカニズムによって恐慌が生じることは、ひじょうに稀であるように見えるのだが。

このことは、資本主義の歴史の中で技術変革がもたらした不安定化と、しばしば破壊的な作用に関するマルクスのより一般的な指摘と決して矛盾しない。こうした作用はしばしば恐慌の形成に関与してきたが、それはまったく異なる理由からである。例えば、固定資本の形成と使用の場合には、加速的な技術変革は建造環境や物理インフラへの巨額投資を含む既存の固定資本の急激な減価のきっかけとなっている。マルクスの次のような考察は、真剣に受け取られるべきである。すなわち、「このような、連続的な、いくつもの回転を含んでいて多年にわたる循環に、資本はその固定的成分によって縛りつけられているのであるが、このような循環によって、周期的な恐慌の一つの物質的な基礎が生ずる」(Marx 1978: 264)。既存の固定資本の減価が利潤率の低下に

抵抗する影響を与えるような役目を演ずるとしたならば、この考察は提示されたいくつかの議論と類似したものである。しかしながら、興味深いことに、周期的恐慌のこのような物質的基礎に関するマルクスの説明にあっては、利潤率低下と比較して、まったくといってよいほど叙述されていないのである。

急激な技術革新は使い捨て可能な失業労働者予備軍を創造する結果に終わるが、同様に有効需要を消失させるものとして資本循環にフィードバックしうる。二〇〇七—〇八年の恐慌を創始したあの急落は、一九八〇年頃以後に世界中の伝統的工業生産地域を襲った脱工業化と減価という長期的な出来事とはまったく異なっているように見える。ルール川沿い、アメリカ中西部、イギリスの工業地域、果てはムンバイの工場でさえ閉鎖に追い込まれた。それは部分的には、新しいグローバル化を可能にした流通とコミュニケーション技術革命の結果であった。なるほど、デトロイト、エッセン、シェフィールド、ムンバイ、中国北部の工業都市のような地域を襲ったのは局所的な恐慌であり、一般的恐慌ではなかった。このように主張する人々がいるのももつともである。しかしながら、万人が至るところで一斉に巻き込まれてしまう真の世界恐慌というものは、私たちが「資本主義世界」として大雑把に言及するようなものの中にさえ、今までの存在したことはなかったことが明らかにになったのである（「資本主義世界」とはすなわち、資本取引ネットワークの外部世界を部分として含んでいない世界のことである）。二〇〇七—〇八年の出来事によってほとんど打撃を受けていない地域も実際にはたくさんあった（例えばラテン・アメリカの大部分）。一方で、一九八〇年から二〇〇〇年の間に製造業の伝統的中心地を襲った脱工業化は長期的で、徐々に燃え広がり、かつ悲惨なものであったが、資本主義世界全体で感じ取られた。したがって私たちはおそらく、一九二九年、一九七三年、二〇〇七—〇八年に起きた短期的な急落と、マルクスが一八七三年以後に遭遇し、一九八〇年代を通じて資本主義の表情を一変させた長期的な調整とを区別すべ

きであろう。

してみれば、マルクス経済学者が主張するような、時間とともに利潤率が低下するという一般的傾向など存在するのだろうか。たとえ存在したとしても、そうした利潤率低下はいかにして「二〇〇七―〇八年の」恐慌を説明するのだろうか。この恐慌は様々な時間と場所において様々な強度を伴って、あらゆる種類のセクターを様々な仕方方で汚染し、グローバル金融システムの中を伝染していくことによって世界中に広まっていった。しかしそれ以前には、少なくとも表面上は（スペイン、アイルランド、ハンガリーその他様々な国の各所と共に）カリフォルニア、アリゾナ、ネヴァダ、フロリダそしてジョージアの住宅市場で始まった、単なる商業・金融恐慌だったのである。

ロバーツとその他の多くの利潤率低下理論支持者たちが集めてきた経験的証拠の重要性について穏健に意見を述べる前に、いくつかの深刻な問題に答えておかなければならない。私には、データに対して洗練された対抗分析を企てるつもりも資格もまったくない。それゆえここでは、適切かつ有意義なデータを集めることの困難さについて、ごく一般的な考察を行うだけにしよう。

利潤率低下を示すデータはマルクスが主張したような特定のメカニズムの存在を必ずしも確証しない。これは、私見では利潤率低下法則に関する大部分の研究に対する最も重要な反論である。利潤率は無数の理由によって低下しうる。見てきたように、階級闘争の高まりが賃金を押し上げたときと同じように、十分な総有効需要が市場になれば利潤は減少しうる。技術革新が生じれば、その正味の影響はより大きな不平等の創出である。いかなる抵抗も対抗的諸力も存在しなければ富者はますます富み、貧者はますます貧する。マルクスの資本主義的蓄積の一般的法則は、このように機能するのである。一方、強力な国家機構に支援された、組織された労

働者階級は、利潤低下の危機を一般化させるほど高い貸金率を強要しうるかもしれない。これは一九六五年から七五年にかけて北アメリカとヨーロッパで生じたことである。闘争的な労働者階級の力のおかげで貸金は上昇し、利潤は減少し、生産力は停滞したのである。

資源の（とりわけ食糧、エネルギー、原材料に関連する）希少性と制限は、リカードウが描き出したメカニズムによって利潤低下を引き起こしうる。この議論を成立させるために、マルサス主義の言うような自然によって課された限界に訴える必要はない。希少性は投機的活動と有効需要に対する制限を通じて準備されるからである。石油と食糧の希少性は明らかに、より高額な地代を搾取するために操作された結果である。独占力の増大とおそらく私たちの時代にとってはより重要なものであるが、諸々の地代搾取力の強化は産業資本の利潤低下を引き起こしかねなくなっている。マルクスは地代の低下が利潤を増加させうることを容認したが、そうであれば地代の上昇が反対の作用を持つことを認めないことがあるか？ 貨幣資本それ自体に対する金利（利子）は、需給、競争、金融業者の派閥的階級権力といった諸条件によって制限を受ける。金利生活者たちは、ケインズが期待をこめて予測したような安楽死に苦しむどころか、いまだに産業資本家たちの犠牲の下で、剰余価値のまま大きな割合を獲得するのに最適な地位を確保している。これは直接的生産者の取り分の減少を意味している。

なぜ利潤率は低下するのかについては多種多様な理由があり、利潤率低下を指し示すグラフをどれだけ提示したところで、なぜ他のものではなくある特定のメカニズムが相応しいのか、その理由が明らかになることはない。ここで進むべき唯一の道は、労働の生産力の変化が利潤率に与える直接的影響を測定することなのかもしれない。労働の生産力を測定する際、マルクスは資本の有機的構成と価値構成とを区別していた。資本の有

機的構成は、一企業内部における、あるいはセクター全体ないし「部門」全体の内部における可変資本に対する不変資本の比率によって定義される。他方、資本の価値構成は資本の生産力を全体として測定するのである。これら二つの用語は区別されるべきだが、ほとんどの理論家は同意語として扱っている。(とりわけ固定資本の回転時間と生産の垂直的統合の度合いの場合には、「二つの用語の区別は」慎重に扱われなければならない (Harvey 1989: 125-133)。産業組織の形態は、資本の測定にとって決定的な問題である。頂上に鉄鋼プラントが建設され、「鉄鋼が」直接自動車生産に供給されるような鉄鉱石鉱山を想像してみよう。不変資本は鉱山に加えエネルギー投入に用いられる資本であり、またそのように統合された生産システムの別の局面で用いられる固定資本である。総価値の大部分は労働によって加えられた価値に帰される。さていま生産過程を鉄鉱石、鉄鋼、それから車を生産する別会社に分離してみよう。不変資本は平均して増加し、労働の割合は著しく減少するだろう。私が入ったこの事例はやや極端に思われるかもしれないが、この四〇年間の下請け会社の増加が会社内部およびセクター間の価値構成にいかなる影響を与えただろうかを考えてみてほしい。

一企業内部の平均的な資本の有機的構成を理解することは可能であるし、諸産業ないし『資本論』第二巻で詳述されたような「諸部門」内でさえもそうである。ところが資本全体にとっての価値構成はせいぜい同語反復に見えるか、最悪の場合完全に支離滅裂な概念に見える。その理由は、資本に関係する生産力の唯一の尺度が剰余価値生産であり、これこそが生産力の変化によって説明されるものだと考えられているからである (Marx 1976: 644)。他にも多種多様な問題がある。不変資本は投下資本 (長期的に使用しうる固定資本を含む) なのか、それとも生産期間 (どのぐらいの長さだろうか) において使用された資本の価値 (磨滅した固定資本価値の一部) なのか。資本家は剰余価値の割合に関心を持つのか、それとも量に関心を持つのか。

〔利潤率の傾向的低下の法則を証明するデータに関する〕第二の主要な問題は、次の理由から生じる。すなわち、理論の証明ないし例証のために用いられるデータが貨幣の観点から表現されているにもかかわらず、マルクスは自身の理論を価値の観点から規定しているからである。貨幣は価値と同等ではないが、価値表現には不可欠である。価値と貨幣という価値表現との関係は、深い矛盾を抱えている。伝統的には、非物質的な社会的価値の一般性は商品としての金銀という特定の物質によって表現されていた。これが社会的関係という非物質的なものが物質的表現形態を獲得するやり方である。問題は、金を生産するための特殊な諸条件があらゆる人間労働の一般性を代表していること、その際価値の社会性が私的個人による取得に晒されていることである。こうして貨幣はひとつの社会的権力を獲得するが、この社会的権力は統治と階級支配の道具として使用される。だが、一九七〇年代に世界的貨幣システムが金属を基礎とすることを止めたとき、貨幣は自身を代表すると考えられていたもの〔すなわち金属〕から実体的に離反できるような、独自の生命を獲得した。かつて金銀によって遂行されていた規律権力は中央銀行のそれによって置き換えられた。一九八〇年頃以降、通貨当局は盲執的にインフレ制御に力を注いだが、これは規律権力の移動を示す強力な指標である。とはいえ、アメリカの連邦準備制度理事会が量的緩和策を通じてマネーサプライに一兆ドルを追加しても、これは価値創造とは何の必然的関係も持っていない。株式市場において、こうしたことの大部分は富裕層と権力者たちにとってひじょうに重要な資産価値を押し上げるという結果に終わってしまうように思われる。

マルクスが記しているところによれば、市場価格と市場価値の量的乖離のみならず、名誉、良心、未開拓地、炭素排出先物といったものに見られるような質的乖離を妨げるようなものは何一つ存在しない。明らかに商品ではないものの中で、一体何があたかも商品であるかのごとく取引されるのかは誰にも分からな( Harvey

2014: contradiction)。現在では、収賄という投資（あるいはその合法的やり方としてのロビー活動）は、巨大な（そして利益の上がる）ビジネスである。もっとも利潤の高いビジネスのいくつかは非合法であり、世界中の様々なマフィアたちが資本蓄積の主要な中心となっている。特定のセクターでは生産への投資をまったくしなくとも、ロビー活動の成功によってかなりの程度利潤が増加しうる。電力事業ではロビー活動に投資をした方が、汚染物質除去技術を石炭火力発電所に導入するよりもはるかに巨額の利潤を上げることになるのである。

住宅建築の収益率は、信用システムを通じた住宅価格と金利収奪（地代と利子）への投機の動きに大きく依存している。マルクスが定義した価値利潤率は、ナイキのシューズの収益率とはほとんど、あるいはまったく関係がない。ナイキのシューズの貨幣的価値は、ブランド・キャンペーンの成功によって増加するからである（広告価値を生み出すのだろうか。Aridsson and Peterson 2013を参照）。同様に株式市場価格は、生産活動と生産能力に依存しているのと同じくらい、評判に依存している。価値創造と貨幣の実際の働きとは、ますます大きな隔たりを見せている。価値創造とその表現との間の矛盾は、通常、価値の観点から規定された理論を決定的に証明するものとして貨幣の尺度を用いる人々からは無視されている。しかし、この矛盾はマルクスの架空資本理論を補強するものである。

以上のことから、利潤に関するデータには価値がないなどと言いたいわけではない。むしろ正反対である。私たちは貨幣の世界を生き延び、貨幣が表現している価値という実体のよくわからないものを前にして商取引を行っている。貨幣利潤率は実在的なものである。結局、ビジネスは貨幣利潤率を十分に確保できなくなるとなり立たなくなってしまうのだ。私たちの生活や振る舞いに影響し、私たちの行為をしばしば導くのは、貨幣的なシグナルである。政策決定者たちは貨幣供給量に目をむけ、どの階級利益が救済または犠牲の対象にな

るかに応じて、経済——経済もまたひじょうに実在的な虚構である——をあちらこちらに動かすための戦略を引き出してくる。貨幣利潤率が低下していることに関する説得力のある証拠は、私たち全員に影響する重要な社会的事実であり、私たちは概してこの事実に対応するのである。

解決されなければならない厄介な問題がまだある。利潤（価値）が生産される場所とそれが実現される場所との間には隔たりが存在するからだ。中国の工場で生産された価値は、アメリカのウォルマートで実現されるかもしれない。そしてウォルマートがオクラホマで実現したものは部分的にニューヨークの金利生活者または金融業者たちのポケットに入るだろう（Marx 1978: Chapters 1-4; Harvey 2013a）。製造業における公表利潤率は、商人、金融業者、地主の取り分が上昇すれば低下するだろう。アップル社（アメリカ）が得るマージンの利潤率は二七パーセントと報告されている。ところが、アップルのコンピュータを生産するフォックスコン（中国）の利潤率は三パーセントである。商業資本と産業資本の力関係が、利潤率の均一化を妨げているのである。逆に言えば、マルクスが指摘しているように、地代と税金が減額されれば工業の利潤率は上昇するだろう。直接的生産者はより高い賃金を容認し、より少ない利潤を受け取る場合もあるだろうが、しかしそのときでも労働者は、人を食いものにするような地主、商人、電話会社、クレジットカード会社等々によって収奪し返されてしまうだろう。資本は、価値生産からもたらされた諸収入がそうであるように流動的であり、そのような流動性のパターンは錯綜している。システムの一点で収集されたデータは、システムの全体性における様々な運動を正確に表現していたり、していなかったりするだろう。

その他あらゆる種類の想定もまた、公表利潤に影響しうる。世界の貿易の大部分は、通貨圏をまたぐ内部移転コストの価格設定を固定している企業の間で行われているのだが、そうすることでそれらの企業は利潤を隠

すか、それを最も税率の低い課税管轄地域で登録できるようにするのだ。時として、結局のところ自社の株価を釣り上げることが、企業が実際の利潤全てを公表する唯一の理由であるように思われる。貨幣利潤データは何事かを私たちに教えてくれるが、実にそれは簡単に解析できるとはかぎらないものなのである。

それだから、利用できるいくつかのデータの疑わしさには十分な理由があるのである。近年のビジネス誌の報告によれば、ロバーツや他の研究者たちが提示する一連のデータは反対の結論を指し示しているにもかかわらず、アメリカのビジネスは高い利潤率で操業されているようである。連邦準備制度理事会の報告は、利潤率が上昇しなくとも、全体として驚くべき経済成長があったことを示している。「二〇〇〇年から現在まで、四半期の企業税引後利潤は五二九〇億ドルから一兆五〇〇億ドルまで増加している。年次ベースでは、企業税引後利潤では二兆一〇〇億ドルから六兆ドルまで成長が見られる」(Eisau 2014)。ビジネス誌はまた、再投資率が空前の低水準にあることを報告している。事業拡大への関心は低く（したがって低成長と持続的な賃金抑制が存在している）、その理由を有効需要の欠如に求める者もいる。部分的には再投資の欠如のせいであるとはいえず、アメリカにおける有効需要の衰退には三つの大きな要因がある。住宅市場、州政府の歳出、連邦政府の歳出である。利潤率が高いが新規の資本投下の収益率が低いというひじょうに奇妙な局面に、アメリカは直面しているわけである。

利潤率についてのデータの大部分は国民国家というデータ報告枠組みの内部で集計されており、一部の例を除いてグローバルな状況を代表しているなどと偽ったりはしない (Matio, n.d. を見よ)。中国、インドネシア、インド、ボリビア、マリ（現在のシリアとイラクについては言うまでもなく）で利潤率はどれほどであるか、いかにしてこれら全てが資本収益率についてのいくつかのグローバル・データに組み入れられるのかは単純に知られて

おらず、おそらくは知りえない事柄である。アメリカのために集計されたデータはもちろんそれ自身で有用であるが、たとえすでに提起されたその他全ての反論を脇に置いたとしても、グローバル資本に何が起きているのかについての証拠として理解することはできないのである。

しかしながら、価値生産の領域で生じているであろう事態についての指標として、潜在的妥当性を持っている一揃いのデータがある。こうしたデータを入手することは比較的簡単である。もしも利潤率の傾向的低下の一般的理論が正しければ、(相対的剰余価値の競争的追求によって強いられた)労働節約的な技術革新の拡大が意味することは、資本によって雇用される賃金労働者数の減少傾向である。周知のように、農業における雇用は工業化とともに劇的に減少しており、製造業におけるグローバルな労働力の割合は、機械化によって、生産が拡大しているにもかかわらずほとんど一定のままであり続けている(これは中国においてさえ真実である)。これは利潤率低下テーゼを支持する傾向にある。

だが、労働力比率全体をグローバル・スケールで見たととき、グローバルな労働力が膨大に増えていることに気づく。例えば、二〇〇七年に出された国際労働機関(ILO)のある報告書は次のように結論づけている。「二〇〇五年には、グローバルな労働力は概算で三〇億五〇〇〇万人であった。これは、一九八〇年以降一一億人以上——三五パーセント以上——増加した計算になる」(Kapsos 2007)。この数十年間の成長の大部分は人口増加と脱共産主義国家の世界市場への参入によって推し進められてきた。小農的な自給自足生活の破壊に加え、長期にわたって女性を労働力へと転化してきたことは大いに重要である。地域の諸特徴と諸差異(これらは局所的と言えども重要である)について考察することなしに、そのことから価値創造と剰余価値収奪に利用できるグローバルな労働力の減少を読み取ることは明らかにできない。追加の一一億人の労働者が示している

のは、剰余価値収奪の減少ではなくむしろ増加への期待が劇的に高まっていることである。ひょっとしたら利潤率の低下よりも上昇への期待の方が大きい。こうしたことは、絶対的剰余価値が相対的剰余価値と同じくらい簡単に収奪できるようになった状況の存在を物語っている。

この結論に対する唯一の反論は、活動中の賃金労働の増加が非生産的労働に吸収されてしまっている、あるいはそもそもそれは資本によって全然使用されていなかった(例えば、超富裕層に対する私的ボディガードのように)と主張することである。たしかに流入の大部分は、農業、鉱業、製造業における雇用増大ではなく、いわゆるサーヴィス経済の成長を原因としている。しかし非生産的労働と生産的労働の間の区別はこれとは別のものである。マルクスのカテゴリーの多くがそうであるように、彼がアダム・スミスの見解から離れば離れるほど、価値生産は個別的労働者ではなく「集团的」労働者に関係しているという考えを抱くようになればなるほど、また科学・テクノロジ・知識の生産を価値生産活動という概念のうちに統合しようとすればするほど、非生産的労働と生産的労働の区別はますます曖昧になっていく(Vercellone 2007)。マルクスのより厳密な諸定義に立脚してもなお、私たちが通常サーヴィスと呼ぶものが明らかに価値生産的であるような場面が山ほどあるのである。

例えば、マルクスの主張によれば(1978:225-229)、輸送は価値生産的であり、潜在的には剰余価値生産的である。それゆえ物流セクターが好調であれば、そこは価値と剰余価値生産に満ちている。アメリカにおける最大の労働雇用主の二社という点では、ジェネラル・モーターズはマクドナルドに席を譲った。しかしなぜ私たちは自動車製造は価値を生産し、ハンバーガー作りはそうではないと言うのだろうか。レストランは価値生産的であり、剰余価値生産的である(ウェイターでさえ価値生産における「集合的労働者」の一部とみなされる)。してみれば、私

たちがなすべきなのは、下請けのデザイナー、ブランド戦略・広告会社、科学者や技術職員、さらにはコンサルタントや会計士でさえ、みな集团的労働者の一部であると提案することだけである。そうすると、あと一歩で一一億人の追加労働者たちのかなりの部分を価値生産の領域で取り扱うことができるところまで来る。誤解が生じるのは、慣習的にサーヴィスと定義されてきたものがしばしば生産的諸活動に変わってしまうからである。もしもマルクスが、生産的労働を資本が収奪可能な剰余価値を創造する人々と定義した点で正しいとすれば、利潤のために行われる教育ないしセキュリティ・サーヴィス（例えば教師や警備員）は、生産的労働者であることになる。「学校教師が」とマルクスは言う（1936, 64）、「生産的労働者であるのは、彼がただ子どもの頭に労働を加えるだけではなく企業家を富ませるための労働に自分自身をこき使う場合である。この企業家が自分の資本をソーセージ工場に投じないで教育工場に投じたということは、少しもこの関係を変えるものではない」。

先進資本主義世界の大部分では、多くの巨大工場が久しく姿を消し、価値と剰余価値を生み出す労働がなくなってしまうように見える。しかしマンハッタンの八六丁目二番街の街角に立ってみると、おびただしい数のデリバリー・バス・タクシーのドライバーや、ケーブル修理のために道を掘り返しているペライゾンやコン・エジソン出身の労働者を目にする。ストリートを下っていくと、給水管が修理されていたり、他の労働者たちが新しい地下鉄を建造していたりする。道の片側で建築用足場が解体されているかと思えば、反対側では足場が組み立てられている。コーヒーショップはコーヒーを作り続け、二四時間営業の地元の食堂では、労働者たちがスクランブルエッグを調理し、スープを客に提供し続けている。これらは（あらゆる種類の教育工場がそうであるように）近年目覚しく増大している類の仕事であり、いずれも価値と剰余価値を生産している。都市生活の

生産と再生産に使用される労働の半分でもこうした価値と剰余価値の生産に使用されれば、農業の工業化で生じた損失と、製造業のオートメーション化によって生じた損失は、簡単に埋め合わされるのである。

急速に拡大するこのような価値生産的労働力は、(かつての工場労働と比較して)搾取を抑制するための集団的交渉力をほとんど持たない。それゆえ、収益性を低下させるよりもむしろ上昇させるような諸条件はすっかり整ってしまっている。たしかに、利潤率が低下していたとしても、剰余価値の総量は増加している。しかしながら、この四〇年間に生じた労働力参加の大規模な拡大がさらに繰り返されるといえるのは、ありそうもないことである。アフリカには未開発の労働予備軍がまだかなり存在している。中東、南アジア、東南アジアにもいくらか存在している。しかし女性の労働力への吸収と、中国と旧ソ連勢力圏の国々のグローバル労働市場競争への参加が繰り返されることはありえない。あらゆる人口成長率の衰退(すでに南ヨーロッパの多くと日本ではマイナスである)は、収益性の条件をいつの日にか変えるだろう。だが現在では、増大する労働参加に関する証拠から判断するに、現代資本主義の行き詰まりの原因を利潤率の傾向的低下の法則に帰そうとする人々は、深刻な誤りを犯している。現在の諸条件は、剰余価値生産・搾取が圧縮されるのではなく、それらが大規模に増大することを暗示しているのである。

私が利潤率低下法則の理論家を過度に目の敵にし、批判のために彼らを選び出したように思われるかもしれない。私はたしかにそうしたが、しかしそれはマルクス主義の伝統から生じた様々な恐慌理論の中で、利潤率低下法則がマルクス主義者の想像力の中でアイコン的な位置を保持しているからである。このことは、マルクスが展開した他の可能性についての考察を除外するようなやり方の中に典型的に現れている。

私には、マルクスの仕事の中には恐慌形成についての単一原因理論は存在しないように思われる。マルクス

自身がこのことを明言にしている(1972: 120)。「ブルジョワ的生産に存在している諸矛盾は」と彼は書いている、「ブルジョアの生産のなかに存在する諸矛盾はもちろん相殺し合い、均等化の過程を経るが、しかし、この過程は同時に恐慌として、ばらばらに引き裂かれて相互にかかわりなく存在ししかも相互に全体をなしている諸契機の暴力的な結合として、現象する」。マルクスの研究の大部分は、特定の恐慌において同時に出現する諸要素、ばらばらに引き裂かれているが相互に関連する諸要因を重点的に扱っている。このことは利潤率低下理論という目的論を掘り崩し、多様であるが相互に関連する諸矛盾の相互作用にしたがってあちこちと移動する状況依存的な諸力に置き換える。一言でいえば、資本の流通過程全体のなかで、地理的に、セクター毎に、そしてひとつの結節点から別の結節点まで(例えば貨幣、商品あるいは生産)、資本主義は恐慌への傾向を持ち、そのまわりを動き回る(Harvey 2010)。資本主義に内在する多様な矛盾と恐慌への傾向は永遠に再創造され、同時に異なった装いで出現する(Harvey 2014)。システムティックなものとは状況依存的なものとの関係は融合し始め、同時に先鋭化される。研究が進展するにつれてマルクスが獲得するに至った見解はこのようなものであったように思われる。たとえそうではなかったとしても、資本の複雑な歴史が示唆しているのは、これこそが今ここで資本主義の歴史を考えるやり方だということである。思うにマルクスが正しかったのは、資本蓄積が直面しなければならぬ多くの障壁の中で最大のものは資本それ自体である、という原理を決して手放さなかった点であった。また、多くの他の有機的システムと同じように、資本〔主義〕はある時点で突然変異ないし死を迎える運命にあるという原理を保持しつづけた点であった。その上で彼はいかにして、なぜそうであるのかを理解するために、ますます微細になっていく理論を必要としたのだ。疑いもなく、よき史的・地理的唯物論者として私たちは同じ目的を追求し続けるべきである。

## 参考文献

- Arvidsson, A. and N. Pieterse (2013), *The Ethical Economy: Rebuilding Value after the Crisis*, New York: Columbia University Press.
- Boccard, P. (1974), *Études sur le Capitalisme Monopoliste d'Etat, sa Crise et son Issue*, Paris: Seuil.
- Carchedi, G. (2011), *Behind the Crisis: Marx's Dialectics of Value and Knowledge*, Leiden: Brill.
- Edsall, T. (2014), 'America Out of Whack', *New York Times*, Opinion Section, 23 September.
- Glyn, A. and R. Sutcliffe (1972), *British Capitalism, Workers and the Profit Squeeze*, Harmondsworth: Penguin.
- Harvey, D. (1982), *The Limits to Capital*, Oxford: Basil Blackwell.
- (2010), *The Enigma of Capital*, London: Profile Press.
- (2012), 'History versus Theory: A Commentary on Marx's Method in Capital', *Historical Materialism*, 20(2), 3-38.
- (2013a), *A Companion to Marx's Capital, Volume 2*, London: Verso.
- (2013b), *Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution*, London: Verso.
- (2014), *Seventeen Contradictions and the End of Capitalism*, London: Profile Press.
- Hennich, M. (2009), 'Reconstruction or Deconstruction? Methodological Controversies about Value and Capital, and New Insights from the Critical Edition', in R. Bellonfore and R. Fineschi (eds), *Re-Reading Marx: New Perspectives after the Critical Edition*, London: Palgrave Macmillan.
- (2013), 'Crisis Theory, the Law of the Tendency of the Profit Rate to Fall, and Marx's Studies in the 1870s', *Monthly Review*, 64(11), available at <https://monthlyreview.org/2013/04/01/crisis-theory-the-law-of-the-tendency-of-the-profit-rate-to-fall-and-marx-studies-in-the-1870s/>.
- Kapsos, S. (2007), 'World and Regional Trends in Labour Force Participation: Methodologies and Key Results', *Economic and Labour Market Papers*, Geneva: International Labour Organization.

- Kimman, A. (2012), *The Failure of Capitalist Production: Underlying Causes of the Great Recession*. London: Pluto Books.
- Maito, E. E. (n. d.), 'The Historical Transience of Capital: The Downward Trend in the Rate of Profit since XIX Century', unpublished paper; University of Buenos Aires, Argentina.
- Marx, K. (1972), *Theories of Surplus Value*, Volume 3. London: Lawrence & Wishart.
- (1973), *Grundrisse*, Harmondsworth: Penguin.
- (1976), *Capital Volume 1*, Harmondsworth: Penguin.
- (1978), *Capital Volume 2*, Harmondsworth: Penguin.
- (1981), *Capital Volume 3*, Harmondsworth: Penguin.
- Moseley, F. (1990), *The Falling Rate of Profit in the Postwar United States Economy*, New York: St Martin's Press.
- (2014), 'The Development of Marx's Theory of the Falling Rate of Profit in the Four Drafts of Capital', paper delivered to the MEGA symposium at the Institute for Economic and Historical Research, Amsterdam, 10-12 October.
- Reuten, G. (2009), 'Marx's General Rate of Profit Transformation', in R. Bellofiore and R. Fineschi (eds), *Re-Reading Marx: New Perspectives after the Critical Edition*, London: Palgrave Macmillan.
- Roberts, M. (2014), 'The Nature of Current Long Depression', presentation at Marxism 2014, London, 11 July.
- Shaikh, A. (2010), 'The First Great Depression of the 21st Century' in L. Panitch, G. Albo and V. Chibber (eds), *Socialist Register 2011: The Crisis This Time*, London: Merlin Press.
- Thomas, P. and G. Reuten (2014), 'Crisis and the Rate of Profit in Marx's Laboratory', in R. Bellofiore, G. Starosta and P. Thomas (eds), *In Marx's Laboratory: Critical Interpretations of the Grundrisse*, London: Haymarket.
- Vercellone, C. (2007), 'From Formal Subsumption to General Intellect: Elements for a Marxist Reading of the Thesis of Cognitive Capitalism', *Historical Materialism*, 15, 13-36.

デヴィッド・ハーヴェイ ニューヨーク私立大学特別教授

1935年生まれ。専門は経済地理学。邦訳に『経済的理性の狂気——グローバル経済の行方を〈資本論〉で読み解く』（作品社、2019年）、『資本主義の終焉——資本の17の矛盾とグローバル経済の未来』（作品社、2017年）など。

こたに・ひでお 群馬大学教育学部准教授

1981年生まれ。専門は哲学・倫理学・社会思想史。共著に『ベーシックインカムを問いなおす——その現実と可能性』（法律文化社、2019年）、論文に「政治に対する道徳の優位——いわゆる『嘘論文』におけるカントのコンスタン批判について」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第67巻、2018年）など。

## 活動記録 [2020.3.1-2021.7.10]

2020.3.20

第 25 回定例研究会（於 一橋大学）

報告 森田成也（大学非常勤講師）

「セックスワーク論の問題性」

[イベント] オンライン入門講座

開催：オンライン

2020.6.18

第 1 回：コロナ・ショックドクトリン

講師：斎藤幸平（大阪市立大学准教授）

2020.7.3

第 2 回：新自由主義的統治とは何か——マルクス・フーコーとの差異

講師：佐々木隆治（立教大学准教授）

2020.10.10

第 3 回：マルクス主義フェミニズム

講師：鈴木由真（東京大学大学院博士課程）

2020.11.21

第 26 回定例研究会（オンライン）

報告① カルロス・ホルニャック（岡山大学）

「V・K・ドミトリエフによる古典派価格論批判の再検討」

報告② 佐々木隆治（立教大学准教授）

「マルクス均衡と生産価格

——『図解 社会経済学』における生産価格論の再検討をつうじて」

報告③ E・マイケル・シャワティール（宮崎大学助教）

「久留間鮫造の『恐慌論研究』の英語版について——企画概要と翻訳課題等」

2021.7.10

[イベント] シンポジウム

「ルカーチの物質代謝論と人新世の環境危機」

——ドイッチャー賞受賞記念講演日本語版

開催：オンライン

講師：斎藤幸平（大阪市立大学准教授）

[その他]

2020.12.17

マルクス研究会の齋藤幸平会員が第17回日本学術振興会賞を受賞されました。

2021.2.10

齋藤幸平会員の著書『人新世の「資本論」』（ちくま新書、2020年）が新書大賞2021を受賞されました。

おめでとうございます！



# マルクス研究会規約

## 第一条 名称

本会は「マルクス研究会」と称する。欧文表記は Marx Society of Japan とする。

## 第二条 目的

本会はカール・マルクス（以下、「マルクス」とする）の理論および思想について自由な議論を交わす場を提供し、マルクス研究の発展に寄与することを目的とする。

二項 本会は前項の目的を達成するために次のことを行う。

- 1 年1回の研究会（年次大会）の開催
- 2 年3回の定例研究会
- 3 研究年誌の編集作成
- 4 その他必要な事業

## 第三条 運営

本会は会務処理のため幹事若干名が運営にあたる。

二項 本会は下記を所在地とする。

〒154-0012

東京都世田谷区駒沢 1-23-1

駒澤大学経済学部現代応用経済学科 明石英人研究室内

## 第四条 会員

本会の会員は、第二条に定める目的に賛同する個人で、幹事の承認を受けたものとする。

二項 本会の会員は第二条に定める事業を行う権利を有し、会費を納入する義務を負う。

三項 本会に会員として加入しようとする者は、加入申込書を幹事に提出し、幹事会において認められなければならない。

四項 本会を退会しようとするときは、退会届を幹事に提出するものとする。

五項 会員の個人情報（氏名、所属、メールアドレス）は事務担当者が責任をもって管理する。

会員および幹事への連絡は、ホームページ・電子メールを活用する。

## 第五条 総会

この会の総会は、会員をもって構成し、年に1回開催するものとする。

ただし、必要があるときは臨時に開催できるものとする。

二項 総会は、以下の事項について議決する。

- 1 規約、事業等の変更
- 2 解散
- 3 事業報告及び収支予算
- 4 幹事の選任又は解任
- 5 その他会の運営に関する重要事項

## 第六条 会費

本会の運営に必要とする会費（年会費）を、次のとおり徴収する。

学生・非常勤研究者・一般は2,000円、常勤研究者は4,000円

## 第七条 会計年度

本会の会計年度は毎年3月1日より翌年2月末日までとする。

## 第八条 設立年月日

本会の設立年月日は2016年2月27日とする。

## マルクス研究会年誌2020 [第4号]

---

2021年7月10日 第1刷発行

[編集・発行] マルクス研究会

連絡先：info@marxresearchsociety.com

〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-23-1

駒澤大学経済学部現代応用経済学科 明石英人研究室内

HP：http://marxresearchsociety.com/

[発売] 株式会社 堀之内出版

連絡先：info@horinouchi-shuppan.com

〒192-0355 東京都八王子市堀之内3-10-12

フォーリア23 206号室

TEL：042-682-4350 / FAX：03-6856-3497

HP：https://www.horinouchi-shuppan.com/

ISBN 978-4-909237-22-4

©2021 Marx Society of Japan, Printed in Japan

落丁・乱丁の際はお取り換えいたします。

本書の無断複製は法律上の例外を除き禁じられています。